

## 大谷派婦人法話会編『婦徳』 総目次

佐賀枝夏文

### 解説

#### はじめに

大谷派婦人法話会の機関誌『婦徳』の総目次の検索を終え、同会の沿革や同誌出版事情の輪郭が見えてきた。同誌は、一九〇七（明治四〇）年に『婦人法話会 第一輯』（次号から『婦徳』）として刊行されてから、終戦の前年一九四四（昭和一九）年まで明治・大正・昭和と刊行されたものである。通巻として『婦徳』は四三二号まで出版されている。

同誌は、大谷派婦人法話会が開講した法話、講話を中心に、同会の機関誌として編集された。雑誌のジャンルとしては、法話、講話集を編集の柱とした宗教雑誌、家庭婦人雑誌というコンセプトで出版されたものである。

執筆陣は大多数が男性であり、男性中心の社会構造が色濃く反映している。婦徳という言葉に象徴されるように、倫理道徳的な色彩が濃厚に反映した婦徳涵養がテーマとなっている記事も多く見られる。同誌の特徴として、記事内容に道徳的、教訓的な内容が盛り込まれたものが比較的多い。婦徳涵養には二つの方向性があることが指摘できる。ひとつは、家父長制の「家」の秩序維持を「婦徳涵養」が、機能していたと考えられる一面である。これは、女性の社会的進

出を遅らせた原因ともなったものである。もう一つは、聞法による人間性の涵養である。法話、講話は南条文雄、舟橋水哉、吉谷寛寿、住田智見、柏原祐義ら真宗大谷派の代表的な学者・教学者が名を連ねている。このことの意義は高く評価されるべきものである。女性に聞法の場を提供し続けたことは、誇れる伝統といえるであろう。また、真宗大谷派からは優れた教学者を世に輩出しており、この母体が同会であることをあらためて認識する必要がある。真宗大谷派教団を大きく支えてきた精神的基盤を成してきたものである。

同誌のコンセプトは一宗教教団の精神性問題を越えて、日本の精神文化の一翼を担ったと考えられる。その点から考えると同誌は、まさに精神文化の伝統を顕彰する資料であり、「教学の真宗大谷派」の伝統が生きているといえる。

### 大谷派婦人法話会と機関誌『婦徳』の沿革

大谷派婦人法話会の創設の経過と、機関誌『婦徳』の出版の経緯を辿るといくつかの歴史の流れが見えてくる。同会は一八九〇（明治二三）年九月二〇日（真宗教学研究所編『近代大谷派年表』）に創設されたものである。東本願寺で行われた法話会を嚆矢とし、会員組織として発展してきたものである。

組織発展と拡大の一因は、次の記事から読み取ることができる。『婦人法話会』第一輯（『婦徳』の創刊号）に大谷派婦人法話会の沿革が記されている。同記事、「最近数年間に於ける会務の概況」からもおおむねその輪郭を知ることができる。同会の組織強化には次のような社会情勢も要因として加わったと考えられる。

一昨々年即ち三七年二月より、時局の趨勢社会の状態に鑑み、会務に刷新を加へ、会則宣言の趣旨に基きて、広く全国に二万五千の会員を有し、尚ほ着々此等の事業に向つて発展しつゝあり

（大日本仏教青年興徳会本部『婦人法話会』第一輯、「最近数年間に於ける会務の概況」一部抜粋）

会組織強化が図られたとき、すでに二万五千人の会員数を有するまでになっていた。さらに組織強化には、社会情勢にあったと読みとることができる。記事にみられる時局とは、一九〇四（明治三七）年二月一〇日のロシアに宣戦布告したことである。その後の記録では、十二万余の会員と二百有余の支部支場に発展している。（一九一六（大正五）年『婦徳』広告募集記事より）同会の組織の形態は、東本願寺に本部を置き、全国教勢拠点に支部を配置、活動の拠点として支場を置いて活動が行われていた。

明治四〇年代の支部と支場の配置の様子は、次のようである。

大阪支部 大阪市大谷派難波別院内

江沼支部 加賀大聖寺町慶徳寺内

金沢支部 金沢市大谷派別院内

羽咋支部 能登羽咋本念寺内

富山支部 富山市大谷派別院内

兵庫支部 摂津切戸柳原寺内

能美支部 加賀小松町本覚寺内

岐阜支部 岐阜市大谷派別院内

名古屋支部 名古屋市大谷派別院内

手宮支部 北海道小樽浄應寺内

また、地方の支場として寺井支場をはじめ次のところに配置された。

寺井支場 加賀寺井稱佛寺内

足尾支場 下野足尾大谷派説教場内

東岩瀬支場 越中東岩瀬

濱方支場 越中濱方

能美支場 加賀小松本蓮寺内

同会の活動は、支場での法筵の開催を中心に行われたと考えられる。本部の活動の様子は、東本願寺では毎月十日に開かれ、支場寺院では下記のように法筵が開催された。

5日 西洞院上長者町上ル 長徳寺

6日 上立売大宮東入ル 徳圓寺

7日 新シ町蛸薬師下ル 真蓮寺

8日 松原通西洞院東入 光圓寺

10日 本山寢殿

13日 間ノ町上数珠下ル 佛願寺

13日 堀川三条下ル瑞蓮寺

14日

15日 五条三条下ル 善立寺

18日 富小路四条下ル 徳正寺

19日 三条大橋東二丁目 正林寺



20日 川原町四条上ル 了徳寺

21日 日暮通樞木町上ル 等観寺

24日 麩屋町姉小路上ル 泉徳寺

同会は、一八九〇（明治二三）年に京都東本願寺で誕生した会組織である。一方、東京の東京本願寺（浅草別院）においても同一名称の会組織がある。これは、一九〇一（明治三四）年二月に浅草別院貴婦人会を婦人法話会と改称して誕生したものである。（『真宗』第三号、一九〇一（明治三四）年）この両者の設立経緯は、会則を比較して見る限り、事務機構が異なり、会則もやや異なる。先発して京都に本部を置く同会と、後発の浅草に事務所を置いた婦人法話会は、しばらくは併行して存在したと考えるのが妥当であろう。その根拠としては、同会と浅草の婦人法話会の会則の趣旨文の体裁に違いが見られること。同会の支部を教勢拠点である東京に置いていないことが理由として考えられる。また、同会の正会員会費は月額五銭に対し、浅草の婦人法話会は月額三十銭と徴収額に違いが見られることなどがあげられる。両者の会則の冒頭部分を比較すると、次のような差異がある。

#### 大谷派婦人法話会本部規則

第一条 本会は大谷派婦人法話会と稱す

第二条 本会は本部を大谷派本山内に置く

第三条 本会は二諦相依の教旨に基き専ら婦徳を涵養し来世の得脱を期するを以て目的とす

（『婦人法話会』第一輯、一九〇四（明治四〇）年一部抜粋）

東京本願寺（浅草別院）に誕生した婦人法話会の規則と比較してみると、やや異なることがわかる。下記のは、東京本願寺（浅草別院）の婦人法話会の会則である。

婦人法話会規則

第一条 本会の目的は悲智圓滿なる仏陀の妙法を尊信し二諦相資の宗義によりて安心立命を得益善良の義徳を實踐し勉めて社会の弊風を矯正するにあり

第二条 本会を名づけて婦人法話会と云う

第三条 本会の事務所を浅草本願寺に置く

（『真宗』第三一号、一九〇一（明治三四年）一部抜粋）

同会の機関誌として一九〇七（明治四〇）年の五月二五日に大日本仏教青年興徳会より『婦人法話会』第一輯として出版された。『婦徳』の名称は第二号からで一九〇八（明治三八）年四月一〇日出版のものからである。このような経緯で同会は誕生し、機関誌『婦徳』が出版された。

大谷派婦人法話会の設立趣旨

同会の設立趣旨は、「大谷派婦人法話会本部規則」に次のように目的が謳われている。

第四条 本会は前条の目的を達成する為め左の事を行ふ

一 毎月一回（十日）本山内に於て法筵を開く

但し布教者の選定は教学部に依頼すること

一 便宜の箇所支部又は支場を設け毎月定例法筵を開く

- 一 本会の発達に伴い慈善的事業を起こし若しくは之を補助することあるべし
- 一 本会は春期に於いて総会を開き前年度の会務を報告し、秋期には追吊法会を執行す
- 一 天災地変若しくは国家の事変に際しては同胞の困苦を慰藉し奉公の実意を表彰す

第十一条本会には左の役員を置く

- 一 総裁 一名 大谷派法主御裏方を推戴す
- 一 会長 一名 大谷派新法主御裏方を推戴す
- 一 幹事長 正副二名 名誉会員中より之を推薦す  
(財団理事長を兼ねるものとす)

幹事 若干名特別会員より之を選任す

(互選を以て財団理事を兼ね)

- 一 常置相談役僧俗四名相談役中より選任囑託す

このように同会の目的は、第三条「本会は二諦相依の教旨に基づき専ら婦徳を涵養し来世の得脱を期するを以て目的とす」と掲げている。また、具体的な活動は①定期的に真宗の教えをいたたく機会を開催②慈善事業を起こす、慈善事業を補助する。③追吊法会の執行④災害救助功労者、社会的功労者の表彰を掲げている。本部規則に準じて支部規則が同時に整備されて施行された。組織の要として総裁に大谷派法主御裏方を推戴し、会長には大谷派新法主御裏方を推戴し、名誉会員より正副二名が推薦され任にあたった。

浄土真宗本願寺派の女性団体の動向を見ると、一九〇四(明治三七)年、時勢に呼応して本願寺派は、大谷壽子裏方を

会長に「仏教婦人会」を創設している。東西本願寺の婦人組織化はこのようなして行われた。

### 『婦徳』の体裁

機関誌『婦徳』は、大谷派婦人法話会の機関誌として役割を担い、時代とともに編集方針、記事の体裁も変遷している。体裁は巻頭言にあたる「本領」、婦徳にまつわる記事、法話、演説と続き末尾に時報としてニュースが掲載されている形が定番である。創刊から毎号ではないが、総裁、会長を中心にした会員の集合写真をグラビア写真として掲載している。印刷は法蔵館に委託されていた。

初期の創刊から三五号までは、表紙に婦徳の表題、号数を配し、花をデザインし中心には教典からの聖句などが毎回時宜に叶ったものが掲載された。三六号以降「婦徳」文字のデザインを中央に配したシンプルなものに変更された。「婦徳」の文字のデザイン化した表紙がその後に変更を加えながら継続している。一〇一号から一〇六号までは、毎号意匠が異なる。一〇七号で椿のデザインを配したものが一一八号まで継続している。一九二五（大正一四）年新年号からお釈迦様にささげるスジャータが描かれている。一九三九（昭和一四）年一月からは紙面をB5判へ広げ、版組を大幅に変更している。表紙を飾った意匠は、内容と共に変遷を辿っている。どの号にも簡素で清楚さが共通している。戦時下には、物資不足、その他の事情から、新聞形式に簡便化された時代がある。

### 関東大震災と『婦徳』記事

大谷派婦人法話会は会則第四条「一天災地変若くは国家の事変に際しては同胞の困苦を慰藉し奉公の実意表彰す」と掲げている。一九二三（大正一二）年の九月一日に関東大震災が東京を襲った。翌月号第一八八号には「罹災者救護所」の写真十一葉を掲載し救援活動を報道している。記事として禿義峯「大震災の啓示」、藤村学「東京の大震災」、一八九

号では、近藤純悟「震災と国民の志気」、高濱哲雄「東京で見た事感じた事」と実状を報道している。一九〇号では、支部支場震災救護概要(一)、救護の後に(一)と大谷派婦人法話会の支援活動が緒につき、その活動報告の記事が掲載されている。一九一号には、支部支場震災救護概要(二)が掲載されている。同記事は一九二号まで掲載された。また、一九二号からは関東大震災義捐金寄附者氏名の掲載が行われている。義捐金寄附者氏名の掲載は一九三号にも引き続き行われた。これらの一連の記事から同会の活動の一端が窺われる。

その伝統はすでに一九一四(大正三)年、七三号と七四号に救済金義捐者芳名録として掲載され、活動の一端であったことがわかる。関東大震災その後では、一九二七(昭和二年二三〇号と二三一号では北丹震災義捐金寄附者氏名を掲載しており、単発的ではあるが同会の活動が位置付けられていたことが読みとれる。

### 慈善・社会事業の関連記事

大谷派婦人法話会は会則の第四条「一本会の発達に伴ひ慈善的事業を起し若くは之を補助することあるべし」と謳い活動の目標を明確に方向づけている。第一八号、大溪専「家庭衛生と仏教」、第二二一号に「病床婦人の法悦」の記事が見られる。大溪は大谷派の慈善事業家で看護婦(看護師)養成を先進的に押し進めた人物で、仏教精神を看護に生かそうと腐心した。医師で医学史では著名な富士川游「小児の身体」などの記事もみられる。同会が関与した無料宿泊所(現ハローワーク)の記事としては、一九一六(大正五)年第一〇三号に京都無料宿泊所職業紹介所彙報が掲載されている。同記事は一〇四号、一〇五号、一〇六号、一〇七号、一〇八号に掲載されている。継続しているので京都の無料宿泊所と職業紹介の活動状況を知る貴重な資料となるであろう。一九一八(大正七)年一二三号には、「慈善市の模様」の挿し絵が掲載されている。これはチャリテイバザーの先駆的なものであろう。

## 主な執筆陣

創刊当初から、四三二号まで、法話、講話、記事執筆陣は圧倒的に男性である。真宗大谷派の関係者の法話、講話が掲載されている。二八号には井上圓了「宗教と教育」の講話が掲載されている。南条文雄の法話、四号と五号「祖師の同情」、六号と七号「平生業成」、八号「慧燈大師の同情」、一一号「感恩報徳」など草創期の『婦徳』紙面を飾っている。執筆者は真宗大谷派の代表的な教学者、学者が名前を連ねている。また、大西憲明が執筆陣に加わり、育児相談などの記事が彩りを添えている。大西の論文はシリーズ掲載の形式を取っている。三五八号「誌上育児相談」、三五九号「誌上育児相談」、三六〇号「誌上育児相談」、三六一号「誌上育児相談」、三六二号「女性心理と宗教」、三六三号「女性心理と宗教」、三六四号「女性心理と宗教」、三六六号「女性心理と宗教」、三六七号「女性心理と宗教」、三六九号「女性心理と宗教」三七〇号「女性心理と宗教」として連載された。

## 女性団体の動向

主な女性団体の組織化の動向は、一八九三（明治二六）年四月東京矯風会、キリスト教関係婦人団体を糾合して全国的組織の日本基督教婦人矯風会を設立、同年『婦人矯風会雑誌』を刊行している。真宗大谷派の奥村五百子は、一九〇一（明治三四）年三月に偕成社で愛国婦人会を結成している。同会はその後わが国最大の女性団体へと発展し、終戦を迎える。一九〇四（明治三七）年本願寺派、仏教婦人会が創設されている。大谷派婦人法話会は、このようにわが国、女性団体の萌芽期と発展期、拡大期と歩調を同じくしている。

## 自由なき秩序社会と婦徳涵養

歴史的な変遷のなかで家父長制の「家」を、「自由なき秩序社会」であったと表現することができる。地縁、血縁の共同体という序列と秩序のなかで人々は、礼節を重んじる勤勉な民衆として生きてきた歴史がある。序列と秩序は封建制度のもとでつくられた、体制維持のシステムである。保守的な秩序や序列に重きを置いた道德規範は、終戦を迎えるまで継承された。

「家」意識と近代化の意識構造とは、ある面に対立していた。わが国は、封建社会から近代化を成しとげ、政治・経済部面の近代化を急いだ。反面、基盤である家族は家父長制のもとで、秩序を第一義とした精神性を固持して継承された。

家族が近代化されたのは、終戦以降である。家父長制は、秩序維持に重きを置き、社会道德の涵養で維持された。秩序重視の社会規範の一面を『婦徳』記事に見ることができる。婦徳涵養は、家庭経営の最重要課題であると考えられたことが、同誌から読みとることができる。保守的な体質は、女性に犠牲を強いるような内容が散見される。この原因は、男性の筆になるものということが影響していると考えられる。社会秩序や「家」の秩序維持が継承されたのは、女性の忍従と犠牲の代償であった。この事実は歴史の証言として、記憶にとどめておかねばならないことである。

しかし、近年の秩序崩壊は見過ごすことのできない問題が多発している。高度に発達した市場経済を背景に都市化、過疎化が進展し、地縁、血縁を軸にした共同体は崩壊して久しい。戦後「自由なき秩序社会」から、「秩序なき自由競争社会」へ移行した。家族は、「秩序なき自由競争社会」がすすみ、連帯が失われ孤立化している。秩序なき社会は、多くの社会病理を生み出し、凄惨な犯罪が多発している。家族の崩壊は、わが子への児童虐待、ドメスティック・バイオレンスなどを生み出している。これらは秩序崩壊を動因と考えられる。

復古的な秩序への回帰ではなく、あらたな秩序の構築が求められている。この課題は、大谷婦人会に付託された課題として考えるべきだろう。受け継がれた『花すみれ』のすすむべき道でもあるといえるであろう。

### 欠本、本誌中の用語について

雑誌の蒐集は予想を超えて困難な作業である。雑誌が創刊から終刊まで保管されていることは珍しいことである。同誌は幸い大谷派婦人法話会、そして大谷婦人会によって整然と保管管理されていた。大谷大学の図書館においては、部分的に保管されているだけであり、如何に雑誌保管が困難な作業であるか理解できる。また、保管管理がいかに行き届いても、長い時間の経過の中で欠本があることはいたしかたのないことである。欠本ではないが、戦時中冊子としての体裁が取れなかった時代もある。

本誌の中にはすでに使用されていない用語や、検討吟味され不適切な用語として判断が下されているものも散見される。同誌掲載の論文記事の論拠において女性学の観点からは妥当性を欠くことが指摘された問題や論拠に基づく論文や論評もある。資料的価値という観点からまた、研究に資するという点から訂正、削除しないで総目次をデータ化した。

### 結 び

大谷派婦人法話会編『婦徳』の全貌が姿を現した。同会の社会的貢献を顕彰すべく雑誌蒐集と研究に着手した。同誌との出会いは、わが国の精神文化の尋源ともいえるものに会った感動を覚えた。今後、同誌総目次を手がかりに研究がすすむことを心から願う。先に復刻をみた大谷派慈善協会編『救済』（不二出版から復刻）とともに研究の幅が広がることを願っている。監獄教誨の嚆矢である真宗大谷派の社会貢献を顕彰することは、後輩としての責務であると考えている。学問は、そのあゆみの歴史に学ぶことの意義は大きい。また、真宗大谷派の先人の社会貢献のあり方は、混沌とし



た今の時代に通じるものがある。

同誌の終刊後のあゆみをみると、一九四四（昭和一九）年、四三二号で『婦徳』は終り、やや時間を経過して『大谷婦人叢書』が一九四七（昭和二四）年の秋から一九四九（昭和二六）の一月まで一六輯が出版されている。その後、一九四九（昭和二六）年の二月に『花董』として創刊され、現在にいたっている。記念すべき『花董』の創刊号は、藤島達朗の執筆記事と、新進の日本画家、近藤千尋の筆による「橘夫人念持佛の圓光」が表紙を飾った。雑誌名の『花すみれ』は、初代の『婦徳』、『大谷婦人叢書』と引き継がれて三代目である。その歴史は大谷派婦人法話会から、戦後に大谷婦人会に引き継がれ現在に至っている。明治以降の教団史の重要な役割を果たした同会と同誌は、教団を俯瞰する資料的価値は高いと考えられる。

尚、今回の同誌総目次の蒐集検索の作業には、大谷大学真宗総合研究所、大谷婦人会の全面的な協力によって実現した。ここに深甚の謝意を表したい。

#### 参考文献

- 大谷派婦人法話会編『婦徳』（一号～四三二号）一九〇七～一九四四年  
大谷婦人会編『花董』（創刊号）一九四九年  
真宗教学研究所編『近代大谷派年表』一九七七年  
真宗大谷派宗務所出版部『宗報』等機関誌復刻版  
佐賀枝夏文『ひとり親家庭と家族福祉』（『家族福祉論』所収）勁草書房二〇〇二年  
佐賀枝夏文『救済』解説・総目次・索引「不二出版二〇〇一年」

# 大谷派婦人法話会編『婦徳』 総目次

## ▼第一号 一九〇七(明治四〇)年五月二五日

春季大会記念撮影

総裁殿、会長殿、幹事長殿及来会者之一部

御門跡臺下御親言

総裁殿御訓示

幹事長殿答辭

御親言復演

婦徳の涵養

春季大会彙報

最近数年間に於ける会務概況

本部及支部支場の現在数と其位置

趣意規則書

布教使 廣陵 了賢師  
布教使 滋野井秀雄師

## ▼第二号 一九〇八(明治四一)年四月一〇日

本領

花となりて人生を飾れ／心の裝飾／大悲の春にあり／永く愛敬せられよ

法話

女子の教育

本尊はかけ破れ

女学校法話

演説

愉快なる生活

示談

総会所法義示談

後藤 葆眞

擬講 上杉 文秀

舟橋 了要

学師 大須賀秀道

嗣講 蓮 弘鑑

雑録

病床感話

心の鏡

時報

婦人法話会春季大会外数件

本領

趣味のある生活／家内中の調和／発露懺悔せよ／四海兄弟

法話

因果の理法

女子の特性

演説

婦人の品性

示談

総会所法義示談

雑録

婦人法話会春季大会記事

時報

大阪支部春季大会外数件

## ▼第四号 一九〇八(明治四一)年六月二〇日

本領

嗜好を他に同しうせよ／陽柳観音／嘖志と懺悔／觸光柔軟／氷囊

学師 安藤 州一

好美 女史

## ▼第三号 一九〇八(明治四一)年五月二〇日

本領

趣味のある生活／家内中の調和／発露懺悔せよ／四海兄弟

法話

因果の理法

女子の特性

演説

婦人の品性

示談

総会所法義示談

雑録

婦人法話会春季大会記事

時報

大阪支部春季大会外数件

## ▼第四号 一九〇八(明治四一)年六月二〇日

本領

嗜好を他に同しうせよ／陽柳観音／嘖志と懺悔／觸光柔軟／氷囊

法話

阿伽陀藥法話

祖師の同情

演説

隔てこゝろ

示談

総会所法義示談

雑録

夏の事

時報

本山法話会外数件

法話

女のたいなる徳義／一粒の米／身分相応／心の涼風

法話

祖師の同情(承前)

慈 愛

講話

歡喜の力

示談

総会所法義示談

雑録

末世の奇瑞／奇特なる婦人／法の歌／婦人法話会規則

講師 眞成院千巖

講師 南條 文雄

学師 大須賀秀道

大原 誠意

釋 現尚

## ▼第五号 一九〇八(明治四一)年七月一〇日

本領

女のたいなる徳義／一粒の米／身分相応／心の涼風

法話

祖師の同情(承前)

慈 愛

講話

歡喜の力

示談

総会所法義示談

雑録

末世の奇瑞／奇特なる婦人／法の歌／婦人法話会規則

講師 南條 文雄

学師 蕪城 賢順

学師 大須賀秀道

布教師 大原 誠意

時報

故一條院松壽院法要外数件

▼第六号

一九〇八(明治四一)年八月一〇日

口絵

岡崎別院本堂並に同所婦人法話会支場発会

式

本領

婦人と読書／喜びの助縁とせよ／技芸の本意／変らぬ愛／心涼しさ

法話

平生業成

岡崎の霊夢

講話

愛語の徳

示談

総会所法義示談

雑録

村上博士の女性訓／児童のいろいろ

時報

婦人法話会例会外数件

▼第七号

一九〇八(明治四一)年九月一〇日

本領

心の整頓／平生にあり／縁の下の力持ち／お慈悲にて打ち消すべし／渋柿

法話

平生業成(承前)

苦悶と救済

講話

慈光の照護

講師 南條 文雄  
講師 蕪城 賢順  
学師 大須賀秀道

示談

総会所法義示談(承前)

雑録

婦徳の発行をよろこびて

飲喜の歌

時報

婦人法話会外数件

本領

女子の権威／愛は生命也／悲しみの種子、歎きの苗／はゝ江み／紅葉

法話

慧燈大師の同情

絶世の德音

講話

正直の生活

示談

総会所法義示談

家庭

下婢の待遇

時報

婦人法話会例会外数件

本領

大谷派の論述

戊申の詔書

大詔を奉戴せよ／最も恥づべき人／冥加／憐れむべきの至り也／菊の咲ける時

法話

講師 南條 文雄  
講師 蕪城 賢順  
学師 大須賀秀道

追弔会御親言

同 演説

仏法信者の慰

講話

貞操と信仰

雑録

戊申の詔書を読み奉りて

戊申の詔書を拝し奉りて

女子の缺點

女子の長所短所

歌教首

時報

大谷派本山傳燈式外数件

本領

▼第一〇号 一九〇八(明治四一)年十二月一〇日

歳方に暮れんとす／小児の心となれ／楽しき老の暮れ／因縁と御はからい

法話

人生の帰結

貧者の德音

講話

同情の大悲

家庭

小児の育て方につきて

家庭教育に就いて

時報

数件

講師 廣陵 了賢  
講師 蕪城 賢順  
学師 大須賀秀道  
川島 末菊  
黒頭 道人

▼第一一号

一九〇九(明治四二)年一月一日

光養磨殿肖像  
本領

新春の所感／御勅題につきて／赤誠の色／  
嬉しき生活は美顔法也／心安らかに睡れ  
法話

感恩報徳 講師 南條 文雄  
求道の精神 学師 蕪城 賢順  
何をか真の幸福といふか 安藤 義導  
講話

母親への活教訓 学師 大須賀秀道  
示談

総会所示談 嗣講 蓮 弘鑑  
雑録

他力安心のしをり 学師 稲葉 現淵  
家庭

小児の育て方について 川島末菊子  
一家の憲法 黒頭 道人  
時報

数件

▼第二号 一九〇九(明治四二年)二月一〇日

口絵

婦人法話会常置幹事 阿部須磨子  
本領

人生と覚悟／須臾の間なり／生死の大夢／  
愚痴／雪のあと  
法話

婦人法話会開設の趣旨 講師 細川 千巖  
私一人のため 学師 蕪城 賢順  
何をか真の幸福といふか(承前) 安藤 義導  
講話

虚飾なき生活 学師 大須賀秀道  
雑録

婦徳誌上に 八つ子  
良妻と賢母

渡邊華山先生の商人訓  
伊藤翁の家訓  
時報

法主御巡化外数件

▼第三号 一九〇九(明治四二年)三月一〇日

本領  
聖旨に悖ることなかれ／遊食／女子に長寿  
者多し／頭を下げる数／女房の模範／念仏  
の節儉  
法話

戊申御詔勅の御趣旨 布教使 安藤 義導  
私一人のため(承前) 学師 蕪城 賢順  
講話

仏教の家庭教育 学師 大須賀秀道  
家庭

一般婦人の心得 藤澤 典獄  
雑録

他力安心のしをり(承前) 学師 稲葉 現淵  
美濃の三日 奥村 敏子  
婦徳誌上に(承前) 八つ子  
仏様とはどんな御方ですか 二葉少女会員  
時報

婦人法話会春季大会外数件  
本領

▼第四号 一九〇九(明治四二年)四月一〇日

服装と品位／趣味なき生活／冥見に愧ぢ  
よ／心の富／着倒れ国  
法話

戊申御詔勅の御趣旨(承前)

知恩報徳 布教使 安藤 義導  
講話 学師 蕪城 賢順

孝養父母 学師 大須賀秀道  
示談

総会所示談 嗣講 蓮 弘鑑  
家庭

一般婦人の心得(承前) 藤澤 典獄  
雑録

御苦労の賜物 小樽 廣岡 達子  
いろは歌 京都 小泉きし子  
仏様とはどんな御方ですか 八幡二葉少女会員  
時報

数件

▼第五号 一九〇九(明治四二年)五月一〇日

本領

心を培養せよ／不足言はぬ生活／柔順の  
徳／喜ぶべき現象／苗場  
法話

成功の秘訣 布教使 安藤 義導  
家庭と堪忍 学師 原 宜賢  
講話

当相敬愛 学師 大須賀秀道  
家庭

一般婦人の心得(承前) 藤澤 典獄

子供の育て方につきて  
河島 末菊

清国婦人の宗教  
学師 嵯峨崎開成

良妻選訳法  
黒頭 道人

涉成園白檀木珠数題名記頌果  
南條 文雄

歌数首  
京都 戸井田とく

仏法の十二月  
同 小泉 きし

小話  
合 掌 子

木 枯  
合 掌 子

時報  
大谷派大門立柱式外数件

本領  
▼第一六号 一九〇九(明治四二)年六月二〇日

仏教と婦人／己が分に安んぜよ／釘の打ち  
所ろ／心の体操／月涼し

法話  
立柱式に就て  
講師 吉谷 覺壽

修養の第一義  
布教使 安藤 義導

講話  
女子と財産  
学師 大須賀秀道

示談  
総会所示談  
嗣講 蓮 弘鑑

家庭  
一般婦人の心得(承前)  
藤澤 典獄

雑録  
清国婦人の宗教  
学師 嵯峨崎開成

婦人の弱点に就て  
黒頭 道人

青柳の枝を見て  
井上つね子

時報  
大谷老法主の動静其他数件

▼第一七号 一九〇九(明治四二)年七月一〇日

処世の覚悟／良き模範／浄土を願ふしる  
し／同情の涙／涼風

法話  
修養の第一義(承前)  
布教使 安藤 義導

人生の幸不幸  
学師 梅原 嚴矣

講話  
妻の同情  
学師 大須賀秀道

示談  
聴聞の心得  
学師 大藤 順海

家庭  
一般婦人の心得(承前)  
藤澤 典獄

雑録  
岐阜市の半月  
奥村 敏子

婦人の弱点に就いて  
黒頭 道人

故林与左衛門氏の略歴  
擬講 唐川 徹

時報  
大谷派法主巡化其他数件

本領  
▼第一八号 一九〇九(明治四二)年八月一〇日

婦人と公德／欧米の子女／感心なる美風／  
母たる人の責任／寺院と子供

法話  
六字の功德  
講師 吉谷 覺壽

外柔にして内剛なれ  
学師 蕪城 賢順

憑りある人生  
学師 安藤 州一

講話  
洗除心垢  
学師 大須賀秀道

示談  
総会所法義示談摘要  
布教使 大原 誠意

家庭  
家庭百話(一名婦徳修養談)  
布教使 日野 春翠

家庭衛生と仏教  
大溪 專

雑録  
数件

▼第一九号 一九〇九(明治四二)年九月一〇日

本領  
災害の慰安／大悲の試練／古聖を偲べ／悲  
嘆に歓喜あり／耳辺の警鐘

法話  
まことの道  
擬講 朝倉 了昌

身心放下  
学師 梅原 嚴矣

講話  
忍と平和  
学師 大須賀秀道

示談  
総会所法義示談  
布教使 大原 誠意

家庭  
家庭百話(一名婦徳修養談)  
布教使 日野 春翠

雑録  
震災慰問録  
随行の一員

時報  
法主臺下御巡化外数件

本領  
▼第二〇号 一九〇九(明治四二)年一〇月一〇日

女子の本分／母先づ自ら賢なるべし／真の

## 大谷派婦人法話会編『婦徳』総目次

愛／文明と家庭教育／秋の夜	法話	両法主臺下御直命復演	擬講	廣陵	了賢
身心放下	講話	女性に従順と信仰	學師	梅原	嚴矣
家庭	家庭百話（一名婦徳修養談）	布教使	日野	春翠	
妾の家庭と信仰	大阪私立大谷裁縫女学校生徒	武安はつ子			
雜錄	始めて母となれる歡喜	北海道小樽	廣岡	達子	
震災慰安錄（統）	隨行の一員				
本部例会外教件					
第二号 一九〇九（明治四二）年十一月一日	本領				
内助の力／縁の下の力持ち／英雄の妻／婦人の覚悟／長き夜	法話	塞翁が馬	學師	蕪城	賢順
修養の第一義	布教使	安藤	義導		
こゝろひとつ	布教使	武宮	現眞		
講話	學師	大須賀秀道			
慚愧の服	學師	稻葉	現淵		
總會所示談					
家庭百話（一名婦徳修養談）	布教使	日野	春翠		
一般婦人の心得	一家小訓	藤澤	典獄		
雜錄	一般婦人の心得	藤澤	典獄		
御恩の嬉しさ	八幡二葉少女會員	村松せん子			
時報	婦人法話會追吊會外教件				
第二号 一九〇九（明治四二）年二月一日	本領				
歲暮の感謝／白き糸、赤き糸／年末の礼／待たるゝ春／時雨	法話	女人成仏	布教使	安藤	義導
塞翁が馬	學師	蕪城	賢順		
醜婦の救済	學師	大須賀秀道			
總會所示談	布教使	武宮	現眞		
告白	清き生活を求めし結果	布教使	ゑむ子		
家庭百話（一名婦徳修養談）	布教使	日野	翠春		
一般婦人の心得	藤澤	典獄			
第二号 一九一〇（明治四三）年二月二〇日	本領				
女子の修養／素顔／報恩のとき／毛綱を見よ／嫁菜	法話	會長殿御筆跡短冊	淳心院殿筆跡繪葉書		
彌陀成仏和讃	法話	婦女の責務と浄土真宗	大谷幹事長殿		
他力の教	講話	朝倉	了昌		
苦をも樂に変ずる生活	質疑	曉鳥	敏		
總會所示談	告白	舟橋	水哉		
不可知解なるが故に信ずる也	文苑	稲葉	現淵		
年のはじめによめる雪のうた／犬其他教首	家庭	麗	子		
主婦の用意	逸話	孫太夫の婆さん	關代	良成	
明治四十三年を迎ふ	報導	桃	仙		
大谷派法主臺下の御病氣其也					
第三号 一九一〇（明治四三）年二月二〇日	本領				
女子の修養／素顔／報恩のとき／毛綱を見よ／嫁菜	法話				

歡喜地の人 進むを知て退くを守る	蕪城 賢順
講話 女子と迷信	船橋 水哉
今がよき時也	大須賀秀道
示談 總會所示談	蜂屋賢喜代
告白 病床の懺悔	武宮 現眞
文苑 渾底松／歳暮／新年雪／戌／松上篤／歎喜	釋 專慶
家庭 家庭百話	麗 子
主婦の用意	日野 春翠
雑録 問答録	桃 仙
報導 時報数件	
本領 第三号 一九一〇(明治四三)年三月二五日	
花と人生／慈善心／先づ近きより始めよ／	
涙の源泉／浮草	
講話 謙讓の徳	舟橋 水哉
祖母より受けたる実感	安藤 義導
哀別の慰安	大須賀秀道
夫婦道	富岡 教雲
質疑	

質疑応答	斎藤 現映
告白 私の仕合せ者	房 子
今迄気付きませなんだ	澄 子
文苑 籠中鳥／庭の鶯	
家庭 主婦の用意(続)	麗 子
逸話 女の道	末 菊子
雑録 監獄病院より	畠山 頼民
報導 時報数件	
本領 第二十六号 一九一〇(明治四三)年四月一〇日	
虚栄心／蒲公英の花／時は来りぬ／香樹院 師曰く	
講話 夫婦道	富岡 教雲
丁度是で宜いのである	峰屋賢喜代
質疑 眞宗に於ける禁制箇條	舟橋 水哉
告白 私の信しさせて頂きしこと	らく子
此身の仕合せ	その子
家庭 主婦の用意(続)	麗 子
少女の感話	いし子、加代子
逸話	

美濃のおせき	
雑纂 大門供養会物語	
随感録	桃 仙
報導 婦人法話会春季大会其也	
本領 第二十七号 一九一〇(明治四三)年五月一〇日	
女性の欠陥／新緑／大火の警鐘／安住の人	
法話 末燈鈔法話	蓮 弘鑑
講話 心の美人	船橋 水哉
誠 実	伊藤 大忍
質疑 總會所示談摘要	大原 誠意
問多きは幸福なり	釋 專慶
告白 よろこびは他力也	峰尾賢喜代
文苑 湖上雲	阿部文子外
家庭 主婦の用意(続)	麗 子
婦人一般の心得	藤澤 典獄
逸話 祖母の遺訓／少女の信心	
雑纂 懺窓記	深田 美仙
本領 第二十八号 一九一〇(明治四三)年六月一〇日	

大谷派婦人法話会編『婦徳』総目次

本領	貞節と信仰／蚊／慧空師曰く／御恩報謝	
法話	説教	吉谷 覺壽
講話	宗教と教育	井上 圓了
質疑	婦人の心得	船橋 水哉
質疑	総会所示談	禿 諦住
告白	自己を省みよ	釋 専慶
告白	撰取と抑止	安藤 義導
文苑	野 飼牛	吉見福子外
家庭	主婦の用意(統)	麗 子
逸話	相続人へ遺す書	
抄録	平和と人道	大隈 伯爵
抄録	此故に婦人には煩悶が多い	村上 博士
雑纂	夫婦の關係と他力主義	岡田 夫人
報導	夢物語	夢 想子
大□□	皇帝陛下の御崩御其他	
▼第二九号	一九一〇(明治四三)年七月一〇日	
本領	難治の女性／梅雨の晴れ／斗らひはいらぬ／香樹院師曰く	
法話	選択本願	廣瀬 守一
講話	嗟我聖人の盛徳	齊藤 唯信
講話	我兒及其惡魔	多田 鼎
質疑	総会所示談	大原 誠意
告白	強健なる精神	蜂屋賢喜代
告白	楽しき生活	水谷 有吉
文苑	尊きお誠め	らく子
文苑	出家水	宮田みち子
家庭	家庭教育	麗 子
逸話	黄檗禪師の母	藤岡 了淳
抄録	斯ふ云ふ婦人は精神上の死者	下田 學士
抄録	教育の足らぬ為め女子の悲運	園輝子刀自
雑纂	愛らしき日記	夢 想子
何故南無阿弥陀仏を稱へますか		
▼第三〇号	一九一〇(明治四三)年八月一〇日	
本領	暑と婦人／云ふまいと／凡てが御慈悲也／秀存師曰く	
講話	嗟我聖人の盛徳(統)	斎藤 唯信
講話	今日一日の事	舟橋 水哉
法話	吾人の避暑法	安藤 義導
質疑	総会所示談	禿 大住
告白	私の児ではなかった	止 才生
告白	私は幸運児	堀 憲次郎
私宅の恩寵	火宅の恩寵	あむ子
私的心中	懺悔の一節	岩崎その子
文苑	海 辺鶴	釋 妙花
家庭	私の結婚せし動機	須川愛子外
逸話	相続人へ遺す書(統)	智 子
抄録	斯ふ云ふ婦人は幸福	利 兵衛
抄録	婦人法話会本部其也	下田 學士
報導	韓国併合の大詔	夢 想子
口絵	朝鮮釜山本会支部會員	
本領	火と水と女性／慰問袋／朝鮮の同朋／秋の夜	
法話	末灯鈔法話	故易行院講師
講話		



無我と一念	福来	友吉
仏教倫理	舟橋	水哉
質疑		
総会所示談	大原	誠意
告白	松村	正定
私の信仰の実感		
家庭	麗	子
家庭教育		
逸話	功徳の母	
妙好人久三郎		
抄録	下田	學士
この覚悟で遣つて貰ひたい	山脇	女史
一方へ偏する弊害		
雑纂	夢	想子
秋の里		
報導		
朝鮮の併合／婦人法話会と水害慰問其也		

▼第三号 一九一〇(明治四三年)一月一〇日

御垂示		
本領		
賢愚と女性／婦人本位／野に咲く菊／香樹		
院師曰く		
法話		
末灯鈔法話(統)	易行院講師	
合邦後に於ける日本婦人の責務	安藤	義導
講話	廣陵	了賢
信者の処世	船橋	水哉
仏教倫理(統)		
質疑		

総会所示談	武富	現眞
告白	禿	信行
今までは人の為の聴聞でした		
文苑	河部文子外	
水郷鷺		
家庭	麗	子
家庭教育		
逸話	山城國利兵	
相統人へ遺す書(統)		
抄録		
妻女の助縁其也数件		

▼第三号 一九一〇(明治四三年)十一月二〇日

御直命		
本領		
根底なき女性／誠の種子／報恩講／親心／		
秀存師曰く		
法話		
御文法話	一乘院覺壽	
講話	舟橋	水哉
心の食物	安藤	義導
合邦後に於ける日本婦人の責務	稲葉	現淵
質疑	順	子
安心質疑返信	松村	正定
告白		
汚穢の身が尊き名号の主		
私の信仰の実感		
文苑		
数件		
家庭		

婦人の天職を誤つてはならぬ	金原明善翁	
逸話		
相統人へ遺す書	山城國利兵衛	
雑纂	奥村	敏子
朝鮮と婦人		
抄録		
数件		
報導		
婦人法話会秋季大会其也		

▼第三四号 一九一〇(明治四三年)二月一〇日

本領		
歳暮と婦人／友遠方より来る／感謝懺悔／		
香樹院師曰く		
法話	吉谷	覺壽
御文法話	武宮	現淵
講話		
塘	忍	
告白		
報恩の教旨	禿	信行
文苑		
山館竹		
家庭		
家庭教育(統)	麗	子
胎育に就て	富	美子
逸話	利	兵衛
相統人に遺す書(統)		
神道の婦人仏道に帰す		
報導		
報恩講と御直命其他		

大谷派婦人法話会編『婦徳』総目次

▼第三五号 一九二一(明治四四)年一月一日

口絵

本会々々長殿御筆蹟の短冊

枳殻邸内に於ける朝鮮貴族団の一行

告辞

大御遠忌と婦人

大谷幹事長殿

本領

空前の新春／門松／念仏申さるべし／第三十五／秀存師の曰く

法話

新年の法話

吉谷 覺壽

講話

宗祖聖人の御家族

舟橋 水哉

男子より観たる婦人の境遇

蜂屋賢喜代

質疑

總會所示談

告白

報恩の教旨

禿 信行

文苑

故郷友

数件

家庭

家庭は於ける婦人

安藤 義導

雜纂

勤儉力行

金原 明善

逸話

母を憶ふ児

大谷派婦人法話会其也数件

▼第三六号 一九二一(明治四四)年二月一日

本領

夢幻の人生／三種の人／自覚／苦境と楽境／香樹院師曰く

法話

改邪鈔法話

講話

礼拝の生活

易行院講師

宗祖聖人の御家族(統)

蜂屋賢喜代

質疑

總會所示談

告白

報恩の教旨(統)

禿 信行

文苑

鶴立洲

私のこゝろを

まつむら

家庭

不思議の御縁

婉 子

逸話

逢來先生

古 椋 園

雜纂

勤儉力行

金原 明善

報導

婦人法話会の新年会其也

▼第三七号 一九二一(明治四四)年三月一日

本領

囚はれたる人／梅花／善き事／悪しき事／秀存師曰く

法話

善導大師和讃

吉谷 覺壽

法話

真宗倫理の大観

斎藤 唯信

不足なき生活

蜂屋賢喜代

質疑

總會所示談

告白

私の心中

松村 定正

文苑

市中隠士

須川愛子外

私のこゝろを

まつむら

家族

家庭に於ける婦人(統)

安藤 義導

女子の虚栄

富 美 子

逸話

戸島いま女

夢 想 子

雜纂

勤儉力行(統)

金原 明善

抄録

若き婦人に望む三ヶ條

報導

会堂と婦人法話会其也

▼第三八号 一九二一(明治四四)年四月一日

本領

恩徳廣大／婦人の救主／桜花と聖人／団体参詣／光り

法話

噫ありがたい

吉谷 覺壽

活動の聖人を懷ふ

蜂屋賢喜代

講話

親鸞聖人の家庭

佐々木月樵

質疑

總會所示談

告白	彼岸詔	波留子
文苑	親鸞聖人	
家庭	実務を執らねば	婉子
逸話	一休和尚	蘆津 老師
報導	大師堂門お通り初め其也	
▼第三九号 一九一(明治四四)年五月二〇日		
御直命御垂示及復演	内愚外賢／慈母の恩／浅間しや／緑葉／香	
本領	樹院師曰く	
法話	玉日の君臨末の御書	佐藤 得聞
講話	真宗倫理の大観	齋藤 唯信
質疑	宗教生活の一端	船橋 水哉
質疑	總會所示談	
告白	相済みませぬ	釈 教信
私に幸せ者	麗子	
文苑	山 井	須川愛子其也
家庭	家庭の平和	都 岐子
逸話		

廣村の模範村となつたは宗教の感化	長澤 則彦	
雜纂	御遠忌所感	安藤 義導
報導	大御遠忌等	
▼第四〇号 一九一(明治四四)年六月一五日		
御直命及復演	信に活くる女子／火災／真面目不面目／時節到来	
本領	法話	蜂屋賢喜代
講話	形はいらぬことなり	
質疑	真宗理論の大観(五月号つゞき)	齋藤 唯信
總會所示談	告白	
仕合せ不仕合せ	文苑	次 子
故郷路	家庭	久富ゆき子其也
松影映水	女子の虚栄(四月号つゞき)	斎藤住子其也
逸話	乞食の歌	富 美 子
報導	新築会堂等	佐々木月樵
▼第四一號 一九一(明治四四)年七月一日		

本領	手ありて足なき女子／暴風駛雨／好悪は女子の特性也／梅雨	
法話	法義引立説教	故香樹院大講師
講話	四海兄弟	舟橋 水哉
質疑	御同行	堤 鳳麟
質疑	總會所示談	
告白	私は重症患者	都 岐子
文苑	竹 風	常 葉園
家庭	私の家	麗 子
逸話	幸せな婆さん	追 想子
報導	大谷派婦人法話会本部其也	
▼第四二号 一九一(明治四四)年八月一日		
口絵	各地代表者御遠忌記念写真	
本領	慈姑と良妻賢母／異性と同性／夏の靈訓／煙火と納涼	
法話	水よく石を穿つ	舟橋 水哉
講話	常に我身を見るべし	蜂屋賢喜代

正信念仏偈講讃		安藤 義導	蜂屋賢喜代
質疑			
總會所示談 其七			
告白			逸話
病床の慰安		堤 鳳麟	病人慰問
文苑			抄録
閑居窓		常 葉園	信心者の形見／高棚支場の善行者
家庭			安心立命の歌／婦人の犠牲的生活
家庭と宗教		満 佐子	報告
逸話			本部例会其也
有難い同行		追 想子	開館式／追弔会
抄録			
仏陀は同情の友慈愛の親である／自分は斯うして仏の慈光に接した／斯うして理想が実現出来る／七夕の話／程度を知ること			
報導			
本部例会其也			
▼第四三号 一九一一(明治四四)年九月一日			
御直命			
全復演		平松 理英	
法楽画		稲葉 現淵	
本領			
洗除心垢／彼岸会／虫の声桐一葉／秀存師曰く			
法話		吉谷 覺壽	
現世利益和讃説教			
講話			
婦徳の涵養		舟橋 水哉	
正信念仏偈講讃		安藤 義導	
質疑			
總會所示談			
告白			
自己を知れ			
文苑			
旅宿夜雨			
家庭			
子女と宗教			
逸話			
感心な車夫／一休和尚の閉口		村井 弦齋	
報導			
坊守教会其也			
▼第四四号 一九一一(明治四四)年一〇月一日			
口絵			
涉成園十三景の一印月池			
御直命全演復			
本領			
最後の避難所／ねばならぬ／萩の花			
法話			
歎異鈔法話		稲葉 現淵	
講話			
彼岸と真宗		安藤 義導	
歴史より観たる婦人		藤野 静輝	
質疑			
示 談			
法義示談随聞記 其八		武宮 現眞	
告白		太田 無蓋	
自督の領解			
文苑			
魚 村			
家庭		常 葉園	
佐藤善右衛門			
▼第四五号 一九一一(明治四四)年十一月一日			
御垂示及演復			
坊守教悔			
本部開館式写真			
本領			
報恩謝徳／難治の女性／私のこゝろ／護られてゐる身			
法話			
況や悪人をや			
講話			
仏 恩			
正信念仏偈講讃 第三回		長澤 諦遵	
質疑		安藤 義導	
質疑応答			
法義示談随聞記 其八			
法 楽 書			
告白			
病床の懺悔			
家庭			
子女と宗教			
老人の歌			
奇想老人			

逸話

徳川家康の教訓

報導

本部追弔会其也

▼第四六号 一九二一(明治四四)年二月一日

口絵

涉成園十三景の一浸雪橋

本領

歳将に暮れんとす／女子の身は母の慈悲の教育／秀存師曰く

法話

仏と離れざる生活

歳末の感謝

講話

塵も積もれば山

正信念仏偈講讃 第四回

質疑

法義示談随聞記 其一〇

告白

真宗の同情者

文苑

河辺草

野寺僧帰

家庭

澤庵禅師の教訓二條

一家の幸福並に品行

報導

六百五十年御正當其也

▼第四七号 一九二一(明治四五)年一月一日

口絵

涉成園十三景の一隻梅簷

所謂婦人問題の解決

本領

覚めよ婦人／楽しき現象／死にますよ／念仏申さるべし／念仏は無碍の一道なり

法話

新年の法話

牝牛の角

講話

欣喜の生活

内容ある生活

正信念仏偈講讃 第五回

質疑

總會所示談

法義示談随聞記 其一

告白

仏法をあるじとし世間を客人とせよ

文苑

渡舟

家庭

桃太郎の教訓

嫁と姑の誠め

報導

新春の婦人法話会其也

口絵

涉成園十三景の一瀬枕居

御直命及複演

▼第四八号 一九二二(明治四五)年二月一日

本領

寂しき家庭／楽しき家庭／大阪の大火／秀存師曰く

法話

樹心流流 上

念仏往生

講話

海上の救済 上

議せらるゝ者は幸なり

正信念仏偈講讃 第六回

質疑

法義示談随聞記 其一三

告白

懺悔のいろいろ／悪人の懺悔せる実話

私一人の爲めに候

家庭

雲潭翁の家庭／笑ふ門には福来る

笑を送るは慈善の一法

親の情に化せられて

報導

婦人法話会本部初会其也

口絵

涉成園十三景の一縮遠亭

本領

人生の春／隣邦の教訓／我行を鏡とせよ／仏の心で仏になる

法話

樹心流情 下

六要鈔法話

▼第四九号 一九二二(明治四五)年三月一日

大橋 徹映

大山 慶成

舟橋 水哉

長澤 諦遵

安藤 義導

大田 無蓋

旅の沙門

智雄

雷眠

智雄

雷眠

雷眠

雷眠

雷眠

雷眠

雷眠

雷眠

雷眠

雷眠

雷眠

雷眠

雷眠

雷眠

雷眠

雷眠

雷眠

雷眠

雷眠

雷眠

雷眠

雷眠

大谷派婦人法話会編『婦徳』総目次

講話	海上の救済 下	舟橋 水哉
質疑	正信念仏偈講讀 第七回	安藤 義導
法義示談随聞記 其一二	太田 無蓋	
告白	自覚せざる人	
文苑	馬	大屋久子外
家庭	母の手紙	麗 子
抄録	我が国の難有さ	
報導	婦人法話会本部例会其也	
▼第五〇号	一九一二(明治四五)年四月一日	
口絵	渉成園十三景の一回棹廊	
本領	注意すべき婦人問題／心安き道中樂しき旅行／我が身知らず／秀存師曰く	
講話	弘誓の船	舟橋 水哉
業事成辨	大山 慶成	
講話	醒めた女	佐々木月樵
質疑	正信念仏偈講讀 第八回	安藤 義導
鶴久松女示談	男 千静傍記	太田 無蓋
法義示談随聞記 其一四		
告白	浅ましき私を	比 佐 子
文苑	鳩	小泉さだ子外
家庭	婿入物語	泉 芳 環
抄録	まめに働く習慣	
報導	酬徳会御法要其也	
▼第五一号	一九一二(明治四五)年五月一日	
口絵	渉成園十三景の一傍花閣	
本領	三種の婦人／太谷御遠忌／★慢の角／明らぬ夜	
講話	業事成辨 (下)	大山 慶成
森の夢	泉 芳 環	
講話	醒めた女 (続)	佐々木月樵
婦命の宗教 (上)	舟橋 水哉	
質疑	正信念仏偈講讀 第九回	安藤 義導
法義示談随聞記 其一二五	太田 無蓋	
告白	感恩の生活	山上 正尊
文苑	牛	津田 榮子
家庭		
念仏に慰められ候	畠山 雷眠	
雜纂	求 道	竹原 嶺音
報導	大谷別院大御遠忌其也	
▼第五二号	一九一二(明治四五)年六月一日	
口絵	渉成園十三景の一紫藤岸	
御直命並ニ複演		
本領	初夏の風光／假装の生活／自己の觀察／懸敲問て曰く／浄土往生の樞鍵	
講話	説 教	吉谷 覺壽
まこと	中島 覺亮	
講話	まごころ	泉 芳 環
質疑	正信念仏偈講讀 第一〇回	安藤 義導
法義示談随聞記 其一六	太田 無蓋	
告白	斯る身なればこそ	陽 岑
文苑	雀	吉見福子外
家庭	老婆の訓言	山上 正尊
報導	本部例会其也	
▼第五三号	一九一二(明治四五)年七月一日	

口絵	渉成園十三景ノ一	臨池亭
本領	朝鮮の法楽／世相／生きた墓石／銭湯	
法話	説法	講師 一乗院覺壽
講話	三毒の話（上）	稲葉 現淵
講話	帰命の宗教（下）	舟橋 水哉
質疑	正信念仏偈講讀 第一一回	安藤 義導
法義示談随聞記	其一七	太田 無蓋
告白	張子の洗濯	鳴 岑
文苑	亀	足立みつを子外
家庭	恩顧の生活	山上 正尊
雑纂	家は国の墓なり／一家の法則	瀧本 智雄
抄録	秩序即信仰	
報導	機会よりも実力	文学博士 三宅雄二郎
本部例会其也		
▼第五四号	一九一二（明治四五）年八月一日	
勅語		
垂示		
本領	嗚呼崩御／婦徳の模範／陛下の御英断／無	

常の風／皇恩無窮	法話	坊守教訓復演	滋野井秀雄
講話	女子の弱点	大須賀秀道	
史伝	大行天皇と東本願寺		
雑報	聖上陛下御不例／大谷派婦人法話会天機		
第一号	何／今上天皇陛下へ天機奉伺／大行天皇奉		
会告	悼会／水害慰問／法話会の役員任命／会奉		
▼第五五号	一九一二（大正元）年九月一日		
朝見式勅語			
大行天皇御製			
本領	婦人の使命／衣食の恩に感ぜよ／愛の力／		
罪障と功德／蚊遣り			
法話	王法と佛法	香山院講師	
講話	女子と皇恩	大須賀秀道	
質疑	総会所示談	武宮 現眞	
法義示談随聞記	其一七	太田 無蓋	
告白	御大喪の期間を如何な心得にて生活すべき		
か	寺田五三子外六氏		
俱会一處の楽しみ	川那邊壽枝		

家庭	仏前御礼の作法	ひさ子
雑纂	手近い御慈悲	安藤 秀一
雑録	新皇后陛下	青葉 女史
報道	先帝奉悼会其他	
広告		
◆第五六号◆	欠本	
▼第五七号	一九一二（大正元）年一〇一月一日	
当法主臺下御親示		
本領	東欧の戦乱／華美と墮落／孰れか幸福ぞ／	
質案の慈訓／秋色		
講話	家庭内の分業	大須賀秀道
寄書	婦徳は如何にして養成すべきか宇佐美全賢	
質疑	法義示談随聞記（第二〇回）	太田 無蓋
文苑	常葉園稽古会詠草	
小説	湖辺の家	
報道		
▼第五八号	一九一二（大正元）年一二月一日	
本領		

大谷派婦人法話会編『婦徳』総目次

心に武装せよ／女子の罪／寂寞にた江ぬ時／寒風来る	法話	中島 覺亮
講話	女子と現世祈禱	大須賀秀道
雑録	寶の母胎	愚軒 隠士
文苑	念仏者の家庭	土屋 桂村
常葉園稽古会詠草	妾の日記	夕月 女
報道		
口絵		
▼第五九号	一九一三(大正二)年一月一日	
本領	当法主臺下発句	
法話	大正の春／新しき希望／奮って改めよ／雪の花	大須賀秀道
講話	女子求道の要件	山田 文昭
今の喚聲	婦人の使命第三高等学校教授	吉田 賢龍
示談	信するばかりか、たのむばかりか	武宮 現眞
文苑		
常葉園詠草		
雑録		
亡き母の遺訓	雑煮餅に就て	平尾多壽子
報道		秋田 覺信
廣告		
▼第六〇号	一九一三(大正二)年二月一日	
本領	婦人の問題／内に蓄へよ／寒さにつけても／落葉	
法話	無碍の一道	講師 龍山 慈影
講話	同情の生活	擬講 大須賀秀道
示談	慈悲の力	学者 近藤 純悟
雑録	疑の晴れぬは如何	布教師 藤本 宗賢
抄録	法の旅伴れ	後藤はる子
報道	現代人心の推移	小松美尾子
廣告		中嶋 徳藏
▼第六一号	一九一三(大正二)年三月一日	
本領	幸福の源泉／一家の礎となれ／女子と職業／貞順の道／春意動く	
法話	如来は畢竟依なり	学者 隈部 慈明
講話		
結婚と宗教	曇鸞大師の御高徳	擬講 大須賀秀道
雑録	醒めたる悲哀	擬講 舟橋 水哉
幼時の思ひ出	有り難い親の慈悲	福井 秋香
報道		戸井田とく子
廣告		雷 眠
◆第六二号◆	欠本	
▼第六三号	一九一三(大正二)年五月一日	
口絵	會長殿御訓示	
本領	触光柔軟／家庭の感化／妄念に悩める時／泣きたがる信者／すみれ草	
法話	法 話	講師 吉谷 覺壽
講演	念持の信仰	擬講 大須賀秀道
お弟子の拝み宗祖聖人	まことの幸福	布教師 河崎 顯了
雑纂	生活と信仰	渥美 契芳
報道	昔の教育	武田 雷雄
廣告		平尾 多壽
▼第六四号	一九一三(大正二)年六月一日	
本領		



女子の領分／如何に公共の事業に従ふべきか／我等導かれつゝあり／心の嶺

法話

日本一の仕合者 布教師 平松 理英  
信心獲得には総て条件なし

講演

気分分の修養 擬講 大須賀秀道  
菩提樹下の女 学師 泉 芳璟

美譚

厚信な老婆 山高 琴枝  
亡父の慈訓 戸井田とく子

報章  
廣告

▼第六五号

一九一三(大正二)年七月一日

本領

女子の両面／讃められたき心／名聞の心からも大道に進むべき也／表裏相応／夏衣

法話

謙 徳 布教師 平松 理英  
一生之間能莊嚴 擬講 太藤 順海

講演

女子の力 擬講 大須賀秀道  
若き婦人の為に 文学士 藤澤 乙夫

雜纂

新妙好人今井布右衛門 擬講 舟橋 水哉  
慈光世界 武田 雷雄  
御奮蹟参拝記 記 者

報章

廣告

▼第六六号

一九一三(大正二)年八月一日

本領

夏期と女性／先帝の御製を拝誦せよ／心垢を洗除せよ／心の衣服／蚊

法話

心光摂護の生活 擬講 藤田 誓成  
講話 一生之間能莊嚴 擬講 太藤 順海

雜纂

女子の品位 擬講 大須賀秀道  
慈光世界 武田 雷雄  
開教小話 土屋 芳雄

告白

ありのまゝ 中杉 法林  
美談 美しき老婆 溪内 徳子

報章

御奮蹟参拝記外数件

▼第六七号

一九一三(大正二)年九月一日

本領

信の上に男性化せよ／老後の美／現在の恩寵／結髪の影響／秋声

法話

變成男子の願 講師 皆住院鳳嶺  
御一代記聞書法話 擬講 稲葉 現淵

講演

一生之間能莊嚴 擬講 太藤 順海  
人情の美 擬講 大須賀秀道

雜纂

述懐の心 武田 雷雄  
敵しい祖母の躰 平尾たづ子

美譚

宿善到来? 中杉 法林  
報章 明治天皇御一週忌外数件

廣告

▼第六八号

一九一三(大正二)年一〇月一日

御直命

復 演 幸福の階梯／誤れる自由主義／趣味多き日  
本領 本の家庭／結婚の意義／秋の思ひ

法話

慈悲の父母 講師 一乗院覺壽  
正信偈法話 擬講 佐藤 得聞

講話

二諦相依 布教師 田淵 靜綠  
女子と懺悔 擬講 大須賀秀道

雜錄

婦人と談話法 田仁 師庵  
秋 武田 雷雄

家庭

家庭の団欒 中杉 徳龍

報章

廣告

▼第六九号

一九一三(大正二)年十一月一日

法主臺下御親示  
本領

家庭の改造問題／先づ人間を改造せよ／主婦の責任／他を責む能はず／日々の用意

法話 宿善の開発 講師 吉谷 覺壽

講話 婦人問題に就て 布教師 田淵 靜縁

雑纂 仏法に卑賤の人なし 擬講 大須賀秀道

婦人と談話法 (二) 田仁 師庵

宿世 武田 雷雄

報道 廣告

▼第七〇号 一九一三(大正二)年二月一日

御直命 復演 家庭の趣味／話題を提供せよ／良人と趣味を同じうせよ／信仰の趣味／家の裝飾

法話 平生業成 講師 吉谷 覺壽

講話 人界受生の第一義 布教師 田淵 靜縁

婦人の自覚 擬講 大須賀秀道

雑纂 婦人と談話法 (三) 田仁 師庵

宿世 武田 雷雄

報道 廣告

▼第七一号 一九一四(大正三)年一月一日

會長殿御歌 本領 春の婦人／恩寵に感謝せよ／父母の恩／皇恩殊に高し／富士が嶺

法話 眞宗の淵源 嗣講 廣瀬 守一

講話 勿体ないと云う事 学師 奥山 見龍

史談 愛児の為に修養せよ 擬講 大須賀秀道

実話 小野小町の貞操 奈美酒家

美譚 鬼婆一生 武田 雷雄

報道 模範の少女 梅波 道人

評議員会外数件 編輯だより 本誌 記者

▼第七二号 一九一四(大正三)年二月一日

御親示 教學部長殿演説 本領 御大典に対する婦人の覚悟／如何に祝意を表すべきか／祝賀の記念／業務を勵精せよ／新紀元

法話 法話 火宅無常の世界 擬講 河崎 顯了

講話 廣告

▼第七三号 一九一四(大正三)年三月一日

本領 内助の要義／虚栄心と罪惡／罪を罪と知れ／誤れる希望／梅一枝

法話 道徳の根底 擬講 稻葉 現淵

講話 重大なる婦人の責務 布教師 田淵 靜縁

他力教の修養 布教師 田淵 靜縁

女子と天災地変 擬講 大須賀秀道

実話 鬼婆一生(其二) 武田 雷雄

美譚 改宗の妙好人 擬講 舟橋 水哉

雑纂 婦人と談話法(其四) 田仁 師庵

報道 新年初会外数件 本誌 記者

編輯だより 廣告

修養 婦人と談話法(其五) 田仁 師庵

実話 鬼婆一生(其三) 武田 雷雄

報道 法話会記事外数件

廣告 救済金義捐者芳名外数件

▼第七四号

一九一四(大正三)年四月一日

口絵

御直命

本領

紀年十週年に際して(一)社会に於ける婦人の地位(二)精神上的の感化(三)我身に現はれたる変化(四)此機会に悔ひ改めよ(五)無我に平和あり

法話

念仏と信心と

三毒の病

講話

慈善は婦人の性徳なり

迷信、解信、仰信

史伝

北越貞信尼

修養

婦人と談話法(其六)

雑纂

女妙好人小話

報道

救済金義捐者芳名/法話会現勢/編輯局より

田仁 師庵  
大須賀秀道  
田仁 師庵  
武田 雷雄

▼第七五号

一九一四(大正三)年五月一日

皇太后陛下御色紙並に御短冊

御垂示

前法主臺下御親言/法主臺下御直囑/会長殿御訓示

本領

崩御の悲み/婦徳の模範/内助の御功績/信仏の御徳

奉悼法話

諒闇の所感

歌聖にて在します

御一代の御事

奉悼の歌

報道

如勝禅尼と死の覚悟

本領

虚栄より醒めよ/常識の修養/信仰の力/勤儉の美風

我身は女人なれば

たゞ一道あるのみ

北越貞信尼

婦人と談話法

御歌十二徳の御実践

模範の少女

氣をくちぎて育つべし

報道

本領

虚栄より醒めよ/常識の修養/信仰の力/勤儉の美風

我身は女人なれば

たゞ一道あるのみ

北越貞信尼

婦人と談話法

御歌十二徳の御実践

模範の少女

氣をくちぎて育つべし

報道

本領

虚栄より醒めよ/常識の修養/信仰の力/勤儉の美風

我身は女人なれば

たゞ一道あるのみ

北越貞信尼

婦人と談話法

御歌十二徳の御実践

模範の少女

▼第七八号

一九一四(大正三)年八月一日

本領

古道は鏡の如し/根本の矛盾/夫に任すべし、我心に任すべからず/心の食物/道は

逆にあり

撰取の光益

二諦相依之人

水を観て

計らはず喜べ

北越貞信尼

婦人と談話法

仏壇の引出から

布教日記

報道

願悲をつゝしめ

本領

戦争に対する婦人の覚悟/保護せらるゝ身/犠牲/天意知るべきのみ/苦勞は身の

為め

改悔文法話

一念後念

婦人と油断

北越貞信尼

婦人と談話法

本領

戦争に対する婦人の覚悟/保護せらるゝ身/犠牲/天意知るべきのみ/苦勞は身の

為め

改悔文法話

一念後念

婦人と油断

北越貞信尼

婦人と談話法

本領

婦人と談話法

明るい女

報道

夫を主君と思へ

本領

古道は鏡の如し/根本の矛盾/夫に任すべし、我心に任すべからず/心の食物/道は

逆にあり

撰取の光益

二諦相依之人

水を観て

計らはず喜べ

北越貞信尼

婦人と談話法

仏壇の引出から

布教日記

報道

願悲をつゝしめ

本領

戦争に対する婦人の覚悟/保護せらるゝ身/犠牲/天意知るべきのみ/苦勞は身の

為め

改悔文法話

一念後念

婦人と油断

北越貞信尼

婦人と談話法

本領

戦争に対する婦人の覚悟/保護せらるゝ身/犠牲/天意知るべきのみ/苦勞は身の

為め

改悔文法話

一念後念

婦人と油断

北越貞信尼

婦人と談話法

本領

戦争に対する婦人の覚悟/保護せらるゝ身/犠牲/天意知るべきのみ/苦勞は身の

為め

田仁 師庵

武田 雷雄

編輯部

婦徳 教訓

本領

古道は鏡の如し/根本の矛盾/夫に任すべし、我心に任すべからず/心の食物/道は

逆にあり

撰取の光益

二諦相依之人

水を観て

計らはず喜べ

北越貞信尼

婦人と談話法

仏壇の引出から

布教日記

報道

願悲をつゝしめ

本領

戦争に対する婦人の覚悟/保護せらるゝ身/犠牲/天意知るべきのみ/苦勞は身の

為め

改悔文法話

一念後念

婦人と油断

北越貞信尼

婦人と談話法

本領

戦争に対する婦人の覚悟/保護せらるゝ身/犠牲/天意知るべきのみ/苦勞は身の

為め

改悔文法話

一念後念

婦人と油断

北越貞信尼

婦人と談話法

本領

戦争に対する婦人の覚悟/保護せらるゝ身/犠牲/天意知るべきのみ/苦勞は身の

為め

見て御座る 米国婦人の交際振り 報道 婦人の孝行	武田 雷雄 山崎 了獄 編輯部 婦徳 教訓
▼第八〇号 一九一四(大正三)年一〇月一日 御直命及御直諭 本領	
婦人の後援／戦場の惨禍を思へ／敗れば佛法亦亡ふべし／模範を示せ／萩 真宗と現世祈禱 六字の外にあるべからず 寧ろ男子たれ 生ける信仰 北越貞信尼 一波動きて萬波生ず 報道 軍国婦人の務め	擬講 稲葉 現淵 学師 宮部 要人 布教師 伊藤 大忍 田淵 静縁 擬講 大須賀秀道 沼 法量 編輯部 婦徳 教訓
▼第八一号 一九一四(大正三)年一月一日 本領	
業務に奮戦せよ／同情／我身一人の爲め／ 恩寵の綱帯／反省せよ 嘆異鈔第九章 講師・文学博士 女人は疑ふかし 今日主義 北越貞信尼 婦人問題 鏡 義捐に就て 報道	南條 文雄 長等 神立 布教師 田淵 静縁 大須賀秀道 田仁 師庵 武田 雷雄 藤塚 智秀 編輯部
驚いた同行 君の爲めに忠を思ふ事 宮家 貫吾 婦徳 教訓	
▼第八二号 一九一四(大正三)年二月一日 御直命 本領	
歳暮の感謝／慚愧して懺悔せよ／我等の身代り／同情／女子の世界 無上大利の功德 我が心の親 再生の生活 北越貞信尼 日記を附ける婦人へ 新紀元に入れる吾人仏教徒の覚悟 報道 忘想は庭の草の如し 口絵	擬講 佐藤 得聞 布教師 梅澤 惠観 学師 左右田恵順 大須賀秀道 田仁 師庵 北米 山崎 了獄 編輯部 婦徳 教訓
▼第八三号 一九一五(大正四)年一月一日 本領	
戦勝国の婦人／実地に着目せよ／信心の要 亦実地にあり／身を軽く持つべし／落花流水 水 嘆異鈔第一章 文学博士・講師 信心を取りて礼にせよ 親鸞聖人の盛徳 北越貞信尼 婦人と證書 帯を締め直して 時節到来と用心	南條 文雄 中島 覺亮 齋藤 唯信 大須賀秀道 田仁 師庵 武田 雷雄 田中 現神
年頭感話 報道 告 寸陰を惜しむべし 秋田 覺信 編輯部 婦徳 教訓	
▼第八四号 一九一五(大正四)年二月一日 本領	
婦人と生活／職業的婦人／有財の悩み／真実の宝／春寒し 新春法語 無上の名号 六十の青年 樹心仏地流情法海 春の婦人 婦人の問題 不足云はずに 報道 告 真の愛に怨恨なし	講師 龍山 慈影 布教師 梅澤 惠観 教誨師 安藤 義導 布教師 田淵 静縁 学師 毛利 善宗 田仁 師庵 武田 雷雄 編輯部 婦徳 教訓
▼第八五号 一九一五(大正四)年三月一日 本領	
時間の経済／仏法は時間にある／甲斐性ある婦人／真の勤儉／一生のたしなみ 三首の御詠歌 婦人と信仰 北越貞信尼 羽前の千代尼 婦人の問題 白蓮花 御主人の尊	擬講 花山 大安 布教師 田淵 静縁 大須賀秀道 奥山 見龍 田仁 師庵 学師 泉 芳 環 影 法 師

良妻主義と人格主義

下田 歌子  
編輯部

報 道

婦徳 教訓

▼第八六号

一九一五(大正四)年四月一日

大門供養会

学師 沼 法量

婦人に關する釋尊の慈恩

擬講 大須賀秀道

真宗は廻向主義なり

祠講 齋藤 唯信

婦人と愛嬌

布教師 田淵 靜縁

正得院妙篤法尼の略伝

文学博士・講師 南條 文雄

廿四輩に就て

南溟 道人

御主人の噂

影法師 編輯部

報 道

婦徳 教訓

常のこゝろ

編輯部

廣 告

婦徳 教訓

▼第八七号

一九一五(大正四)年五月一日

本領

青葉の蔭にて／事は實際にあり／遷り易き

流行／女子の心／風蕪る

擬講 大須賀秀道

仏法は尊むべし

布教師 田淵 靜縁

求道の犠牲

教諭師 安藤 義導

天眞流露

学師 泉 芳環

磯の乙女

擬講 奥山 見龍

羽前の千代女

内藤 智秀

無量の歡喜

武田 雷雄

嫁 道

影法師 編輯部

御主人の噂(二)

編輯部

故郷の母へ

婦徳 教訓

廣 告

編輯部

▼第八八号

一九一五(大正四)年六月一日

本領

一等国の婦人／女武士道／実生活を上品に

せよ／信ある人は尊し／謙遜

擬講 奥山 見龍

女の爲めに起したまへる本願

布教師 田淵 靜縁

儉 徳

教諭師 安藤 義導

天眞流露

擬講 奥山 見龍

羽前の千代女

擬講 大須賀秀道

北越貞信尼

家庭に於ける文学趣味

御主人の噂(四)

影法師 編輯部

報 道

婦徳の鏡

貧女の追孝

廣 告

▼第八九号

一九一五(大正四)年七月一日

口絵

本山御下附賞状及七宝焼大花瓶(写真版)

真宗大谷派婦人法話会現勢地図(同)

御大典・御待受 御消息復演

南無六字城

擬講 大須賀秀道

鹿兒島別院・御遠忌

祠講 廣瀬 守一

改悔批判

擬講 太藤 順海

北越貞信尼

擬講 大須賀秀道

家庭に於ける文学趣味

田仁 師庵

談合

何とも思へぬ時がある／自分で自分が分らぬ／死の最期を思へば

御主人の噂(五)

報 道

影法師 編輯部

廣 告

婦徳 教訓

女の身のたしなみ

▼第九〇号

一九一五(大正四)年八月一日

御一代記聞書法話

布教師 平松 理英

女子の力

布教師 安藤 義導

愛よりも敬

武田 雷雄

北越貞信尼

擬講 大須賀秀道

牧女の供養

学師 泉 芳環

俳諧寺 茶と其家庭

文学士 鶴田 耽介

借金返さずに新でも救はるゝか

質 疑

精進は何の爲ですか

新紀元に入れる吾人仏教徒の覚悟

御主人の噂(六)

山崎 獄充

報 道

影法師

時 報

編輯部

廣 告

編輯部

世間七婦

「玉耶女経説」

▼第九一号

一九一五(大正四)年九月一日

写真版

掛川支場発会

御一代記聞書法話

学師 子安 善義

女子の力

教諭師 安藤 義導

朝の修養

布教師 田淵 靜縁

家庭に於ける文学趣味  
史伝

田仁 師庵

光明皇后  
談合

自力では何一つ出来ませぬ／嘘と思はれぬ  
心／此の墮ちる俚にて  
米国婦人の虚栄病  
対嵐房の思出など  
誤解は不和の因  
婦人の決心  
初咲会詠草  
佛教唱歌

山崎 獄充  
徳野きみ子  
畠山 淨意  
徳野きみ子  
文 苑  
講師 赤松圓純作歌  
婦人法話会本部作曲

報告  
広 告

恵信尼公御遺状

▼第九二号 一九一五(大正四)年一〇月一日

彼岸会御直命  
同復演  
御大典御待受御訓示復演

講師 南條 文雄

不来迎の義  
船中の実験談  
肉つきの面  
難有與一兵衛  
談 合

布教師 松見 善月  
擬講 奥山 見龍  
擬講 館 登  
布教師 鶴田 雪城  
文学士 松本 耿介  
文学士 伊藤 祐胤  
学術 伊藤 祐胤  
少女 井上 淡星  
文 苑

御大典奉祝唱歌曲譜  
少女訓話 花嫁と花婿  
初咲会詠草  
報道

広 告  
了然尼

婦徳の鏡

▼第九三号(御大典記念号)

一九一五(大正四)年十一月一日  
鏡に向かふ心得 文学博士 南條 文雄  
御大典を迎ふるに就いて  
布教師 田淵 静緑

御大典につき真宗信徒の記念事業  
擬講 稲葉 現淵  
奉祝の誠 主監 藤井 信悟  
王と法 学術 種村 義淵  
御大典記念事業に就いて 田仁 師庵  
国史に現はれたる大典と仏教 学術 日下 無倫

皇室と本願寺  
如何にして御大典を記念すべきか

文学士 鶴田 耿介  
文学士 藤谷 竟  
御大典盛儀  
一御大礼日取及時刻、二明治天皇の御心、  
三踐祚、四賢所、皇靈殿、神殿、五御礼使、  
六大典期日の勅定と奉告、七齋田點定の儀、  
八京都に行幸の儀、九京都御着、一〇賢  
所春興殿に渡御の儀、一一即位礼当日皇靈  
殿神殿に報告の儀、一二即位礼当日賢所大  
前の儀、一三即位礼後一日紫宸殿の儀、萬歳  
奉唱の時刻、一四即位礼後一日賢所御神樂  
の儀、一五神宮、皇靈殿、神殿並に官国幣  
社に勅使発遣の儀、一六御禊及び大祓の儀、  
一七大嘗祭前一日鎮魂の儀、一八大嘗祭当  
日神宮、皇靈殿、神殿奉幣の儀、賢所大前

日神宮、皇靈殿、神殿奉幣の儀、賢所大前

供進の儀、一八大嘗祭の儀、大嘗祭次第、  
悠紀殿供饌の儀、二〇主基殿供饌の儀、二  
一大嘗第一日の儀、二二大嘗第二日の儀、  
大饗夜宴の儀、二三神宮神武天皇並前帝御  
四代山陵親謁、二四東京に環幸の儀、二五  
大典後諸式、二六御鹵簿の編成

報道  
広 告  
会 告

▼第九四号 一九一五(大正四)年十二月一日

口絵  
支部支場代表者会記念撮影  
婦人法話会鹵簿奉拜所光景(写真版)  
報恩講御直命  
同復演

孝養の方法  
他力教に於ける死生観  
越後国の一同行へ  
家庭と宗教  
御主人の噂(六)  
御大典に遇ひ奉りて  
をため心(歌及讀)

嗣講 廣瀬 守一  
擬講 館 登  
擬講 奥山 見龍  
学術 伊藤 祐胤  
学術 種村 義淵  
影 法 師  
徳野きみ子  
藤井 巖

報道  
広 告

▼第九五号 一九一六(大正五)年一月一日

法話  
改新の覚悟 藤井 信悟  
御一代記開書法話 大河内秀雄  
講話

新年と念仏  
史伝

田淵 静縁

鬼子母神  
了源上人

安井 廣度  
東萍 迂人

応答  
安心示談

伊藤 祐胤  
板埜 良全

婦人法話会の改良を望む

家庭

八木 静枝  
田島 豊子

季節料理  
挿花瑣談

詠草  
寄国祝

初咲会員其他  
編輯部

報 道  
新年の儀式

無住 禪師

▼第九六号

一九一六(大正五)年二月一日

口絵

青銅御冠置物及推薦状 窮民慰藉会光景

法話

布教師 田淵 静縁  
主監 藤井 信悟

紀元節に就て  
真面目

講話  
佛教の根本精神

学師 本田 大猷  
学師 種村 義淵

史伝  
不幸なる女

学師 安井 廣度

少女  
龍の昔話

文学士 鶴田 耿介

模範生向井教枝嬢

淑女学校長 田島 教恵

家庭

季節料理  
喫茶養生論

淑女学校教諭 八木 静枝

雑纂  
慈善事業に就て

裏千家茶道師範代 鷺山 宗宙  
法学博士 小河滋次郎

報道  
涅槃の時節

小川 滋次郎

御直書披露復演

寺務総長 安部 恵水

法話  
念仏の御旨を思ふ

布教師 多田 鼎

講話  
彼岸会に就て

布教師 田淵 静枝  
擬講 柏原 祐義

緊張ある生活

布教師 田淵 静枝  
擬講 柏原 祐義

史伝  
みにくい女

学師 安井 廣度

小説  
操 子(上)

文学士 堀川 美治

雑纂  
手張から

主監 藤井 信悟  
文学士 鶴田 耿介

家庭  
調理法

淑女学校教諭 八木 静枝  
田島 豊子

報道  
投入に就て

八木 静枝

懸燈大師の御終焉『遺徳記』

八木 静枝

婦徳月曆

一九一六(大正五)年四月一日

▼第九八号

前御法主御親教  
当御法主御親教

南條 文雄

複 演  
法句經講和

藤井 巖

史伝  
花まつり(讃仏歌)

婦人法話会日曜学校

銀色女

安井 廣度

源信僧都と其母

鶴田 耿介

少女  
濡れ衣

安藤 専哲

家庭  
遠足用重話料理

八木 静枝  
鷺山 宗宙

報道  
喫茶養生論

鷺山 宗宙

慈善  
『優婆塞戒經』

鷺山 宗宙

當御門跡御直命

嗣講 齊藤 唯信

法話  
法敬とは兄弟よ(複演)

擬講 齊藤 唯信

御直書復演

擬講 花山 大安

史伝  
六字功能御文法話

擬講 稲葉 現淵

美しい娼婦、醜い老婢

学師 安井 廣度

雑纂  
病床録

学師 種村 義淵

小説  
操 子(下)

文学士 堀川 美治

家庭

大谷派婦人法話会編『婦徳』総目次

西洋菓子の製法

淑女学校教諭 八木 静枝

日曜学校讃仰歌

報道

▼第一〇〇号 一九一六(大正五)年六月一日

口絵

婦人法話会総裁 大谷恒子殿

婦人法話会会長 大谷章子殿

法話講話

母の十徳 文学博士 南條 文雄 (三)

平生業成 嗣講 廣瀬 守一 (四)

婦徳百号の発刊を祝す 嗣講 上杉 文秀 (九)

婦人法話会の幹事さん達に

布教師 平松 理英 (一五)

お念仏の生活 布教師 伊藤 大忍 (一七)

技師伝に頭はれたる婦人

布教師 田淵 静緑 (二三)

人生の三大覚悟 主監 藤井 信悟 (二九)

胎 教 学師 安井 廣度 (三五)

総裁殿の御事 会長殿の御事 (三七)

史伝

勢至丸 擬講 舟橋 水哉 (三九)

少女

少女対話 花まつりの夢 藤波 大圓 (四四)

家庭

甘藷の料理法

京都淑女教諭 八木 静枝 (五〇)

簡易なる刺繍練習法

京都高女教諭

渡邊 秋岳 (五二)

習字に就きて

藤村益太郎 (五三)

文苑

詠 草

初咲会 (五四)

報道

会長殿御巡回紀行 随 行 員 (五五)

本部だより 地方だより (五七)

ゆかしい花まつり 記 者 (六〇)

源信僧都聖訓(横川法語) 表紙裏 (六二)

挿絵 御下附御染筆／本部大会／名古屋支部大会／本部慈善市／寄贈画栖鳳氏、松園氏／名古屋支部施米／尾張第一支場

▼第一〇一号 一九一六(大正五)年七月一日

婦徳月曆

法話 婦人法話会 御消息披露演達

嗣講 齋藤 唯信

講話 家庭の感情問題 擬講 柏原 祐義

史伝 才媛ベージヤリ 学師 安井 廣度

歐洲 戦場の花 文学士 鶴田 耿介

家庭 アイスクリーム簡易製法

淑女学校教諭 八木 静枝

一つ身単衣裁縫積り方(上)同 田茂井房子

団扇の刺繍 京都女学校教諭 渡邊 秋岳

詠草

麦秋、海路

初咲会

報道

本部だより

地方だより

抄録

私の試みてゐる児童教育の方法すれ草女史

明治天皇御製

法話

婦徳月曆 一九一六(大正五)年八月一日

史伝 水能く石を穿つ 擬講 大須賀秀道

名高い婦人の少女時代 並山 拜石

文苑 応募和歌選評 御歌所寄人 須川 信行

家庭 小児の身体 文学博士・医学博士 富士川 游

食品の貯蔵法 淑女学校教諭 八木 静枝

一つ身単衣裁方積り方(下)同 田茂井房子

雑纂 婦人法話会現勢一斑

報道 本部だより

地方だより

夫婦の心得 『六法禮経』

婦徳月曆 一九一六(大正五)年九月一日

▼第一〇三号

婦徳月曆

一九一六(大正五)年九月一日

婦徳月曆

一九一六(大正五)年九月一日

婦徳月曆

一九一六(大正五)年九月一日

婦徳月曆

一九一六(大正五)年九月一日



法話 我慢に紛れて悲し 擬講 大須賀秀道  
 講話 清潔を愛する国民 擬講 和田 龍造  
 史伝 旃陀羅の女 学師 安井 廣度  
 文苑 明心院貞月尼 布教師 松本 雪城  
 応募和歌選評 御歌所寄人 須川 信行  
 兼題『秋風』『月』  
 家庭 此頃の病氣 医学博士 松尾 巖  
 報道 本部だより  
 本都だより  
 地方だより  
 京都無料宿泊所同職業紹介所彙報  
 少女 孝行娘 井上 淡星  
 武蔵野の月 (『秀存語録』)  
 ▼第一〇四号 一九一六(大正五)年一〇月一日  
 婦徳月曆 講師 南條 文雄  
 法主臺下御書取 演 擬講 和田 龍造  
 外虚栄と内の虚栄 擬講 藤塚 智秀  
 慈悲清涼月 布教師 並山 拜石  
 史伝 名高い婦人の少女時代  
 ジャン・ダーク  
 文苑

応募和歌選評 御歌所寄人 須川 信行  
 兼題『蟲』『光』  
 家庭 西洋料理 京都淑女学校教諭 八木 静枝  
 裁縫 同 田茂井ふさ  
 報道 本部だより  
 地方だより  
 京都無料宿泊所同職業紹介所彙報  
 能登道伝記 学師 種村 義淵  
 信心の収獲 (親鸞聖人『田植歌』)  
 ▼第一〇五号 一九一六(大正五)年十一月一日  
 婦徳月曆 法話 立式子式に就て 布教師 日野 公任  
 吾人の感謝 嗣講 齋藤 唯信  
 最大の問題 主監 藤井 信悟  
 講話 念仏者の痼疾 並山 拜石  
 史伝 名高い婦人の少女時代  
 ジャン・ダーク  
 家庭 在家内仏勤行おきうじ式  
 三つ身単衣裁方 京都淑女学校教諭 田茂井ふさ  
 文苑 詠草 初咲会  
 報道 本部だより

地方だより  
 京都無料宿泊所同職業紹介所彙報  
 御正忌 (『御文』)  
 ▼第一〇六号 一九一六(大正五)年十二月一日  
 婦徳月曆 法主臺下御直命  
 復演 寺務総長 阿部 恵水  
 法話 歳末の礼には信心を取れ 布教師 田淵 静縁  
 講話 昔の婦徳と今の婦徳 擬講 和田 龍造  
 雑纂 朝鮮の風俗 擬講 舟橋 水哉  
 家庭 在家内仏勤行おきうじ式  
 綿に就て 京都淑女学校教諭 田茂井ふさ  
 簡易なる薩摩芋の料理 同 飯田 秀子  
 文苑 応募和歌選評 御歌所寄人 須川 信行  
 報道 本部だより  
 地方だより  
 京都無料宿泊所同職業紹介所彙報  
 信心と歡喜(慈覺講師消息一節)  
 ▼第一〇七号 一九一七(大正六)年一月一日  
 會長殿御歌 法話 父母の恩義 嗣講 齋藤 唯信

大谷派婦人法話会編『婦徳』総目次

御一代記聞書法話	主監 藤井 信悟
講話	
御尤も捨てる	擬講 柏原 祐義
五箇條勸諭と婦人	布教師 田淵 静緑
遠山雪	擬講 和田 龍造
雑纂	
心地観経四恩の歌	嗣講 上杉 文秀
家庭	学師 種村 義淵
家庭の宗教味	
在家内仏おきうじ式	
文芸	
応募和歌選評	御歌所寄人 須川 信行
『遠山雪』	
報道	
本部だより	
地方だより	
京都無料宿泊所同職業紹介所彙報	
初だより	
信心の初日出(口伝鈔)	
▼第一〇八号 一九一七(大正六)年二月一日	
法話	
観音も勢至も神々も	嗣講 住田 智見
御一代記聞書法話	主監 藤井 信悟
講話	
家庭平和の要諦	擬講 柏原 祐義
信仰問題に就て	布教師 田淵 静緑
応答	
信仰問答	擬講 和田 龍造
家の宗教と自己の信心に就て/念仏と品性に就て/如来の御計ひと後念の喜	

雑纂	
心地観経四恩の歌(二)	嗣講 上杉 文秀
歎光録	学師 種村 義淵
家庭	
在家内仏おきうじ式(二月)	
報道	
本部だより	
地方だより	
京都無料宿泊所同職業紹介所彙報	
懸賞募集会歌審査報告	
雪ほとけ	
和国の教主	(磯長廟窟碑文)
▼第一〇九号 一九一七(大正六)年三月一日	
法話	
阿弥陀経法話	擬講 稲葉 現淵
御一代記聞書	主監 藤井 信悟
講話	
廻心に通別の二あり	布教師 田淵 静緑
道を求むるころ	学師 種村 義淵
応答	
信仰問答	擬講 和田 龍造
信心と心の動揺/如何にせば法悦の心起るや/家庭上の煩悶と念仏/信心と信後の行状	
雑纂	
心地観経四恩の歌(三)	嗣講 上杉 文秀
家庭	
在家内仏おきうじ式(三月)	
文芸	

応募和歌選評	御歌所寄人 須川 信行
報道	
本部だより	
地方だより	
彼岸だより	
彼岸と真宗	
▼第一一〇号 一九一七(大正六)年四月一日	
口絵	
光養磨殿御肖像	
法話	
御得度御書立複讀	擬講 大須賀秀道
御得度式に就ての感	嗣講 中島 覺亮
講話	
宗祖の御誕生及び御信仰	
御得度式を祝し奉りて	擬講 舟橋 水哉
応答	
信仰問答	擬講 和田 龍造
私の信心はこれで如何でせうか/信後の行状と法体安心/信心と報謝/安心と生の力	
時報	
御得度式次第	
宗祖の御得度	慈圓僧正消息
家庭	
在家内仏おきうじ式(四月)	
報道	
本部だより	
地方だより	

御得度式奉祝唱歌

▼第一一〇号 一九一七(大正六)年五月一日

前御門跡御親教

御門跡御直命

復演

文書科長 近藤 純悟

法話

阿弥陀經法話

擬講 稲葉 現淵

御一代記聞書法話

主監 藤井 信悟

講話

聴聞の一大眼目

布教師 田淵 静緑

応答

信仰問答

擬講 和田 龍造

御勅命について

富山 無名 子

家庭

在家内仏おきうじ式(五月)

報道

本部だより

地方だより

三河聯合大会記

挿絵

慈善市寄贈書画／前法主臺下／竹内栖鳳

氏／上村松園女史／都路華香氏

平生業成(執持鈔)

三河聯合大会

▼第一一二号 一九一七(大正六)年六月一日

法話

婦人の美德を發揮せよ

嗣講 河野 法雲

御一代記聞書法話

主監 藤井 信悟

講話

信後の生活状態

布教師 田淵 静緑

応答

信仰問答

擬講 和田 龍造

信仰と年齢及娛樂／信とタノムの間

異／静座法と念仏行者

小説

貞子

文学士 堀川 鶯陽

家庭

在家内仏おきうじ式(六月)

文芸

応募和歌(郭公)

報道

本部だより

地方だより

資生産業是仏教(『百家瑠行伝』)

▼第一一三号 一九一七(大正六)年七月一日

法話

日本婦人と愛国心

擬講 大須賀秀道

御一代記聞書法話

主監 藤井 信悟

講話

聞き得る人至って稀なり

布教師 田淵 静緑

応答

信仰問答

擬講 和田 龍造

懈怠の生活／其俟ながらの御助

家庭

在家内仏勤行おきうじ式(七月)

文芸

応募和歌(櫻)

報道

本部だより

地方だより

懈怠の心(御一代記聞書)

▼第一一四号 一九一七(大正六)年八月一日

口絵

婦人法話会布哇ホノルル支部

法話

御一代記聞書法話(其七)主監 藤井 信悟

講話

理想の婦人

布教師 田淵 静緑

応答

信仰問答

擬講 和田 龍造

如何にせば信仰確立すべきや／機の方と法の方

雑纂

偶時偶感

学者 種村 義淵

少女

ボン太郎

大淵 小華

家庭

在家内仏勤行おきうじ式(八月)

報道

北海道巡回記

随員 生

本部だより

地方だより

挿絵

当別支場記念大会／札幌支部記念大会／小樽支部記念大会／旭川支部記念大会／後志支部発会式／名寄支場アイヌ会員

支場発会式／名寄支場アイヌ会員

支場発会式／名寄支場アイヌ会員

支場発会式／名寄支場アイヌ会員

支場発会式／名寄支場アイヌ会員

▼第一一五号 一九一七(大正六)年九月一日

法話	婦人の心懸け	嗣講	河野 法雲
講話	御一代記聞書法話(其八)主監	藤井 信悟	
他人を許せ	擬講	柏原 祐義	
楽天主義の修養	布教師	田淵 静緑	
追弔の意義	学師	種村 義淵	
史伝	乃木將軍と仏教	文学士	鶴田 耿介
文苑	草花	応募和歌	
雜纂	五乗院講師法話	記者	
家庭	在家内仏勤行おきうじ式(九月)		
少女	王様と少女	小室八重子	
報道	本部だより		
挿絵	室蘭支部大会／青森支部大会／砂川支部大会／		
	岩見沢支部大会／近文支場大会／金木支場大会		
	耳なれ雀(蓮如上人御一代記聞書)		
▼第一一六号	一九一七(大正六)年一〇月一日		
前御門跡御直命	講師	南條 文雄	
複演			
本領			

御一代記聞書法話

仏檀	主監	藤井 信悟	
求道の犠牲	学師	種村 義淵	
信仰問答	布教師	田淵 静緑	
破船と念仏／念仏は力なり	擬講	和田 龍造	
在家内仏勤行おきうじ式			
報道	本部だより		
地方だより			
挿画	輪島支部十週年大会／白根支場大会／木津支場発会式		
▼第一一七号	一九一七(大正六)年十一月一日		
本領(二人の力、団体の力)			
浄土を口にし娑婆を心にす	故威廣院講師		
御一代記聞書法話	主監	藤井 信悟	
信仰問答	擬講	和田 龍造	
親ごころ	学師	種村 義淵	
報恩講に就いて	布教師	田淵 静緑	
昔の女と今の女	田淵 静緑		
三つの牡丹餅	田淵 静緑		
本部だより	田淵 静緑		
地方だより	田淵 静緑		
水害慰問報告	田淵 静緑		
挿画	武生支部十週年大会／月潟支場十週年大会		
▼第一一八号	一九一七(大正六)年十二月一日		
御門跡御直命	嗣講	上杉 文秀	
複演			
本領			

本領

弥陀の法水	故威光院講師		
御一代記聞書法話	主監	藤井 信悟	
足の悪い若き婦人に	学師	沼 法量	
贅沢と幸福との別	擬講	柏原 祐義	
犠牲的精神	学師	種村 義淵	
歳晩の教訓	布教師	田淵 静緑	
本部だより			
地方だより			
水害慰問報告(第二回)			
挿画	米北第二支場十周年大会／美唄支部大会／鹿島北支部大会		
▼第一一九号	一九一八(大正七)年一月一日		
天津支部臨時講演会(口絵)			
本領			
海の法門	大谷大学教授	上杉 文秀	
御一代記聞書法話	主監	藤井 信悟	
百の非難より一の実行	擬講	柏原 祐義	
香樹院法話	学師	禿 義峰	
家庭要訓	擬講	和田 龍造	
新年に於ける笑と涙	布教師	田淵 静緑	
年頭偶感	学師	種村 義淵	
海辺松(羽衣伝説)	文学士	藤谷 寛	
事業並会計報告	本部		
本部だより			
地方だより			
▼第一二〇号	一九一八(大正七)年二月一日		
常行大悲の徳	大谷大学教授	住田 智見	

御一代記聞書法話(一三回) 藤井 信悟  
海の法門(下) 嗣講 上杉 文秀

香樹院法話(その二) 学師 禿 義峰  
どうすれば腹のたゝぬやうになるか

梅花と修養 学師 種村 義淵  
現代は婦人に対して何を要求しつゝあるか

女の懐みたき事ども(上) 撰講 和田 龍造  
本部だより 主監 藤井 信悟

地方だより 主監 藤井 信悟  
挿画

代表者会/年頭施與  
口絵

▼第二二二号 一九一八(大正七)年三月一日

新法主臺下/久遠宮第三皇女智子殿下/東

本願寺全影/洗心会会員  
御慶事の喜び

真宗と婦人 主監 藤井 信悟  
楽すれば落する 主監 柏原 祐義

御一代記聞書法話 主監 禿 義峰  
香樹院法話 学師 禿 義淵

犠牲のこゝろ 学師 種村 義淵  
今後の家庭改良問題 撰講 和田 龍造

女の懐みたき事ども(中) 主監 藤井 信悟  
楽しき家庭(丸茂夫人) 記 藤井 信悟

会報/本部だより/新設支部場/特維持会  
員新加入/挿絵/婦人の一生の涙/丸茂夫

人の家庭  
懸賞課題 婦人一生の如何なる時に信仰をう

るが是か

▼第二二三号 一九一八(大正七)年四月一日

口絵 眞無量院御肖像/御筆/新法主臺下御肖像

御門跡御直命 参事・理学士 石川 成章  
復 演 撰講 大須賀秀道

真宗婦人の念力 撰講 大須賀秀道  
御一代記聞書法話(一五回) 主監 藤井 信悟

香樹院法話(その四) 学師 禿 義峰  
念仏の現益 布教師 田淵 静緑

子供の心 学師 種村 義淵  
女の懐みたき事ども 主監 藤井 信悟

女性の疑問 文学士 三輪田元道  
狭穂姫皇后 学師 塚崎 榮智

尼になるまで 学師 菊井 翠影  
報道 九州巡回記/本部だより/地方だより

▼第二二三号 一九一八(大正七)年五月一日  
前門跡御直命

前門跡御直命 復 演 大谷大学長・文学博士 南條 文雄  
当門跡御直命

御一代記聞書法話(第一六回) 主監 藤井 信悟  
一家の平和は主婦の信にあり

香樹院法話(その五) 布教師 木津 無庵  
家庭と強き国民(家庭要訓)(その四) 学師 禿 義峰

撰講 和田 龍造  
手帖の中から 学師 種村 義淵

子供のある家庭へ 医学士 中川 末雄  
狭穂姫皇后 学師 塚崎 榮智

尼になるまで 学師 菊井 翠影  
挿絵

慈善市の模様  
報道 慈善市/会長殿御巡向/幹事長御巡回/地

方だより

▼第二二四号 一九一八(大正七)年六月一日

念仏行者のたのしみ 嗣講 齋藤 唯信  
認められし人 大谷大学教授 金子 大策

香樹院法話(その六) 学師 禿 義峰  
婦人の特性涵養 嗣講 河野 法雲

男子の飾物たるより忠告者たれ 日本女子大学校学監 麻生 正藏  
和顔愛語 東洋女学校教授 岩上 行坡

戦争と婦人/正義の念  
山羊盗棒 学師 大淵 小華

狭穂姫皇后 学師 塚崎 智學  
尼になるまで 学師 菊井 翠影

新御法主臺下御事/御巡回記/本部だよ  
り/地方だより

▼第二二五号 一九一八(大正七)年七月一日  
口絵

熊本支場大会/長崎支部大会  
批判のこゝろ 撰講 大須賀秀道

香樹院法話(その七) 学師 禿 義峰  
母親と源信僧都 学師 本多 信雄

汽車の旅から 学師 種村 義淵

罪に悩む婦人へ 擬講 柏原 祐義

主婦の模範と仰ぐべき皇后陛下の御日常 大森鍾一 謹話

皇太后宮大夫・男爵 衣食住の問題「家庭要訓」(その五) 擬講 和田 龍造

家庭の信仰 京都淑女高等女学校長 田島 教恵

母の子供に話すはなし(魔法の泉) 学部 安藤 専哲

本部だより/地方だより/挿画

◆◆第一二六号◆◆ 欠本

▼第二二七号 一九一八(大正七)年九月一日

楽な生活 主監 近藤 純悟

香樹院法話(その九) 学部 禿 義峰

離婚せんとする婦人へ 擬講 柏原 祐義

安価生活 文学士 厨川 白村

教育と宗教 小城中学校教諭 入矢 祐雲

衣食住の問題「家庭要訓」(その七) 擬講 和田 龍造

中秋三五の明月に就て 布教師 田淵 静縁

遊女と仏弟子(ゴスヘル、ブッダの一節)

幸福な光子さん 葉 竹 山

報道 正 栄 子

北陸の旅 種村 義淵

本部だより

夏期講習会/例会法話/浦鹽派遣軍慰問/御法主北海道巡化/無量宿泊所職業紹介所

彙報/特別維持会員新加入者/新設支場

地方だより

直江津支場

▼第二二八号 一九一八(大正七)年一〇月一日

時局に際して婦人に望む

先づ仏け様を知れ大谷大学教授 河野 法雲

離婚せんとする婦人に 擬講 柏原 祐義

老人ある家 擬講 和田 龍造

信仰は成功の大礎 池見 實玄

死の前の少女 鹿野非人生

教育と宗教 小城中学校教諭 入矢 祐雲

東本願寺御裏方の御修養 記 者 S N 子

秋の墓参の感 森山 涙美

死の太鼓

稿軍の日

本部だより

地方だより

◆◆第一二九号◆◆ 欠本

◆◆第一三〇号◆◆ 欠本

▼第三一三号 一九一九(大正八)年一月一日

年頭瑣言 主幹 近藤 純悟

香樹院法話(その一二) 学部 禿 義峰

隋の牛弘 柳橋 絢子

俳句の教 文学士 三輪田元道

流行性感冒の予防法 医学士 吉田 久造

家族生活の暗礁 沼 月明居

人のアラより自分のアラ 学部 種村 義淵

結婚せんとする婦人へ 擬講 柏原 祐義

平和の曙光と婦人の覚醒 擬講 和田 龍造

本部だより

地方だより

出征軍人慰問金品寄贈者芳名

◆◆第一三二号◆◆ 欠本

▼第三三三号 一九一九(大正八)年三月一日

身の幸、心の幸 婦人法話会主幹 近藤 純悟

親鸞聖人の御息女彌姫 山田 文昭

香樹院法話(その一四) 学部 禿 義峰

戦後に於ける婦人の責務 学部 沼 法量

内職に志す婦人へ 擬講 柏原 祐義

摘み草篋 学部 種村 義淵

お伽噺を聴かせる注意 東洋幼稚園長 岸邊 福雄

念仏申すが手にて候 布教師 田淵 静縁

本部だより

地方だより

▼第三三四号 一九一九(大正八)年四月一日

若き女の親に 主幹 近藤 純悟

親鸞聖人の息女彌姫 詞講 山田 文昭

独り都に出でんとする婦人へ 擬講 柏原 祐義

離婚激増の傾向を如何にすべきか 沼 月明居

泣く子の賺し方 東洋幼稚園長 岸邊 福雄

新しき機運 擬講 和田 龍造

本部だより  
地方だより

◆第一三五号◆ 欠本

▼第一三六号

一九一九(大正八)年六月一日  
主幹 近藤 純悟  
知られたい心 沼 月明居  
流行と趣味の向上 三義 文子  
私のよこび 初夏の旅から 学師 種村 義淵  
悩める夫人に 女中の声 女中の声 安藤 義尊  
本部だより 光 子  
地方だより

▼第一三七号

一九一九(大正八)年七月一日  
口絵  
鶴来支部発会式／寶立支部発会式  
小事を疎んずる婦人へ 擬講 柏原 祐義  
雑誌帖より 主幹 近藤 純悟  
手向草 内務大臣 床次竹二郎  
見聞集 学師 種村 義淵  
病める叔母へ 学師 權藤 正行  
別居か同居か 棚橋女学校長 棚橋 絢子  
蓮華色比丘尼 植田まし枝  
心の鏡 貞 子  
通信欄

▼第一三八号

一九一九(大正八)年八月一日  
働く若き女へ 近藤 純悟  
誤解されたる婦人へ 柏原 祐義

子女の教養の其の母親  
蓮華色比丘尼  
雲溪和尚のことばも  
二諦録  
報道

◆第一三九号◆ 欠本

▼第一四〇号

一九一九(大正八)年一〇月一日  
婦人とデモクラシー 和田 龍造  
子供の立場になつて 沼 月明居  
秋の能登路から 種村 義淵  
家庭に於ける性情陶冶 田中 義能  
若王山の森 安藤 専哲  
報道 記 者

▼第一四一号

一九一九(大正八)年十一月一日  
病院の窓より(一)  
失明の人に與ふ 近藤 純悟  
怖るべき社会の風潮 蜂屋賢喜代  
忽然録 沼 月明居  
中産階級の活路 種村 義淵  
食糧問題 長谷川天溪  
貧乏と貧乏 秋野 孝道  
巨人の愛 河上 肇  
報道 記 者

▼第一四二号

一九一九(大正八)年十二月一日  
同事の面影 近藤 純悟  
感と応 安藤 州一  
雇人を使ふ婦人へ 柏原 祐義

病院の窓より(二)  
剪燈録  
日本婦人の体力と服装  
報道

▼第一四三号

一九二〇(大正九)年一月一日  
年頭の辞 豊橋支部大会  
樂天か厭世か 南條 文雄  
女自身の世界 口絵写真  
子供多きを託つ婦人へ 近藤 純悟  
婦人の社会 柏原 祐義  
孤 独 記 者  
絲なし機(お伽噺) 蜂屋賢喜代  
生活の影 岩井 信実  
出世鏡物語(その上) 種村 義淵  
託児所を訪ふ 雁來 紅苑  
通信 記 者  
報告

▼第一四四号

一九二〇(大正九)年二月一日  
横浜支部発会式、赤羽根支部幹部員  
女自身の改造 近藤 純悟  
我身知らず 稻葉 圓成  
虐げらるゝ婦人へ 柏原 祐義  
婦人の労働と家庭 松本亦太郎  
母性の問題 和田 龍造  
婦人の社会 記 者  
現代思潮と信仰 田淵 静縁  
嫁と姑との問題 小川操子其他  
出世鏡物語(その下) 雁來 紅苑

森の精  
通信  
報告  
水谷 八沙

▼第一四五号  
聖訓  
一九二〇(大正九)年三月一日

彼岸会と六波羅蜜多  
春は名残の藤の花物語(上)  
恩愛甚だ断ち難し  
聖徳太子と家庭  
ある日のこと  
南條 文雄  
雁来 紅苑  
松本 雪城  
橋川 正  
大淵 小華

▼第一四六号  
聖訓  
一九二〇(大正九)年四月一日

上手な聞きやう下手な聞きやう  
聖徳太子とその御家庭(続完)  
若き婦人の悲歎  
聖徳太子の逸話  
王女サヴィトリ  
春は名残の藤の花物語(中)  
森の精(その中)  
藤永 圓恵  
橋川 正  
阪埜 良全  
記 者  
大淵 小華  
雁来 紅苑  
八 沙

特別維持会員名簿

▼第一四七号  
聖訓  
一九二〇(大正九)年五月一日

煩悩退治  
楽になる法  
家庭の宗教  
介抱しつゝ  
春は名残の藤の花物語(下)  
廣陵 了賢  
和田 祐意  
山邊 習學  
幡谷 淳信  
雁来 紅苑

森の精(その下)  
家庭顧問欄  
安心手鏡／家庭教育／家庭便覧／季節料理  
八 沙

通信欄  
特別維持会員名簿、編輯記

▼第一四八号  
聖訓  
一九二〇(大正九)年六月一日

求道者雪山と仮名手本の教  
再度の催促にあひて  
美観をほこるな  
苦悩の中に  
義侠な蜂  
読者欄  
美濃 義尊  
美濃 晃月  
美濃 晃月

家庭顧問欄  
安心手鏡／家庭衛生／季節料理  
通信欄  
特別維持会員名簿

▼第一四九号  
聖訓  
一九二〇(大正九)年七月一日

求道者雪山と仮名手本の教  
再度の催促にあひて  
時間の節約  
身も心も幸福になれる法  
正吉の出世  
先哲語録  
会長殿九州地方恩巡回記  
家庭顧問欄  
家庭教育／雑録  
藤永 圓恵  
安藤 義尊  
幡谷 淳信  
和田 祐意  
石見 太郎  
鹿野 久恒

通信欄  
特別維持会員名簿

◆第一五〇号―一七二号◆ 欠本

▼第一七三号  
聖訓  
一九二二(大正二)年七月一日

水香を人に贈りて  
心の問題に就て  
信仰の花  
克己の精神  
愛妻か御同行か  
(念仏庭のA大兄へ)  
裁縫講義  
感謝話  
お産の前後(二)  
報告  
安藤 州一  
藤井 信悟  
日野 實悟  
北川 秋翠  
桑田 從尊  
瀬戸 良助  
名古屋市門前町警察署長談  
内務省衛生局

◆第一七四号―一七八号◆ 欠本

▼第一七九号  
聖訓  
一九二三(大正二)年一月一日

立教開宗記念の年を迎へて  
祖徳讃仰  
農村問題と婦人の力  
修身二十則  
香樹院記手記抄  
長女を失ひたる婦人会員に本願力を示す  
地方だより  
近藤 純悟  
藤井 信悟  
大須賀秀道  
禿 義峯  
日野 公任



大垣より／工場より

信の力

裁縫講義

報道

広告

北川 秋翠  
瀬戸 良助

広告

▼第一八二号 一九二三(大正一二)年四月一日  
聖訓

生の道へ

光明の天地

親鸞聖人の標語

田淵緑師の計音を聞て

莊嚴光院現如上人

我を見つめて

裁縫講義

報道

広告

近藤 純悟

藤井 信悟

田淵 静縁

河島 末菊

北川 勝忍

瀬戸 良助

▼第一八五号 一九二三(大正一二)年七月一日  
聖訓

現実の苦より真実の道へ

仏教から出た言語に就て

散華集(中)

家庭及社会と従順の道

京都の偉人のはなし

我を見つめて

京都の偉人

裁縫講義

報道

広告

近藤 純悟

種村 義淵

幡谷 淳信

北川 秋翠

河島 末菊

瀬戸 良助

開宗記念伝道部

▼第一八六号 一九二三(大正一二)年八月一日  
婦徳の御歌

真実生命道へ

主観客観集

散華集(下)

仏教と婦人問題

楽観か悲観か

あさましき姿を見て

婦人の犯罪に就て

近藤 純悟

種村 義淵

幡谷 淳信

藤村 學

北川 秋翠

河島 末菊

河島 末菊

▼第一八一号 一九二三(大正一二)年三月一日  
聖訓

我身の上

客観主観集

真宗開闢と婦人

立教開宗

亡父之遺訓

伊藤長次郎家訓言

お産の前後

報道

裁縫実習会規則

近藤 純悟

種村 義淵

日野 公任

幡谷 淳信

北川 秋翠

内務省衛生局

内務省衛生局

▼第一八三号 一九二三(大正一二)年五月一日  
聖訓

女の力

自然

十方正面の御本尊

我婦人会の三大要素

仏教と婦人問題

嵐のあとの生活

京都の偉人のはなしのふしづし

裁縫講義

記念御法要

報道

広告

近藤 純悟

悟 生

藤井 信悟

日野 公任

藤村 學

北川 勝忍

河島 末菊

瀬戸 良助

▼第一八四号 一九二三(大正一二)年六月一日  
聖訓

愛別離苦より

聖訓

近藤 純悟

大谷派婦人法話会編『婦徳』総目次

報道  
広 告

▼第一八七号 一九二三(大正一二)年九月一日

聖訓  
女の三宝  
他力信心のすがた  
大原問答  
願求の対衆  
仏 恩  
地方だより  
報道  
広 告

近藤 純悟  
蓮容 信城  
藤井 信悟  
北川 秋翠  
庄 山 生

裁縫講義  
地方だより  
報道  
広 告

瀬戸 良助

▼第一九〇号 一九二三(大正一二)年十二月一日

聖訓及行事  
民風作興の大詔  
御 垂 示  
反省より精進へ(多難の年を送りて)  
大福長者  
云はぬ胸  
逆縁の恩寵  
支部支場震災救援概要(一)  
救援の後に(二)  
報道  
広 告

近藤 純悟  
香川 千巖  
白 露 子  
藤村 学

広 告

▼第一九二号 一九二四(大正一三)年二月一日

婦徳月曆  
御成婚奉祝の辞  
被りものをとりて  
久遠の母性(二)  
念仏と忍耐  
あゝ妻よ  
貰ひ児に就て  
失くならぬ宝  
支部支場震災救援概要(三)  
関東震災義捐金寄附氏名(一)  
報道  
広 告

近藤 純悟  
岩見 護  
貝沼 勇見  
赤藤 勇  
幡谷 淳信  
柏樹 修

▼第一八八号 一九二三(大正一二)年一月一日

聖訓  
罹災者救護所写真 十一葉  
大震災の啓示  
香樹院手記抄  
水火録  
仏教と婦人問題(四)  
東京の大震災にあひて  
報道  
地方だより  
広 告

近藤 純悟  
禿 義峯  
幡谷 淳信  
藤村 学  
河島 末菊

▼第一九一号 一九二四(大正一三)年一月一日

會長殿御歌  
婦徳月曆  
新年を迎へて  
久遠の母性(一)  
信仰生活  
冷たい心  
ほんとうに清い心  
元旦の心  
裁縫講義  
支部支場震災救援概要(二)  
報道

近藤 純悟  
岩見 護  
香川 千崑  
幡谷 淳信  
柏樹 修  
と 江 う  
瀬戸 良助

▼第一九三号 一九二四(大正一三)年三月一日

婦徳月曆  
逃げてはならぬ  
一滴の水(一)  
罪の女  
世相に触れて  
貧しき妻に  
怨み得ぬ心  
眼の玉と身の肉  
関東震災義捐金寄附氏名(二)  
地方通信  
報道  
新刊紹介  
会 告  
広 告

近藤 純悟  
岩見 護  
安藤 義淵  
種村 義も  
幡谷 淳信  
柏樹 修

▼第一八九号 一九二三(大正一二)年十一月一日

聖訓  
震災と国民の志気  
東京で見た事感じた事  
更生の機

近藤 純悟  
高濱 哲雄  
北川 秋翠

▼第一九四号 一九二四(大正一三)年四月一日  
智子女王殿下、新法主臺下御近影  
婦徳月曆

御結婚  
近藤 純悟

一滴の水(二)

世相に触れて(二)

落椿  
種村 義淵  
悟 生

仏前結婚のすゝめ

語黙何れか

須弥須摩王  
幡谷 淳信  
柏樹 修  
瀬戸 良助

裁縫講義

報道

会告

広告

▼第一九五号 一九二四(大正一三)年五月一日  
婦徳月曆

御結婚奉讃歌

智子女王殿下の文藻

御降嫁と民衆的宗教

智子女王殿下の御降嫁を仰き奉りて

近藤 純悟

家庭の円満

愛子の死亡前後

鬼と人

報道

御慶事彙報

広告

▼第一九六号 一九二四(大正一三)年六月一日  
婦徳月曆

好きなものの嫌ひなもの

信と生活

地上の光

御慶事所感

苺

争ふより退け(家庭談叢)

鹿と王様(童話)

報道

地方だより

広告

▼第一九七号 一九二四(大正一三)年七月一日  
婦徳月曆

排日法と米突法

懺悔のころ

世相に触れて(三)

三言二道一友

父と子(愛子の死亡前後)(二)

子供の宗教々育(家庭談叢)

鹿のいのち(童話)

裁縫とメートル法

報道

地方だより

広告

近藤 純悟

松岡 貫之

岩見 護

日野 公任

赤藤 勇

幡谷 淳信

柏樹 修

▼第一九八号 一九二四(大正一三)年八月一日  
婦徳月曆

是でよいといふ人

信の道

大正の妙好人

罪の子の親(愛子の死亡前後)(三)

近藤 純悟

藤井 信悟

日野 公任

▼第一九九号 一九二四(大正一三)年九月一日  
婦徳月曆

悲しみ得ざる悲哀(震災回顧)

久遠の親

生活内容(その一)

愛する心(家庭談叢)

毒の木の実(童話)

夜具の裁縫

報道

広告

瀧本 助造

幡谷 淳信

いさむ

悟 生

瀬戸 良助

▼第二〇〇号 一九二四(大正一三)年一〇月一日  
婦徳月曆

求むる利益と與へらるゝ功德

同行の顔色

信仰餘瀝

人間愛(生活内容其二)

明りがたてたい

徳の壺(童話)

夜具の裁縫(続)

報道

会告

広告

近藤 純悟

藤井 信悟

松岡 貫之

北川 勝忍

幡谷 淳信

柏樹 修

瀬戸 良助

▼第二〇一号 一九二四(大正一三)年一月一日

婦徳月曆  
御同朋の精神  
苦悩の家(一)  
信仰餘瀝  
三信一心  
充たされぬ心(家庭談叢)  
会長殿御巡向記  
報道  
広告

近藤 純悟  
岩見 護  
松岡 貫之  
北川 勝忍  
幡谷 淳信

▼第二〇二号 一九二四(大正一三)年二月一日

婦徳月曆  
歳末の感、新年を迎ふる心  
苦悩の家(二)  
母性愛の表現と信仰  
妾の立場(家庭談叢)  
悪い婆羅門行者(童話)  
勤儉奨励デー  
外三名  
報道  
会告  
広告

近藤 純悟  
岩見 護  
北川 勝忍  
幡谷 淳信  
柏樹 修  
北村 しづ

▼第二〇三号 一九二五(大正一四)年一月一日

会長殿御歌  
新年の歌  
年頭言  
聞の宗教(信仰講和)  
苦悩の家(三)  
亡き妻をいたみて(和歌)

近藤 純悟  
岩見 護  
圓 城

落葉  
玉耶女(聖典物語)

婦人団体の事業に就いて  
信仰問答  
報道  
広告  
表紙画／乳糜供養／仲原竹鳳画伯

赤藤 勇  
野間 修  
幡谷 淳信

▼第二〇四号 一九二五(大正一四)年二月一日

巻頭言  
三宝の歌  
自己の価値(信仰講和)  
苦悩の家(四)  
人間味と宗教  
男の眼  
玉を失ひたる女(聖典物語)  
信仰問答  
報道  
広告

近藤 純悟  
岩見 護  
北川 勝忍  
赤藤 勇  
野間 修

▼第二〇五号 一九二五(大正一四)年三月一日

巻頭言  
蓮如上人の信仰と生活(講和)  
苦悩の家(五)  
聖從せる彼女(上)  
とられた花  
二人の子  
獅子のなきけ(聖典童話)  
信仰問答  
報道  
会告

近藤 純悟  
岩見 護  
渡邊 渥水  
赤藤 勇  
了 温  
野間 修

広告

▼第二〇六号 一九二五(大正一四)年四月一日

巻頭言  
聖誕の歌(唱歌)  
花まつり(唱歌)  
人生の矛盾より宗教へ(講和)  
聖從せる彼女(中)  
よしあし草  
天の幸  
地の幸  
餓と愛  
壊苦の都(聖典童話)  
信仰問答  
報道  
広告

近藤 純悟  
渡邊 渥水  
桑原 直子  
悟 生  
紫 蘭  
野間 修

▼第二〇七号 一九二五(大正一四)年五月一日

奉祝銀婚御式  
和合と仏法(講和)  
聖從せる彼女(下)  
求むる人  
いのち  
極楽鳥(童話)  
質問応答  
報道  
広告

近藤 純悟  
渡邊 渥水  
赤藤 勇  
いさむ  
野間 修  
松岡 貫之

▼第二〇八号 一九二五(大正一四)年六月一日

巻頭言  
家の宗教か人の宗教か(講話)  
折々の歌

大須賀秀道  
廣瀬 南雄

蓮美色比丘尼前生譚(童話)

野間 修

質問応答

松岡 貫之

裁縫講義

瀬戸 良助

報道

▼第二〇九号 一九二五(大正一四)年七月一日

巻頭言 戦場より楽園へ

生くる教(講和)

近藤 純悟

処女の前途

瀬味 祐成

蓮華色比丘尼前生譚(童話)

野間 修

信仰問答

松岡 貫之

裁縫講義

瀬戸 良助

山陰地方震災慰問記

震災義捐金

本部たより

広告

▼第二一〇号 一九二五(大正一四)年八月一日

巻頭言 孟蘭盆

與へられたる幸福より(講和)

近藤 純悟

苦悩と救済(一)

幡谷 淳信

夢(童話)

釋 了温

信仰問答

松岡、近藤

忘れな草

かず 江

震災義捐金

本部たより

広告

▼第二一一号 一九二五(大正一四)年九月一日

巻頭言

彼岸

婦人の自重(童話)

近藤 純悟

苦悩と救済(二)

幡谷 淳信

おもひの跡

かず 亥

雲のかげ

杜 葉

病床婦人の法悦

大溪 専

鳶と鳩(童話)

野間 修

震災水害義捐金

本部たより

地方たより

広告

口 絵

▼第二一二号 一九二五(大正一四)年一〇月一日

巻頭言 会旗親授式

善知識

近藤 純悟

妻を失ひたる友に(講和)

幡谷 淳信

苦悩と救済(三)

かず 江

歌反古

杜 葉

秋 晴

野間 修

亡き文ちゃん

瀬戸 良助

裁縫講義

悟 生

北海随伴記(一)

本山彙報

本部たより

地方たより

口 絵

▼第二一三号 一九二五(大正一四)年十一月一日

巻頭言 報恩講

恩を喜ぶ人(講和)

近藤 純悟

苦悩と救済(完)

幡谷 淳信

輝ける婦人(上)

大溪 賢雄

秋の聲(和歌)

かず 江

不思議な話(童話)

野間 修

北海随伴記(二)

悟 生

伝燈式彙報

本部たより

口 絵

▼第二一四号 一九二五(大正一四)年十二月一日

巻頭言 十勝支部支場聯合大会

就任に際して

藤井 信悟

信心為本

幡谷 淳信

輝ける婦人(下)

大溪 賢雄

法悦のうた

須磨 子

不思議な話(童話)

野間 修

北海随伴記(三)

悟 生

代表者会並に会告

本部たより

口 絵

告

▼第二一五号 一九二六(大正一五)年一月一日

総裁との御染毫/会長殿最近御写真

冠頭言

會長殿御履歴

近藤 純悟

更生の婦人

藤井 信悟

四撰法

宮部 圓成

二河白道

柏原 祐義

自己社会及家庭の生きる道

竹中 慧照

朝に礼拝夕に感謝

木全 徳本

仏教婦人観

野間 修

旅(童話)

修

大谷派婦人法話会編『婦徳』総目次

報 告 道	▼第二六号 一九二六(大正一五)年二月一日	冠頭言 四撰法(第二) 朝に礼拝の意義 炉辺閑話 業障の重荷を背負ふて(第一) 仏教婦人観(第二) 『旅』(童話) 『はなしのたね』	藤井 信悟 竹中 慧照 近藤 純悟 幡谷 淳信 木全 徳本 野間 修
報 告 道	▼第二七号 一九二六(大正一五)年三月一日	冠頭言 四撰法(第三) 眞実の母性愛(上) 仏法領のもの 二河白道 仏教婦人観(第三) 宇右衛門のありまゝ記	藤井 信悟 近藤 純悟 竹中 慧照 宮部 圓成 木全 徳本
報 告 道	▼第二八号 一九二六(大正一五)年四月一日	口 絵 月 曆 念仏を信ずる事の出来ない機類 眞実の母性愛	藤井 信悟 近藤 純悟
信仰生活 生活の意義 六つの誡め 仏教婦人観 妻はハルビンの土に 桜吹雪	▼第二九号 一九二六(大正一五)年五月一日	月 曆 煩惱のまゝ救はるゝ教 眞実の母性愛 親子相互の道 誠の道 仏教の婦人観	藤井 信悟 近藤 純悟 竹中 慧照 藤井 信悟 木全 徳本
藤井 信悟 柏原 祐義 竹中 慧照 木全 徳本	▼第三〇号 一九二六(大正一五)年六月一日	月 曆 惨劇に就きて会員諸姉に訴ふ 親の念力 主のさわり 師弟の道 物を尊めば私達の心も高められる 発願廻向について 宇右衛門ありのまゝの記 質疑応答	藤井 信悟 近藤 純悟 藤井 信悟 竹中 慧照 柏原 祐義 木全 徳本 都築 祐寛
報 告 道	▼第三一号 一九二六(大正一五)年七月一日	月 曆 勅命に順へ 結婚と仏教 夫婦の道 我心に物語る言葉 発願廻向について 宇右衛門ありのまゝの記	藤井 信悟 近藤 純悟 竹中 慧照 柏原 祐義 木全 徳本 都築 祐寛
報 告 道	▼第三二号 一九二六(大正一五)年八月一日	月 曆 自己を顧みよ 善導和讃法話 親屬、朋友の道 犯罪と宗教 宇右衛門ありのまゝの記	藤井 信悟 一乗院講師 竹中 慧照 木全 徳本 都築 祐寛
報 告 道	▼第三三号 一九二六(大正一五)年九月一日	月 曆 訓 示 自信と教人信 婦人の訓練 仏教と婦人 世尊と宗祖 眞宗教義と其宣伝	総裁大谷章子の方 稲葉 昌丸 藤岡 了淳 藤井 信悟 山邊 習学 近藤 純悟

婦人の団体と施設及天理教の現勢と教義

竹中 慧照

第一回幹部講習会彙報

報道

広告

▼第三四号 一九二六(大正一五)年一〇月一日

月 曆

仏教と婦人

金剛の信仰

世尊と宗祖

他人の思ひぶりを気に病む時

真宗教義と其宣伝

婦人団体の施設及び天理教の教義と現勢

報道

広告

藤井 信悟

吉谷 覺壽

山邊 習学

柏原 祐義

近藤 純悟

竹中 慧照

▼第三五号 一九二六(大正一五)年一月一日

月 曆

仏教と婦人

報恩講説教

疫病御文法話

主人と雇人

婦人団体の施設及び天理教の教義と現勢

報道

広告

藤井 信悟

吉谷 覺壽

木全 徳本

竹中 慧照

竹中 慧照

▼第三六号 一九二六(大正一五)年二月一日

月 曆

仏教と婦人

曇鸞大師和讃説教

真宗の教義と其宣伝

罪と救ひ

静寛院宮様を偲びて

あつめ草

報道

広告

藤井 信悟

吉谷 覺壽

近藤 純悟

木全 徳本

足利 達子

教 條

教條略解

新春の説教

新年から致したきこと

文明と宗教

月中の兎

報道

広告

一九二七(昭和二)年一月一日

藤井 信悟

吉谷 覺壽

竹中 慧照

木全 徳本

近藤 純悟

教 書

天恩宏大

御文説教

真宗教義と其宣伝

求道者の心得

念仏者は無碍の一道

大正天皇御中陰早くも終らせられんとす

報道

広告

一九二七(昭和二)年二月一日

藤井 信悟

吉谷 覺壽

近藤 純悟

竹中 慧照

木全 徳本

北川齋治郎

▼第三九号 一九二七(昭和二)年三月一日

真剣味

婦人処世の二大方途

嘆異鈔説教

真宗教義と其宣伝

伝道者の心得

白骨の御文法話

報道

広告

藤井 信悟

武内 了温

吉谷 覺壽

近藤 純悟

竹中 慧照

木全 徳本

▼第三〇号 一九二七(昭和二)年四月一日

月 曆

罹災の方々へ

嘆異鈔説教

真宗教義と其宣伝

火宅無常の世界

震災地慰問の概報と其一夜

北丹震災に慰問して

報道

北丹震災義捐金寄附氏名

広告

藤井 信悟

吉谷 覺壽

近藤 純悟

木全 徳本

松岡 貫之

河島 末菊

▼第三一号 一九二七(昭和二)年五月一日

月 曆

哉の宗教

歎異鈔説教

菩薩の行

真宗教義と其宣伝

家庭の円満は如何にして得べきか

北丹震災義捐金寄附氏名

藤井 信悟

吉谷 覺壽

竹中 慧照

近藤 純悟

木全 徳本

大谷派婦人法話会編『婦徳』 総目次

報道 告	一九二七(昭和二)年六月一日	藤井 信悟 南條 文雄 吉谷 覺壽 近藤 純悟 木全 徳本
報道 告	一九二七(昭和二)年七月一日	藤井 信悟 吉谷 覺壽 南條 文雄 竹中 慧照 木全 徳本
報道 告	一九二七(昭和二)年八月一日	藤井 信悟 吉谷 覺壽 南條 文雄 竹中 慧照 木全 徳本
報道 告	一九二七(昭和二)年九月一日	藤井 信悟 吉谷 覺壽 竹中 慧照 大溪 専 近藤 純悟 木全 徳本
報道 告	一九二七(昭和二)年十月一日	藤井 信悟 吉谷 覺壽 木全 徳本
報道 告	一九二七(昭和二)年十一月一日	藤井 信悟 吉谷 覺壽 木全 徳本
報道 告	一九二七(昭和二)年十二月一日	藤井 信悟 吉谷 覺壽 木全 徳本
報道 告	一九二八(昭和三)年一月一日	藤井 信悟 吉谷 覺壽 木全 徳本
報道 告	一九二八(昭和三)年二月一日	藤井 信悟 吉谷 覺壽 木全 徳本
報道 告	一九二八(昭和三)年三月一日	藤井 信悟 吉谷 覺壽 木全 徳本
報道 告	一九二八(昭和三)年四月一日	藤井 信悟 吉谷 覺壽 木全 徳本
報道 告	一九二八(昭和三)年五月一日	藤井 信悟 吉谷 覺壽 木全 徳本
報道 告	一九二八(昭和三)年六月一日	藤井 信悟 吉谷 覺壽 木全 徳本
報道 告	一九二八(昭和三)年七月一日	藤井 信悟 吉谷 覺壽 木全 徳本
報道 告	一九二八(昭和三)年八月一日	藤井 信悟 吉谷 覺壽 木全 徳本
報道 告	一九二八(昭和三)年九月一日	藤井 信悟 吉谷 覺壽 木全 徳本
報道 告	一九二八(昭和三)年十月一日	藤井 信悟 吉谷 覺壽 木全 徳本
報道 告	一九二八(昭和三)年十一月一日	藤井 信悟 吉谷 覺壽 木全 徳本
報道 告	一九二八(昭和三)年十二月一日	藤井 信悟 吉谷 覺壽 木全 徳本



月 暦  
求道心  
忘々に就て  
永久に輝く重宝  
釈尊の婦人教化  
難信の法と心得安の安心  
蓮月尼の救済事業  
報告  
藤井 信悟  
南條 文雄  
近藤 純悟  
竹中 慧照  
木全 徳本  
世捨 人

▼第二四一号 一九二八(昭和三)年三月一日  
月 暦  
六和敬  
信心獲得御文法話  
器量よりも  
極難信と心得安の安心  
報告  
藤井 信悟  
吉谷 覺壽  
竹中 慧照  
木全 徳本

▼第二四二号 一九二八(昭和三)年四月一日  
月 暦  
光明名号の因縁  
仏教婦人の活動  
玉耶の懺悔  
親鸞聖人の宗教生活  
護王神社の女神  
報告  
藤井 信悟  
近藤 純悟  
竹中 慧照  
木全 徳本  
大溪 専

▼第二四三号 一九二八(昭和三)年五月一日  
月 暦  
求道心  
忘々に就て  
永久に輝く重宝  
釈尊の婦人教化  
難信の法と心得安の安心  
蓮月尼の救済事業  
報告  
藤井 信悟  
南條 文雄  
近藤 純悟  
竹中 慧照  
木全 徳本  
世捨 人

幸福は内に求めよ  
末燈鈔法話  
婦人の十悪事  
仏教婦人の活動  
易行の大道  
報告  
藤井 信悟  
吉谷 覺壽  
竹中 慧照  
近藤 純悟  
木全 徳本

▼第二四四号 一九二八(昭和三)年六月一日  
月 暦  
仏教婦人の活動  
末燈鈔法話  
源信讀法話  
罪の価は死なり  
蓮如上人の恩徳を偲びて  
報告  
近藤 純悟  
吉谷 覺壽  
藤井 信悟  
木全 徳本  
松庵 生

妻を失ひし夫の懺悔をきゝて  
末燈鈔法話  
源信和尚の教化  
婦人の五善と三悪  
宗教はどうして成立つか  
報告  
近藤 純悟  
吉谷 覺壽  
藤井 信悟  
竹中 慧照  
木全 徳本

▼第二四五号 一九二八(昭和三)年七月一日  
月 暦  
宗風を發揮せよ  
親友  
有礙の世と無礙の道  
玉耶の懺悔  
如來の仰せだけで安心せよ  
報告  
藤井 信悟  
南條 文雄  
近藤 純悟  
竹中 慧照  
木全 徳本

▼第二四六号 一九二八(昭和三)年八月一日  
月 暦  
不思義を信ずべし  
報告  
藤井 信悟

女は果して弱きか  
七種の婦人  
金剛不壞の信  
婦女小話  
報告  
近藤 純悟  
竹中 慧照  
木全 徳本

▼第二四七号 一九二八(昭和三)年九月一日  
月 暦  
自己を顧みて  
人生小訓  
善き婦人、悪しき婦人  
信仰上の問題と其経路  
如來の仰せだけで安心せよ  
報告  
藤井 信悟  
河崎 顯了  
竹中 慧照  
近藤 純悟  
木全 徳本

宗風を發揮せよ  
親友  
有礙の世と無礙の道  
玉耶の懺悔  
如來の仰せだけで安心せよ  
報告  
藤井 信悟  
南條 文雄  
近藤 純悟  
竹中 慧照  
木全 徳本

▼第二四八号 一九二八(昭和三)年一〇月一日  
月 暦  
宗風を發揮せよ  
親友  
有礙の世と無礙の道  
玉耶の懺悔  
如來の仰せだけで安心せよ  
報告  
藤井 信悟  
南條 文雄  
近藤 純悟  
竹中 慧照  
木全 徳本

▼第二四九号 一九二八(昭和三)年十一月一日  
教書  
御大典と真宗婦人  
再び奉慶の根本精神に就て  
報告  
藤井 信悟  
近藤 純悟

大谷派婦人法話会編『婦徳』総目次

御大典を迎へまつりて 大乘の果益 婦女文庫 報道 会告 広告	竹中 慧照 藤井 信悟	▼第二五〇号 一九二八(昭和三)年二月一日 月 暦 与へられるままに 大経法話 送る心、迎ふ心 廻向の宗教 婦女文庫 報道 広告	藤井 信悟 南條 文雄 近藤 純悟 木全 徳本
▼第二五一号 一九二九(昭和四)年一月一日 法 語 仏道即人道 信心の徳 深められたる感謝 堅い信心 誠の力 正信偈法話 妙徳院殿御葬儀 報道 広告	藤井 信悟 南條 文雄 柏原 祐義 貝沼 勇見 木全 徳本 藤井 信悟	▼第二五三三号 一九二九(昭和四)年三月一日 月 暦 横川法話 仏心の顕現 正信偈法話 口稱念仏と一念帰命 婦人文庫 報道 広告	南條 文雄 近藤 純悟 藤井 信悟 竹中 慧照 木全 徳本
▼第二五五号 一九二九(昭和四)年五月一日 聖 訓 今日唯今の時 親 心 正信偈法話 感謝は極楽不平は地獄 口稱念仏と一念帰命 報道 広告	南條 文雄 近藤 純悟 藤井 信悟 竹中 慧照 木全 徳本	▼第二五四号 一九二九(昭和四)年四月一日 現如上人の御歌 現如上人の御略歴 横川法話 慚愧なき慚愧 正信偈法話 無蓋の大悲 口称念仏と一念帰命 報道 広告	南條 文雄 近藤 純悟 藤井 信悟 竹中 慧照 木全 徳本
▼第二五七号 一九二九(昭和四)年七月一日 聖 訓 無碍の一道 御文説教(四帖十通) 人生苦闘の婦人に 正信偈法話 絶対の慈悲 婦女文庫 報道 広告	藤井 信悟 吉谷 寛寿 近藤 純悟 藤井 信悟 竹中 慧照	▼第二五六号 一九二九(昭和四)年六月一日 聖 訓 世界第一の幸福者 善導和讃法話 光りは地上に 生活上の清涼池 光明界の人 報道	藤井 信悟 吉谷 寛寿 近藤 純悟 竹中 慧照 木全 徳本
▼第二五八号 一九二九(昭和四)年八月一日 聖 訓 説聴の重大事	藤井 信悟	横川法話 絶対他力の風光 正信偈法話 地上の世界と如来の大慈 先哲語録 あつめぐさ 報道	南條 文雄 竹中 慧照 藤井 信悟 木全 徳本

五帖目七通説教  
凡夫其儘の生活  
行の世界と信の世界  
先哲語録  
報 道  
吉谷 覚寿  
近藤 純悟  
竹中 慧照

▼第二五九号 一九二九(昭和四)年九月一日

聖 訓  
説聴の重大事  
高僧和賛法話  
連如上人の信仰と其生活  
一粒米一滴水  
北海道樺太随伴記  
報 道  
藤井 信悟  
吉谷 覚寿  
河崎 顕了  
竹中 慧照  
近藤 純悟

▼第二六〇号 一九二九(昭和四)年一〇月一日

日 聖 訓  
国難の根本的治療  
改邪鈔法話  
宗教の効果  
いちじくを眺めながら  
北海道樺太随伴記  
報 道  
藤井 信悟  
吉谷 覚寿  
館 登  
倉富 了矣  
近藤 純悟

▼第二六一号 一九二九(昭和四)年十一月一日

聖 訓  
御慶事を寿ぎまつりて

国難の根本的治療  
ものいはぬは恐し  
朝夕の仏前礼拝のすゝめ  
幸福は脚下に  
御遷宮式年に際し慶光院尼僧の芳蹟を懷ふ  
報 道  
藤井 信悟  
柏原 祐義  
竹中 慧照  
近藤 純悟  
大溪 專

▼第二六二号 一九二九(昭和四)年十二月一日

聖 訓  
大なる喜  
式文説教  
唯一人と唯念仏  
黒衣の聖者  
先哲語録  
報 道  
藤井 信悟  
吉谷 覚寿  
近藤 純悟  
竹中 慧照

▼第二六三号 一九三〇(昭和五)年一月一日

會長殿御歌  
新年を迎へて  
幸福への道  
和楽の新年  
馬三題  
報 道  
藤井 信悟  
近藤 純悟  
竹中 慧照  
幡谷 淳信

▼第二六四号 一九三〇(昭和五)年二月一日

聖 訓  
合掌の生活  
近藤 純悟

わがこと  
願行具足の御文  
両親の位牌を背負ひて拜謁  
はなしのくら  
病める妹に  
報 道  
藤井 信悟  
吉谷 覚寿  
竹中 慧照  
香山院龍温

▼第二六五号 一九三〇(昭和五)年三月一日

聖 訓  
信仰の偉力  
願行具足の御文(二)  
信心の智慧  
如実知見  
先哲語録  
お浄土へ旅だったお喜多さん  
報 道  
近藤 純悟  
吉谷 覚寿  
藤井 信悟  
柏原 祐義

▼第二六六号 一九三〇(昭和五)年四月一日

聖 訓  
争ひと仏教  
四月を迎へて  
稱名の鐘と紐屋のおちさん  
婦人の逸話  
先哲語録  
報 道  
近藤 純悟  
藤井 信悟  
竹中 慧照

▼第二六七号 一九三〇(昭和五)年五月一日

聖 訓

大谷派婦人法話会編『婦徳』総目次

信は道の本なり 讃阿弥陀和讃法話 蓮月尼のことども 動く心に動かぬ心 婦人の逸話 先哲語録 話のくら 報道 広告	藤井 信悟 吉谷 覚寿 竹中 慧照 金村 憲三	▼第二六八号 一九三〇(昭和五)年六月一日 聖訓 婦人に救はるる嬉しさ 浮ぶ宝 大経和讃法話 蓮月尼のことども 仏式結婚に就て 報道 広告	藤井 信悟 近藤 純悟 吉谷 覚寿 竹中 慧照	聖訓 信は義の本なり 鎖夏時感 化為清涼風 文類正信偈法話 女性と迷信 先哲語録 婦人文庫 報道 広告	近藤 純悟 阿辺 賢雄 吉谷 覚寿 竹中 慧照	▼第二七三号 一九三〇(昭和五)年十一月一日 聖訓 大慈悲の権化 信巻説教 大経五悪段(一悪の話) 掠奪者生活への反省 千代尼のことども 報道 広告	近藤 純悟 吉谷 覚寿 河崎 顕了 柏原 祐義 竹中 慧照	▼第二七四号 一九三〇(昭和五)年十二月一日 会長殿 御親示 生活上に於ける力の強弱 信せよ深く 大経五悪段(二) 寺族の亀鑑(清水すゑのさん) 本部だより 報道 広告	近藤 純悟 藤井 信悟 河崎 顕了 竹中 慧照	▼第二七五号 一九三一(昭和六)年一月一日 会長殿御歌(口絵) 婦人の四行と信仰 新年法話 尽せぬ宝 親鸞聖人と覚信坊 大経五要段 真実の幸福と家庭の和楽 豆相震災記 報道	近藤 純悟 吉谷 覚寿 藤井 信悟 柏原 祐義 河崎 顕了 竹中 慧照	▼第二六九号 一九三〇(昭和五)年七月一日 和歌 親心 女人往生 御文二帖第九通説教 蓮月尼のことども 京都地方聖蹟参拝のしほり 報道 広告	近藤 純悟 藤井 信悟 吉谷 覚寿 竹中 慧照	▼第二七〇号 一九三〇(昭和五)年八月一日 聖訓 時代と親鸞聖人 感恩小話 信の巻説教 千代尼のことども 先哲語録 婦人文庫 報道	近藤 純悟 藤井 信悟 吉谷 覚寿 竹中 慧照
--	----------------------------------	--	----------------------------------	--	----------------------------------	---	---	---	----------------------------------	--	--	---	----------------------------------	--	----------------------------------

広 告

▼第二七六号 一九三二(昭和六)年二月一日

聖 訓

念仏者と六度万行  
婦人の四行と信仰

藤井 信悟

大経五悪段

近藤 純悟

親鸞聖人と覚信坊  
貞信尼のこと々も

河崎 顕了  
柏原 祐義  
竹中 慧照

報 道  
広 告

▼第二七七号 一九三二(昭和六)年三月一日

聖 訓

婦人の四行と信仰  
安心謬正記

近藤 純悟

大経五悪段

圓乗院宣明講師

貞信尼のこと々も

河崎 顕了  
竹中 慧照

報 道  
広 告

◆第二七八号◆ 欠本

▼第二七九号 一九三二(昭和六)年五月一日

聖 訓

法話会選定唱歌  
待たる身の幸慶

近藤 純悟

大経五悪段

河崎 顕了

法 話  
信仰と道徳的懺悔  
婦人文庫

香 月 院  
柏原 祐義

報 道  
広 告

▼第二八〇号 一九三二(昭和六)年六月一日

聖 訓

同朋の歌  
暗夜の光明

近藤 純悟

大経五悪段  
生活そのまゝの宗教

河崎 顕了  
竹中 慧照

蛇と婦人と本願  
婦人文庫

本明 龍貫

報 道  
広 告

▼第二八一号 一九三二(昭和六)年七月一日

聖 訓

自力を捨てよ  
婦人法話

藤井 信悟

大経五悪段  
生活の批判と宗教

江村 秀山  
河崎 顕了  
竹中 慧照

報 道  
婦人文庫

報恩講の歌  
広 告

▼第二八二号 一九三二(昭和六)年八月一日

就任の辞  
女人救済の願

南 浄 智成

大経五悪段(講演)(元)

易行院法海師

光明の御縁(講話)  
不廻向の法(法話)

河崎 顕了師  
近藤 純悟師  
喜多山称善師

偶 感

——一蓮院師と貞信尼——

富島 祥子

新らしき女性

正親 貫之

——女子青年部の近況——  
本部報道 広告

▼第二八三号 一九三二(昭和六)年九月一日

聖 訓

慈光に酔ふもの

布教使 藤井 信悟師

不廻向の法  
慈門尼のこと々も

布教使 喜多山称善師

女の子の親として

前谷大教授 赤沼 智善師  
本山社会課長 竹中 慧照師

仏教の大慈主義 文学博士 高楠順次郎氏  
——読者の喜び——

洋裁教授 福泉テイチ  
本部だより

▼第二八四号 一九三二(昭和六)年一〇月一日

聞法の用心(聖訓)  
業は亡びず(講話)

擬講 安井 広度師

△信 華▽  
慈門尼のこと々も(其二)

前本山社会課長 竹中 慧照師

生活を意義あらしむる道

布教使 近藤 純悟師

(現代世相吟味)  
真の美人

富島 祥子

会長殿御巡化記

南 浮 主幹

会告 報道  
本部だより

▼第二八五号 一九三二(昭和六)年十一月一日

宗祖御詠歌

御婦洛後の聖人を偲びて  
前本山社会課長 竹中 慧照 (一)

稲田の聖人 谷大教授 柏原 祐義 (二)

現代と親鸞聖人 布教師 近藤 純悟 (一)

宗祖聖人を偲びまつりて 布教師 正親 貫之 (二)

子供の宗教心をどうして養ふべきか 蟬川 龍夫 (一)

女子青年部だより  
本部だより  
会告

▼第二八六号 一九三二(昭和六)年十二月一日

聖訓  
最高の生活 藤井 信悟

先哲語録  
家庭と真宗 近藤 純悟

親不知子不知の奮跡を訪ねて 本明 龍貫

子供の宗教心をどうして養ふべきか 蟬川 龍夫

挿話  
役員囑託  
地方だより  
本部だより

▼第二八七号 一九三二(昭和七)年一月一日

聖訓  
婦徳に就いて 廣陵 了賢 (一)

仏智の光暈(浄土和讃解説其一) 柏原 祐義 (二)

先哲語録  
聖徳太子の遠大の理想 藤井 信悟 (三)

白色白光 西谷 義遵氏 (四)

一、婦人の力 岡本かの子 (五)

二、誤解のふところ 多田 鼎氏 (六)

三、死者に対して 山邊 習学氏 (七)

四、大蛇になる話 竹中 慧照 (八)

食前の合掌 種村 義淵 (九)

子に惹かされて 質疑応答 生活上の感謝 柏原 祐義 (一〇)

負けたくない心 幡谷 淳信 (一一)

本会女学校教育の目的と施設  
役員囑託  
本部だより  
在満将士慰問金募集報告  
広告

▼第二八八号 一九三二(昭和七)年二月一日

聖訓  
家庭本位の宗教 稲葉 圓成 (一)

無量の光益(聖典講座其二) 柏原 祐義 (二)

隠れたる力 近藤 純悟 (三)

白色白光 一、偉大なる感化 水野 隆樹氏 (四)

▼第二八九号(覺信尼公記念法要 仏教婦人問題講演集) 一九三二(昭和七)年三月一日

三、愛と力 嘉悦 孝子 (一)

四、相互尊敬 加藤 咄堂氏 (二)

質疑応答 泉 道雄氏 (三)

宿善と聞法 柏原 祐義 (四)

過去を清算して将来へ 幡谷 淳信 (五)

眞の幸福 正親 貫之 (六)

役員囑託  
地方だより  
本部だより

婦人法話会専属布教師 近藤 純悟 (七)

大谷大学教授 阿部 現亮 (八)

大谷大学教授 柏原 祐義 (九)

家庭に於ける宗教的薫化 左藤 義詮 (一〇)

大谷女子専門学校主事 藤井 信悟 (一一)

真宗婦人の檜舞台 覺信尼公の御生活に就て 種村 義淵 (一二)

真宗婦人の典型 布教師 竹中 慧照 (一三)

女性美より精神美へ 帯広高等女学校校長 松山 亮 (一四)

▼第二九〇号 一九三二(昭和七)年四月一日  
共同の力と其根本 近藤 純悟 (一五)

人生と不借身命 本明 龍貫 (一六)

― 女性と迷信 ―

畢 竟 依(浄土和讃解脱三) 柏原 祐義 (三)  
仏教婦人

願西尼のことども

梅原 眞隆 (四)

信に生ける女性

竹中 慧照 (二六)

女青講座

縄 含 雄 (三)

質疑応答

千人 詰 柏原 祐義 (四)

愛の上に成せぬ結婚

幡谷 淳信 (二五)

役員囑託

凶作地義捐金報告

支部支場通信

本部だより

役員囑託

本部だより

本部だより

本部だより

▼第二九一号

一九三二(昭和七)年五月一日

聖訓

近藤 純悟 (一)

真実の慈悲

安慰の光明(浄土和讃解脱四)

臺所の仏様(一)

河崎 顯了 (二〇)

敵味方なき世界

竹中 慧照 (三)

願西尼のことども

梅原 眞隆 (二六)

質疑応答

光明を拜むとは

禍福を超えて生きる道

幡谷 淳信 (三)

会長殿御巡化記

上海派遣兵より

役員囑託

本部だより

本部だより

本部だより

本部だより

本部だより

本部だより

本部だより

本部だより

本部だより

本部だより

本部だより

本部だより

▼第二九二号

一九三二(昭和七)年六月一日

一七憲法之一章

廣陵 了賢 (三)

真宗と廻向(法話)

明るい心の源(浄土和讃開設五)

計ひを離れて

柏原 祐義 (七)

台所の仏様(その二)

近藤 純悟 (二〇)

運命より見たる女性(その一)

河崎 顯了 (三)

質疑応答―攻めず抱け

加藤 咄堂 (二六)

会長殿御巡化記

幡谷 淳信 (二六)

地方だより

正親 貫之 (二六)

女子青年部だより

役員囑託

本部だより

本部だより

本部だより

本部だより

本部だより

本部だより

本部だより

本部だより

本部だより

本部だより

本部だより

本部だより

本部だより

本部だより

本部だより

本部だより

本部だより

本部だより

本部だより

本部だより

本部だより

本部だより

本部だより

本部だより

本部だより

右か左か

婦人法話会申報

婦人法話会申報

婦人法話会申報

婦人法話会申報

婦人法話会申報

婦人法話会申報

婦人法話会申報

婦人法話会申報

婦人法話会申報

婦人法話会申報

婦人法話会申報

婦人法話会申報

婦人法話会申報

婦人法話会申報

婦人法話会申報

婦人法話会申報

婦人法話会申報

婦人法話会申報

婦人法話会申報

婦人法話会申報

婦人法話会申報

婦人法話会申報

婦人法話会申報

婦人法話会申報

婦人法話会申報

婦人法話会申報

婦人法話会申報

婦人法話会申報

婦人法話会申報

婦人法話会申報

婦人法話会申報

婦人法話会申報

婦人法話会申報

婦人法話会申報

▼第二九四号

一九三二(昭和七)年八月一日

信仰講話 光明の照護

近藤 純悟

信仰講話 行き詰り

藤井 信悟

座談会 『婦人と仏教』

座談会 闇に輝く光り

本山社会課長 高濱 哲雄

本山社会課長 高濱 哲雄

本山社会課長 高濱 哲雄

本山社会課長 高濱 哲雄

本山社会課長 高濱 哲雄

本山社会課長 高濱 哲雄

本山社会課長 高濱 哲雄

本山社会課長 高濱 哲雄

本山社会課長 高濱 哲雄

本山社会課長 高濱 哲雄

本山社会課長 高濱 哲雄

本山社会課長 高濱 哲雄

本山社会課長 高濱 哲雄

本山社会課長 高濱 哲雄

本山社会課長 高濱 哲雄

本山社会課長 高濱 哲雄

本山社会課長 高濱 哲雄

本山社会課長 高濱 哲雄

本山社会課長 高濱 哲雄

本山社会課長 高濱 哲雄

本山社会課長 高濱 哲雄

本山社会課長 高濱 哲雄

本山社会課長 高濱 哲雄

本山社会課長 高濱 哲雄

本山社会課長 高濱 哲雄

本山社会課長 高濱 哲雄

本山社会課長 高濱 哲雄

本山社会課長 高濱 哲雄

▼第二九五号

一九三二(昭和七)年九月一日

覚醒の急務

南浮 智城

忘機の一心

近藤 純悟

聖典講話 真実の世界の人々

柏原 祐義

凡夫の一生涯

藤井 信悟

通信欄

随員 生

北海道樺太巡回記

正親 貫之

巡回通信

地方通信

本部通信

本部通信

本部通信

本部通信

本部通信

本部通信

本部通信

本部通信

本部通信

本部通信

本部通信

本部通信

本部通信

本部通信

本部通信

本部通信

本部通信

本部通信

本部通信

本部通信

本部通信

本部通信

本部通信

本部通信

本部通信

本部通信

本部通信

本部通信

本部通信

本部通信

本部通信

本部通信

▼第二九七号 一九三二(昭和七)年一月一日

霊に刻まれたる宗祖の恩徳

近藤 純悟

親鸞聖人と更生

大須賀秀道

凡夫直入の真心

藤井 信悟

聖典講座

柏原 祐義

浄土聖衆の恩活動

柏原 祐義

質疑応答

柏原 祐義

救済意思の全表現

種村 義淵

旅から帰って

本明 龍貫

人間と猿の世界

読者 欄

読者 欄

▼第二九八号 一九三二(昭和七)年一月一日

平生の安心

近藤 純悟

自利々他の二徳

柏原 祐義

質疑応答

他力信仰と自力更生

稱名、己れの世界、駄言不用、一向妄念の凡夫、

高慢と卑下慢。

友をたづねて

正親 貫之

信仰の世界

読者通信

本部だより

▼第二九九号 一九三三(昭和八)年一月一日

個人愛より普汎愛へ

近藤 純悟

仏教の感化に依る女性の心

赤沼 智善

生活者

友をたづねて

▼第三〇〇号 一九三三(昭和八)年二月一日

他力信心と其徳益

近藤 純悟

閻魔の主

山邊 習学

往生人の身相

柏原 祐義

在家御内仏勤行並に御給仕式一般川島

眞量

信仰と我が心の変化―質疑応答―

道で聞いた話

記 者

▼第三〇一号 一九三三(昭和八)年三月一日

業報と救済

近藤 純悟

【聖典講座】信仰の幸福

河島 末菊

礼について

河島 眞隆

何処から来たのか何処へ行くのか

安井 廣度

饗 宴

左藤 義詮

救はれし者

大久保見道

本部通信

▼第三〇二号 一九三三(昭和八)年四月一日

協同一致の原動力

近藤 純悟

帰るべき家

近藤 純悟

禅の生活

後藤 瑞巖

礼について

河島 末菊

覺信尼公の御事績

岡崎 正謙

世間出世間録

種村 義淵

▼第三〇三号 一九三三(昭和八)年五月一日

不斷の用心

近藤 純悟

絶慮の真界(聖典講座)

柏原 祐義

地方通信

女性の特性を發揮せよ

礼について

本明 龍貫

会 報

河島 末菊

▼第三〇四号 一九三三(昭和八)年六月一日

仏教と女性

御裏方御講演

念仏の生活化

主幹 近藤 純悟

母のつとめ

本山監正課長 浅井 恵定

無上功德の本源(聖典講座)

柏原 祐義

在家御内仏勤行並に御給仕式一般

本山法務局

正しきものゝ見方

川島 眞量

地方通信

本部通信

▼第三〇五号 一九三三(昭和八)年七月一日

御教條講和特輯

教條を奉戴して

二、報謝の稱名怠りなく、常に恩師恩を

藤井 信悟

忽諸にすべからざること

本明 龍貫

三、子女の教養に心を用ひ、ねんごろに

種村 義淵

仏種を扶植をすべき事

勤儉家を治めまめやかに名所の務を

全うすべき事

柏原 祐義

五、温良貞淑よく女子の本分を守り社会

在家御内仏勤行並に御給仕式一般川島 眞量

地方通信

本部だより



平和の中心たるような心がくべき事  
礼について(その五)  
藤井 信悟  
河島 末菊

▼第三〇六号 一九三三(昭和八)年八月一日  
婦人の性情と中正の生活 主幹 近藤 純悟  
在家御内仏修行並に御給仕式一般(六)

母の声と子の声 本山法務局 川島 眞量  
孟蘭盆について 足利 浄圓

近藤 純悟、梅原 眞隆、  
浅井 恵定、太田 力、  
種村 義淵  
滅罪の念仏と感謝の念仏 柏原 祐義

▼第三〇七号 一九三三(昭和八)年九月一日  
未来の光明と現在安住 主幹 近藤 純悟  
無我の人蓮如上人 江部 鴨村  
礼について(その六) 河島 末菊  
生活の上に輝く恩寵 正親 貫之  
在家御内仏修行並に御給仕式一般(七)

本山法務局 川島 眞量

▼第三〇八号 一九三三(昭和八)年一〇月一日  
他の上に見る自相 主幹 近藤 純悟  
十方世界の往詣者 柏原 祐義  
特別執筆

聞き解けのない  
祖国をあとに 赤沼 智善  
父に会いたくば靖国神社へ参れ  
野口大尉・酒井少佐遺言

亡き人に尽す道 柏原 祐義  
在家御内仏修行並に御給仕式一般  
本山法務局堂衆 川島 眞量  
大無量寿経五悪段「第四悪」講話 河崎 顯了

▼第三〇九号(御正忌・祖師奉讃号)  
一九三三(昭和八)年十一月一日  
親鸞一人が為なりけり 主幹 近藤 純悟 (一四)

特別執筆  
聖人の御足跡 同朋舎主 足利 浄圓 (五八)  
祖聖礼賛 谷大教授 可西 大秀 (九一)

聖典講話 真実への轉向 谷大教授 柏原 祐義 (二四)  
在家御内仏修行並に御給仕式一般  
本山法務局堂衆 川島 眞量 (五二)  
特別講演  
現代社会の動向と婦人の使命  
本山教学課長 朝倉 慶友 (三三)

秋季大会全国死亡会員追弔会講演 藤 現護 (六四)

▼第三一〇号 一九三三(昭和八)年十二月一日  
生き甲斐のある生活 主幹 近藤 純悟  
箱根権現に詣で、親鸞聖人を偲ぶ 岩見 護

会長随伴記  
河北支部、金沢支部、石川第一支部、  
石川支部、栗津支部 主幹 近藤 純悟

聖典講座 真実の故郷  
念仏者は無碍の一道なり  
満州旅行記 柏原 祐義  
種村 義淵  
本明 龍貫

▼第三一一号 一九三四(昭和九)年一月一日  
会長殿御近影  
一、御影堂の御縁に立ち賜ふて  
二、御家庭における会長殿  
三、御接見  
四、御訓示を賜はる

会長殿御訓示  
五ヶ條の御教條 近藤 主幹 (二)  
御恩の履物(小話) 河崎 顯了 (七)  
大無量寿経五悪段講話 河崎 顯了 (八)  
正信偈の話 幡谷 淳信 (三)

本山南堂のお正月 河島 眞重 (一六)  
母なればこそ(川柳) 近藤 純悟 (四)  
生命の本源 武内 了温 (二六)  
母性愛と御慈悲眞身会長 本明 龍貫 (三三)  
満州旅行記 明 龍貫 (三三)

お正月心得草紙 明 龍貫 (三三)  
婦人の力で一村一墓基(通信) 明 龍貫 (三三)  
購読会員三百名を募りて(通信) 明 龍貫 (三三)

初めて仏教を聞く方へ 柏原 祐義 (三六)

▼第三一二号 一九三四(昭和九)年二月一日  
輝ける希望 阿部 現亮 (一)  
大無量寿経講和(五悪段第四悪) 河崎 顯了 (六)  
(実話)お賽銭に草履あげる 幡谷 淳信 (三三)  
正信の話 正信 (三三)

▼第三一三號

第三一三号 一九三四(昭和九)年三月一日

大無量寿經講和(五惡段第四惡)

實話濟南餘聞  
女人非器と女人成仏主幹  
湖州旅行記  
彼岸の庄屋(石山軍記)  
(実話)ひかり

OX・Y生 (一九)  
近藤 純悟 (二二)  
本明 龍貫 (二五)  
月本銀次郎 (二六)  
(三三)

長編  
血煙

彼の母と『堂様』	河崎 顯了 (二)
正信偈の話	近藤 純悟 (八)
『喻譬』行かうか戻らうか	幡谷 淳信 (二三)
問題の選定	柏原 祐義 (二〇)
生きた龍	喜多村 良 (二四)
満州旅行記	本明 龍貫 (二六)
長編 血煙天正殉教記(石山軍記)	
月本銀次郎	(三一)

▼第三一四号

第三一四号 一九三四(昭和九)年四月一日  
光養麿殿御近影、光養麿殿の御事 (一)  
火裡得清涼 赤沼 智善 (三)  
大無量寿経講和(五惡段第四惡)

長編  
血煙

御得度に就いて	近藤 純梧	(一六)
光養庵様の御得度式	河島 眞量	(一九)
正信偈の話	幡谷 淳信	(二三)
母性の力	種村 義淵	(二四)
初めての仏教を聞く方へ	柏原 祐義	(三三)
満州旅行記 (完)	本明 龍貫	(三六)
長編 血煙天正殉教記(石山軍記)		
月本銀次郎		(四〇)

▼第三一五号

光明の母	近藤 純悟	一九三四(昭和九年)五月一日
現代の母達(その一)	岩見 護	(五)
法水流遠し	本明 龍貴	(二二)
初めて仏教を聞く方へ	柏原 祐義	(二七)
正信偈の話	幡谷 淳信	(二〇)
長編 血煙天正殉教記(石山軍記)		

▼第三一六号

第三一六号 一九三四(昭和九)年六月一日

巻頭言 (一)

慚愧の生活 主幹 近藤 純悟 (二)

現代の母達へ(その二) 岩見 護 (五)

正信偈の話(第六回) 幡谷 淳信 (三三)

初めて仏教を聞く方へ(人生の実相)

▼第三一七号

廟行鎮の思出 本明 龍貫 (一九)  
 大法に生きた源三翁 正親 貫之 (二三)  
 石山軍記 血煙天正殉教記 月本銀次郎 (二五)  
 婦徳の耳 (二八)

▼第三一八号

人生と狼の磧 主幹 近藤 純梧 (二)  
 初めて仏教を聞く方へ 幡原 祐義 (七)  
 正信偈の話(第七回) 藤谷 淳信 (二〇)  
 恵信尼公最後の御消息 一海 (三七)  
 白道の邁進 石川 了整 (三七)  
 石山軍記 血煙天正殉教記 月本銀次郎 (四四)

第三一八号 一九三四(昭和九)年八月一日

卷頭言

孝道を行くもの	主幹	近藤	純悟	(二)
たしなみ		藤井	信悟	(五)
聖者のみあと		道端	良秀	(二)
正信偈の話(第八回)		幡谷	淳信	(一五)
聖寶の喜びへ		志貴	桂石	(三三)
加賀水害地慰問記		正親	貫之	(二九)
石山軍記	血煙	天正殉教記	月本銀次郎	(三三)

第三一九号

第三一九号 一九三四(昭和九)年九月一日  
卷頭言 (一)  
同信報国の御教書を拝して

婦人の鑑

主幹  
初めて仏教を聞く方へ  
正信偈の話(第九回)  
婦人の鑑  
痛ましき人々  
入竺僧法顯  
思ひにまかせて

近藤 純悟 (二)  
柏原 祐義 (三)  
幡公 淳信 (四)  
本明 龍貫 (五)  
高濱 哲雄 (七)  
道端 良秀 (三)  
二六

第三一〇号

子供の心にも 長野かほる (二六)  
石山軍記 血煙天正殉教記 月本銀次郎 (二六)  
婦徳の耳 (二六)

法悦の老嫗

廻向と報謝 主幹 近藤 純悟 三  
初めて仏教を聞く方へ 柏原 祐義 六  
正信偈の話(第一〇回) 幡谷 淳信 九  
法悦の老嫗 翠堂 生 三

婦人の鑑(二) 本明 龍貫 (四)  
 恵み豊かなり(一) 龜山 孝淳 (三)  
 法顯の偉業 道端 良秀 (四)  
 愛よ永遠に清く 志貴 桂石 (三)  
 婦徳の耳 (三)

▼第三二一号 一九三四(昭和九年)一月五日

巻頭言

知恩報徳 主幹 近藤 純悟 (三)  
 この師この弟子 安井 廣度 (六)  
 正信偈の話(第一回) 幡谷 淳信 (二)  
 大無量寿経講話(五悪段第五悪) (二)

偶感録 河崎 顯了 (七)  
 恵み豊かなり(二) 種村 義淵 (三)  
 恵みにまかせて 龜山 孝淳 (五)  
 母ごころ つねまる (三)

偶感 田舎子

石山軍記 これでも刑務所かしら 田中 專精 (三)  
 池の華燈 月本銀次郎 (三)  
 婦徳の耳 (三)

▼第三二三号 一九三四(昭和九年)二月五日

巻頭言

信第一 主幹 近藤 純悟 (二)  
 詭りを受けて 主幹 近藤 純悟 (三)  
 大無量寿経五悪段講話(第二回) (四)

思ひにまかせて 河崎 顯了 (六)  
 夢 つねまる (六)

人生の非常時 正親 貫之  
 どうすればうちの子供が「仏の子」となるか (二)  
 正信偈の話(第二回) 幡谷 淳信 (五)  
 男は女心のやさしさで征服される (一)  
 初めて仏教を聞く方へ 柏原 祐義 (一)  
 石山軍記 血煙天正殉教記 月本銀次郎 (三)  
 本部だより (六)

▼第三二三号 一九三五(昭和一〇年)一月五日

写真 会長殿の「同朋の歌」 御染筆

東北凶作慰問袋

巻頭言 意義ある生存 近藤 純悟 (二)  
 年頭の法悦 大須賀秀道 (六)  
 大無量寿経五悪段講話 河崎 顯了 (二)  
 初めて仏教を聞く方へ—無始無終の輪廻— (二)

聖典物語 心の柔和 柏原 祐義 (六)  
 思ひにまかせて 林 五邦 (三)  
 三つの愛 松見 圓了 (二)

人の形 さちと (二)  
 怒りと悲しみ 田舎子 (四)  
 外人かぶれ 憤慨生 (三)  
 親鸞聖人に親しむ生活 岡本かの子 (五)  
 宗教琵琶 肉弾三勇士 中川 海舟 (三)  
 殉教小説 法縁女人万華鏡(第一回) (三)

志貴 桂石 (五)  
 本部だより (四)  
 編輯室より (七)

▼第三二四号 一九三五(昭和一〇年)二月五日

巻頭言

真生命の躍動 近藤 純悟 (二)  
 太子奉讃 稻葉 圓成 (七)  
 太子と婦人 山本 正文 (三)  
 和国の教主聖徳皇 河崎 顯了 (七)

大無量寿経五悪段講話 初めて仏教を聞く方へ—みな自心から— 柏原 祐義 (五)  
 聖典物語 愛ゆゑの悩み 林 五邦 (二)  
 思ひにまかせて 大橋 武雄 (七)

華道の復興と女性 松見 圓了 (二)  
 三つの姿 岡本かの子 (四)  
 親鸞聖人に親しむ生活 志貴 桂石 (元)  
 殉教小説 法縁女人万華鏡(第二回) (四)

愛読者欄 本部だより (四)

▼第三二五号 一九三五(昭和一〇年)三月五日

巻頭言

自己の修養 近藤 純悟 (二)  
 一日の生活のスタートは礼拝から 幡谷 淳信 (六)

大無量寿経・五悪段・講話 河崎 顯了 (四)  
 浄土問答 初めて仏教を聞く方へ—浄土実在の問題— 柏原 祐義 (三)  
 浄土に就ての問答 道端 良秀 (三)

聖典物語 釈尊と娼婦菴婆波利 林 五邦 (三)



家庭欄  
女性の為めの仏教(五) 浅野 研眞 (二六)

世間雑話  
軽井沢心中 林 五邦 (三三)

聖典物語―教団の女人群像― 林 五邦 (三三)

小説 ―春秋鎌倉双紙― 志貴 桂石 (三六)

本部だより 志貴 桂石 (三六)

支部支場だより 志貴 桂石 (三六)

編輯室

▼第三四一号 一九三六(昭和一一)年七月五日

巻頭言  
家庭の苦悩より信仰へ 主幹 近藤 純悟 (二)

夕涼みの宮本武蔵 (詩) 葡萄 大須賀秀道 (八)

真宗講座―他力救済の宗教― 大須賀秀道 (八)

初めて仏教を聞く方へ―三光と三毒― 柏原 祐義 (四)

隨筆 見せる提燈 志貴 桂石 (三六)

韋提希夫人 正親 含英 (二六)

ひね胡瓜 河崎 顯了 (二六)

仏様を慕ふ気持 河崎 顯了 (二六)

業報論―業報と因果― 河崎 顯了 (二六)

夫の操縦 五邦 五邦 (三三)

聖典物語―蓮華比丘尼―林 五邦 (三三)

小説 ―春秋鎌倉双紙― 志貴 桂石 (三六)

夏の育児十訓 志貴 桂石 (三六)

本部だより 志貴 桂石 (三六)

編輯室

支場支場だより

編輯室

編輯室

支場支場だより

編輯室

身病、心の患ひ 主幹 近藤 純悟 (二)

夕立と仙崖和尚と隠居 主幹 近藤 純悟 (二)

真宗講座―平等救済の宗教― 大須賀秀道 (八)

韋提希夫人 正親 含英 (二六)

初めて仏教を聞く方へ―仏の救済― 柏原 祐義 (二六)

隨筆 心臓が強い 物いはぬ人 林 五邦 (三三)

夏休です、こんな御注意を 藤原 正圓 (二六)

聖典物語―月上女― 藤原 正圓 (二六)

隨筆 善知識さま 藤原 正圓 (二六)

愛慾を超えて 藤原 正圓 (二六)

夏の御婦人へ 志貴 桂石 (三六)

小説 ―春秋鎌倉双紙― 志貴 桂石 (三六)

しみぬめ汗よけ 志貴 桂石 (三六)

本部だより 志貴 桂石 (三六)

支部支場だより 志貴 桂石 (三六)

編輯室

編輯室

編輯室

編輯室

編輯室

編輯室

編輯室

編輯室

編輯室

編輯室

編輯室

編輯室

編輯室

編輯室

編輯室

編輯室

世間雑話  
韋提希夫人 正親 含英 (二四)

初めて仏教を聞く方へ―廻向の番号― 柏原 祐義 (二六)

隨筆 母をしたひて 林 五邦 (三三)

みどばた会議 林 五邦 (三三)

聖典物語―末利夫人― 松川 善澄 (二六)

忍終不悔の心 志貴 桂石 (三六)

小説 ―春秋鎌倉双紙― 志貴 桂石 (三六)

婦徳のお墓所 志貴 桂石 (三六)

本部だより 志貴 桂石 (三六)

支部支場だより 志貴 桂石 (三六)

編輯室

編輯室

編輯室

編輯室

編輯室

編輯室

編輯室

編輯室

編輯室

編輯室

編輯室

編輯室

編輯室

編輯室

編輯室

編輯室

編輯室

編輯室

編輯室

編輯室

編輯室

編輯室

編輯室

本部だより  
支部支場だより  
編輯室 (四七)

▼第三四五号 一九三六(昭和一一)年一月五日

巻頭言  
倫理と宗教に就いて

報恩講 文学博士 齋藤 唯信 (二)

真宗講座—平生業成の救ひ— 近藤 純悟 (三)

初めて仏教を聞く方へ—念仏に活きる— 大須賀秀道 (九)

随筆 帰るべき家 柏原 祐義 (一五)

煩悩と光明 聖典物語—教団の女人群像— 林 五邦 (一九)

随筆 朝鮮雜観 仏に捧ぐ 調 圓理 (二六)

生命の泉 奉 公 磯 含雄 (三四)

小説—春秋鎌倉双紙— 志貴 桂石 (三九)

本部だより 支部支場だより 編輯室 (四五)

▼第三四六号 一九三六(昭和一一)年一月五日

今日のつとめ 法主台下御親臨 近藤 純悟 (一)

真宗講座—称名は報恩の為である— 大須賀秀道 (六)

感 恩 藤井 信悟 (二)

世間雑話 罪の子も光に蘇へる 本明 龍貫 (四)

人生生活と信仰 除夜の鐘 初めて仏教を聞く方へ—信と安住— 柏原 祐義 (一八)

随筆 愚痴の私 金欲主義者 聖典物語—婦人の道— 林 五邦 (二三)

遺弟の念力 小説—春秋鎌倉双紙— 志貴 桂石 (三〇)

本部だより 編輯室 (四三)

▼第三四七号 一九三七(昭和一二)年一月五日

巻頭言 現在安住の根本 真宗講座—真俗二諦の救ひ— 近藤 純悟 (三)

初めて仏教を聞く方へ—安住の信と不安の信— 大須賀秀道 (九)

随筆 迎春雜感 ダンサーと公同組長 新春を迎へて 真宗遇ひ難し 新春にちなみて 舍利弗の場合 聖典物語—婦人の姿— 栗本 豊齊 (三九)

小説—神兵西征記— 本部だより 編輯室 (四四)

▼第三四八号 一九三七(昭和一二)年二月五日

巻頭言 御訓論 信の生活 お水取り行事の由来 真宗安心の道しるべ—「タノム」と云う意味— 子供は正直 仏事不可思議なり 随筆 母の如き妻 鏡 聖典物語—キサー喬曇弥の反省— 林 五邦 (二〇)

苦悩の古里 女人何の咎かある 大谷派内閣 小説—神兵西征記— 栗本 豊齊 (二六)

本部だより 支部支場便り 編輯室 (四六)

▼第三四九号 一九三七(昭和一二)年三月五日

巻頭言 仏教上に現はれたる婦人観 和国の教主 婦人と信仰 心の燈火 真宗安心の道しるべ—大慈悲の表現— 廣陵 了賢 (三)

近藤 純悟 (六)

信は莊嚴より  
柏原 祐義 (一四)

大聖釋尊—釋尊の生誕—  
聖典物語—婦人の姿—  
無倦の慈  
隨筆  
女房の悪いのは一生の不作  
泉 芳璟 (一八)  
林 五邦 (二三)  
西本 龍山 (二六)

近代女性と真宗  
小説—神兵西征記—  
本部たより  
支部支場便り  
編輯室  
泉 惠操 (三三)  
栗本 豊齊 (三五)  
(四三)  
(四六)

親の鑑  
今日一日の事  
廣陵 了賢 (二二)

▼第三五〇号 一九三七(昭和一二)年四月五日

卷頭言  
仏教上に現はれたる婦人觀

今日一日の事  
廣陵 了賢 (二二)

苦に生くる道  
近藤 純悟 (二七)

真宗安心の道しるべ—タノムといふ意—  
柏原 祐義 (二〇)

お念仏いたしませう  
大聖釋尊—釋尊の出家—  
泉 芳璟 (一四)

悉有仏性  
人間としての釋尊  
蘆谷 蘆村 (一八)

聖典物語—婦人の姿—  
隨筆  
林 五邦 (二〇)

享樂主義は通らぬ  
小説—神兵西征記—  
栗本 豊齊 (二六)

談話室  
本部たより  
(四七)  
(四八)

編輯室

▼第三五一号 一九三七(昭和一二)年五月五日

卷頭言

同朋箴規—真宗は何を教へるか—  
山邊 習學 (二)

婦道指針  
仏教上に現はれたる婦人觀  
廣陵 了賢 (三)

今日一日の鏡  
婦徳の耳  
近藤 純悟 (二五)

母性愛の諸相  
真宗安心の道しるべ—信意識の持続—  
柏原 祐義 (二〇)

大聖釋尊—成道まで—  
日本の神様は如何なるお方か  
泉 芳璟 (二四)

隨筆  
歪める母性愛  
竹中 慧照 (二六)

聞くといふこと  
小串 侍 (四二)

談話室  
本部たより  
(四三)  
(四七)

編輯室

▼第三五二号 一九三七(昭和一二)年六月五日

卷頭言

同朋箴規—己を捨てゝ無碍の大道に帰す—  
大須賀秀道 (三)

仏教上に現はれたる婦人觀  
廣陵 了賢 (三)

料理の栞  
真宗安心の道しるべ—信持統の實際—

大聖釋尊—釋尊の正覺—  
世の中のくひちがひ  
人間としての釋尊  
「心得違ひ」の「神信心」  
竹中 慧照 (二四)

婦徳の耳  
幸福はいづこに  
阿部 現亮 (四四)

隨筆  
孤 独  
母の愛  
阿部 現亮 (四四)

談話室  
本部たより  
(四六)  
(四七)

編輯室

▼第三五三号 一九三七(昭和一二)年七月五日

卷頭言

同朋箴規—人生を正しく見て禍福に  
惑はず—  
竹中 慧照 (三)

仏教上に現はれたる婦人觀  
廣陵 了賢 (二〇)

花嫁手帳  
彼が母の追憶  
近藤 純悟 (二四)

真宗安心の道しるべ—信の反省—  
柏原 祐義 (一八)

生きて居る喜び  
聖典物語—悲しみにも心動かさず—  
林 五邦 (三三)

幸福はいづこに  
隨筆  
阿部 現亮 (二六)

管見鏡 嘘  
近代女性と真宗  
海外移民地風景  
泉 惠操 (三三)

近藤 純悟 (二四)

家庭欄	栗本 豊齊	(四〇)
小説——神兵西征記——		(四一)
談話室		(四七)
本部だより		(四八)
編輯室		(四八)
▼第三五五号 一九三七(昭和一二)年八月五日		
巻頭言		
同朋箴規——報恩の至誠を以て国家に尽す	柏原 祐義	(二)
銚後の慰問		
仏教上に現はれたる婦人観	廣陵 了賢	(一〇)
婦徳の耳	近藤 純悟	(一四)
真実に触れた生活		
ほんとうの敬神とはどんなことか	竹中 慧照	(二〇)
尊徳訓		
談話室	林 五邦	(二七)
聖典物語——勝鬘夫人		(二八)
隨筆 たしなみ		
管見鏡 疑	小原 末保	(二四)
み法聞き難し	栗本 豊齊	(三九)
小説——神兵西征記——		(四〇)
家庭欄		(四四)
本部支部支場だより		(四八)
編輯室		(四八)
▼第三五五号 一九三七(昭和一二)年九月五日		
巻頭言		
救はるゝ世界	近藤 純悟	(二)
『暦』に禁じられた『不稽』の神	竹中 慧照	(一)
人間としての釋尊	蘆谷 蘆村	(四)
銚後の務め		(一九)
聖典物語——勝鬘夫人の獅子吼	林 五邦	(二〇)
隨筆 女性の見た女性の欠陥		
管見鏡 腹		
家庭欄		
報酬を要求する妻	清田 元章	(二六)
祖母の有難さ	志貴 桂石	(三三)
燈指の出家縁起		(三九)
談話室		(四一)
小説——神兵西征記——	栗本 豊齊	(四七)
銚後の各支部支場		
編輯室		(四七)
▼第三五六号 一九三七(昭和一二)年一〇月五日		
巻頭言		
會長殿御訓示		
非常時下における婦人に望む	清水 俊栄	(二)
親の手鏡		(四)
出動將兵諸君の御家族の方々に贈る辞	暁鳥 敏	(一〇)
非常時局と婦人の覚悟	近藤 純悟	(二三)
一日のつとめ		
先づ自らかへりみよ	武内 了温	(二六)
戦争と真宗婦人の覚悟	竹中 慧照	(二〇)
管見鏡		
時局下の婦人に望む	林 五邦	(二四)
隨筆 中華民國の皆様に捧ぐ		
談話室	柏原 祐義	(二九)
非常時意識と実行		(三〇)
家庭欄		(三三)
上海の戦地慰問より帰朝して		
非常に光る大和撫子	深奥九十九	(二四)
銚後の各支部支場	蘆谷 蘆村	(二四)
本部だより		(二五)
編輯室		(二六)
▼第三五七号 一九三七(昭和一二)年一一月五日		
巻頭言		
非常時と銚後の覚悟	藤井 信悟	(二)
奥村五百子刀自を偲ぶ		
銚後の人々へ	可西 大秀	(八)
非常に於ける婦人の責務	正親 貫之	(一四)
時局と真宗教義	禿 諦住	(二〇)
眞の孝行		
銚後の婦人に望む	志貴 桂石	(二四)
銚後夫人の実鑑		
管見鏡		
戦時体制と女性	木全 徳本	(二八)
しもやけにかゝつたら		
時局に対する真宗婦人の覚悟	石崎 達三	(三三)
支那事変と婦人の覚悟	福原 益子	(三八)
小説 神兵西征記	栗本 豊齊	(四四)
銚後の小惑		
慰問袋寄贈者芳名		(五二)
本部だより		(五三)



支部支場だより  
編輯室 (五)

▼第三五八号 一九三七(昭和一二)年一二月五日

巻頭言

超非常時と報恩講 近藤 純悟 (三)

真宗安心の道しるべーこのまゝの救ひといふ事ー 柏原 祐義 (六)

北支戦線を征く 本明 龍貫 (一〇)

軍用患者自動車献納運動 左藤 義詮 (一六)

銃後の合掌 五邦 (一八)

聖典物語ー王舎城の悲劇ー林 大西 憲明 (一九)

誌上育児相談 貝沼 勇見 (二四)

非常時局下の真宗信徒婦人に望む 人間としての釋尊 蘆谷 蘆村 (三三)

小説 神兵西征記 栗本 豊齊 (三六)

軍用患者自動車献納資金芳名 慰問袋資金決算報告 (四四)

本部だより (四七)

支部支場だより (四八)

編輯室 (四九)

▼第三五九号 一九三八(昭和一二)年一月五日

巻頭言

同朋箴規と其の使命 河崎 顯了 (三)

北支戦線を征く 本明 龍貫 (八)

失礼、失礼、失礼集 五邦 (一四)

聖典物語ー王舎城の悲劇ー林 大西 憲明 (一四)

誌上育児相談

管見鏡  
事変下の新年を迎えて 竹中 慧照 (三)

間道をさ迷ふな 清田 元章 (六)

お正月手帳 蘆谷 蘆村 (三)

御国のありがたさ 栗本 豊齊 (三)

家庭欄 福原 淳子 (四)

筑紫の旅から 種村 義淵 (四)

軍用患者自動車献納資金芳名 種村 義淵 (四七)

銃後の各支部支場 本部だより (五)

本部だより (五)

編輯室 (五)

▼第三六〇号 一九三八(昭和一二)年二月五日

総裁殿御親示

同朋箴規と其の使命 河崎 顯了 (三)

「針供養」と仏教信念 竹中 慧照 (八)

料理の栞 福原 淳子 (三)

真宗安心の道しるべー御恩に育てられてー 柏原 祐義 (四)

銃後の持久力と信念 正親 貫之 (九)

聖戦と仏道 木全 徳本 (六)

夫婦歌喧嘩 聖典物語ー王舎城の悲劇ー林 五邦 (三)

誌上育児相談 大西 憲明 (三)

管見鏡 本明 龍貫 (三)

北支戦線を征く 栗本 豊齊 (四)

神兵西征記前編完了に際して 軍用患者自動車献納資金寄附者芳名 (四)

献納軍用患者自動車資金終始報告書 (四)

本部だより  
支部支場だより  
編輯室 (四)

▼第三六一号 一九三八(昭和一二)年三月五日

巻頭言

同朋箴規と其の使命 河崎 顯了 (三)

聖典物語ー王舎城の悲劇ー林 五邦 (八)

誌上育児相談 大西 憲明 (八)

畢竟依に帰せよ 竹中 慧照 (三)

寛正秘聞 湖盜船夜話 山中 文雄 (三)

真宗安心の道しるべー無碍となる信念ー 柏原 祐義 (六)

管見鏡

北支戦線を征く 本明 龍貫 (三)

指臺の最期 志貴 桂石 (三)

料理の栞 福原 淳子 (四)

役員囑託 忘れた草 福原 淳子 (四)

銃後の各支部支場 編輯室 (四)

▼第三六二号 一九三八(昭和一二)年四月五日

巻頭言

同朋箴規と其の使命 河崎 顯了 (三)

真宗安心の道しるべー願生のこころー 柏原 祐義 (八)

大聖釈尊ー仏誕のこころを思うふー 蘆谷 蘆村 (三)

寛正秘聞 湖盜船夜話 山中 文雄 (六)

今月の料理 福原 淳子 (三)

## 大谷派婦人法話会編『婦徳』総目次

女性心理と宗教 前線の勇士より 管見鏡	西本 龍山 大西 恵明	（四） （三）	卷頭言 同朋箴規と其の使命 油断なき根底 みなし児に贈る 東海の布教戦線にて 女性心理と宗教 眞宗安心の道しるべー安心という言葉葉ー	河崎 顯了 近藤 純悟 石崎 達二 正親 貫之 大西 恵明	（三） （三） （二） （二） （一）
恵信尼を偲び参らせて 談話室 忘れな草 役員嘱託 編輯室	釜田 弘文 （四） （元） （四）		寛正秘聞 湖盜船夜話 恵信尼公を偲び参らせて 軍事郵便の差出し方 初夏の料理 小説 密訴五十三次 忘れな草 支部支場だより 編輯室	柏原 祐義 山中 文雄 釜田 弘文 福原 淳子 志貴 桂石	（三） （元） （三） （三） （三） （四） （四）
眞宗安心の道しるべー戦士せる勇士 に合掌してー 家庭読本 女性心理と宗教 恵信尼を偲び参らせて 五月の料理 談話室 小説 密訴五十三次 管見鏡 忘れな草 役員嘱託 編輯室	柏原 祐義 大西 恵明 釜田 弘文 福原 淳子 志貴 桂石	（三） （三） （三） （三） （元） （四） （四）	▼第三六五号 一九三八（昭和一三）年七月五日 卷頭言 誠ひとつ 人間の弱さに就いて 戦線佳話 隠れたる婦人の力 寛正秘聞 湖盜船夜話 七月の料理 生と死を貫くもの 名刺美談 小説 密訴五十三次 忘れな草 役員嘱託 編輯室	石崎 達二 近藤 純悟 種村 義淵 山中 文雄 福原 淳子 自見 直 志貴 桂石	（三） （一） （三） （二） （四） （二） （三） （元）
▼第三六六号 一九三八（昭和一三）年八月五日 卷頭言 国史にかぶやく女性 『眞宗』有安心の道しるべー他力の 安心と死の恐怖ー 眞宗女性読本 中華漫談 女性心理と宗教 管見鏡 寛正秘聞 湖盜船夜話 恵信尼公を偲び参らせて 支部便り 小説 密訴五十三次 阪神沿線水害見舞訪問記 忘れな草 編輯室	石崎 達二 柏原 祐義 禰住 禪智 春日 禮智 大西 恵明 山中 文雄 釜田 弘文 志貴 桂石	（三） （三） （二） （二） （二） （四） （三） （三） （五）	▼第三六七号 一九三八（昭和一三）年九月五日 卷頭言 大無量寿経の理想国家の建設 婦徳の道場 女性心理と宗教 眞宗女性読本 寛正秘聞 湖盜船夜話 支那の仏教 戦線挿話 小説 密訴五十三次 御案内 忘れな草 編輯室	木全 徳本 石崎 達二 大西 恵明 禰住 禪智 山中 文雄 春日 禮智 志貴 桂石	（三） （一） （三） （四） （三） （二） （四） （四） （四）
▼第三六三号 一九三八（昭和一三）年五月五日 卷頭言 皇軍を犒ひ給ふ昭憲皇太后の御歌 同朋箴規と其の使命 寛正秘聞 湖盜船夜話 戦線ニュース 眞宗安心の道しるべー戦士せる勇士 に合掌してー 家庭読本 女性心理と宗教 恵信尼を偲び参らせて 五月の料理 談話室 小説 密訴五十三次 管見鏡 忘れな草 役員嘱託 編輯室	石崎 達二 河崎 顯了 山中 文雄 （三） （一） （三） （四） （三） （四）		▼第三六四号 一九三八（昭和一三）年六月五日 卷頭言 同朋箴規と其の使命 油断なき根底 みなし児に贈る 東海の布教戦線にて 女性心理と宗教 眞宗安心の道しるべー安心という言葉葉ー	河崎 顯了 近藤 純悟 石崎 達二 正親 貫之 大西 恵明	（三） （三） （二） （二） （一）

▼第三六八号 一九三八(昭和一三)年一〇月五日  
巻頭言

「すみません」と「ありがたう」

竹中 慧照 (一〇)

戦争に役立つ動物

大無量寿経の理想国家の建設

木全 徳本 (一〇)

貯金種々相

真宗安心の道しるべ—安心と現実生活—

柏原 祐義 (一四)

排日支那と親日支那

春日 禮智 (一八)

女性心理と宗教

大西 憲明 (一八)

儉約川柳

山中 文雄 (二六)

寛正秘聞 湖盜船夜話

禿 諦住 (二六)

真宗女性読本

志貴 桂石 (四七)

小説 密訴五十三次

忘れた草 (四七)

支部支場便り

編輯余録 (四八)

編輯余録

石崎 達二 (二〇)

苦難を越ゆる力

近藤 純悟 (二〇)

「世の中」十歌撰

大西 憲明 (二七)

女性心理と宗教

真宗安心の道しるべ—現実生活の将

柏原 祐義 (二八)

軍事郵便

大無量寿経の理想国家の建設

木全 徳本 (二四)

真宗女性読本  
寛正秘聞 湖盜船夜話  
小説 密訴五十三次  
忘れた草  
役員囑託  
編輯余録

禿 諦住 (三〇)

山中 文雄 (三六)

志貴 桂石 (四四)

忘れた草 (五五)

役員囑託 (五五)

編輯余録 (五五)

▼第三七〇号 一九三八(昭和一三)年一二月五日  
巻頭言

歳末に於ける真宗婦人の覚悟

近藤 純悟 (二〇)

国史にかゞやく女性

石崎 達二 (二六)

女性心理と宗教

大西 憲明 (二六)

真宗女性読本

禿 諦住 (二六)

寛正秘聞 湖盜船夜話

山中 文雄 (二六)

妄念は起れど

志貴 桂石 (二六)

小説 密訴五十三次

忘れた草 (二六)

役員囑託

編輯余録 (二六)

編輯余録

敬神と念仏

加藤 智學 (二〇)

皇法と仏法

柏原 祐義 (九)

初日影(昭憲皇太后新年の御歌謹解)

石崎 達二 (二四)

事変下に第二の新年を迎へて

正親 貫之 (三三)

伝道者蓮如上人

旭野 正信 (二六)

小説 密訴五十三次

志貴 桂石 (三〇)

本部雑記

◆第三七二号—三八〇号◆ 欠本

▼第三八一号 一九三九(昭和一四)年一二月五日  
時局と婦人  
御教示

安田 力 (二〇)

御教示を拝誦して

河崎 顯了 (二〇)

わが親鸞聖人

大須賀秀道 (二〇)

本部通信

地方通信

▼第三八二号 一九三九(昭和一四)年一二月五日  
寂

子に煩らふ

名畑 應順 (二〇)

ネクタイは鼻緒になります

藤澤駒次郎 (二〇)

本部通信

地方通信

▼第三八三号 一九四〇(昭和一五)年一二月五日  
在家為本の宗旨

稲葉 圓成 (二〇)

龍の話

富長 覺夢 (二〇)

女性愛

山邊 習学 (二〇)

善鸞大徳と如信上人

安井 廣度 (二〇)

生け花講座

牧野 晴風 (二〇)

本部通信

地方通信

附録 会長殿の御歌、外

▼第三八四号 一九四〇(昭和一五)年二二月五日  
関東と親鸞聖人

寺西 惠然 (二〇)

## 大谷派婦人法話会編『婦徳』総目次

<p>▼<b>第三八七号</b> 一九四〇(昭和一五)年五月五日</p> <p>肇国の精神 「せり」と「なり」 生花講座 本部通信</p> <p>深奥九十九 繼 含雄 牧野 晴風</p> <p>(一) (三) (四) (六)</p>	<p>▼<b>第三八八号</b> 一九四〇(昭和一五)年六月五日</p> <p>和衷戮力 和のころ 衣服再生講座</p> <p>沼波 政憲 柏原 祐義 藤澤駒次郎</p> <p>(一) (三) (五)</p>	<p>▼<b>第三八九号</b> 一九四〇(昭和一五)年七月五日</p> <p>支那の旅 端正といふこと 生け花講座 本部通信</p> <p>松本 興仁 福島 昭信 牧野 晴風</p> <p>(一) (四) (六)</p>	<p>▼<b>第三九〇号</b> 一九四〇(昭和一五)年八月五日</p> <p>心を空くして仏の御名を聞く 念仏者慧遠 香 妃 本部通信</p> <p>寺西 惠然 春日 禮智 富長 覺夢</p> <p>(一) (三) (四) (五)</p>	<p>▼<b>第三九一号</b> 一九四〇(昭和一五)年九月五日</p> <p>外米問答 淡窓の人生観 六祖の正風 本部通信</p> <p>河崎 顯了 安藤 州一 春日 禮智</p> <p>(一) (三) (五) (七)</p>	<p>▼<b>第三九二号</b> 一九四〇(昭和一五)年十一月五日</p> <p>隠れたる力 偉なる哉女性 生け花講座(五)</p> <p>近藤 純悟 小山乙若丸 牧野 晴風</p> <p>(一) (四) (六)</p>	<p>▼<b>第三九三号</b> 一九四〇(昭和一五)年十二月五日</p> <p>婦人法話会の特殊使命 河崎 顯了</p> <p>(一)</p>	<p>▼<b>第三九四号</b> 一九四一(昭和一六)年一月五日</p> <p>一度は眼ざめよ 親鸞聖人の面影 真宗念仏の日本人的生活 生け花講座 役員任命 編輯後記</p> <p>磯 含雄 岩見 護 戸松憲千代 牧野 晴風</p> <p>(一) (三) (五) (七) (九)</p>	<p>▼<b>第三九五号</b> 一九四一(昭和一六)年二月五日</p> <p>人生長深の念願 思ひ出のまゝに 随 想 本部通信</p> <p>津田 賢 堀江 義夫 内田 神英</p> <p>(一) (四) (六) (七)</p>	<p>▼<b>第三九六号</b> 一九四一(昭和一六)年三月五日</p> <p>聖徳太子を動請しまつる 正見涅槃の道 全会員諸姉に告ぐ 本部通信 編輯後記</p> <p>竹中 慧照 井上 瑞縁</p> <p>(一) (四) (七) (八)</p>	<p>▼<b>第三九七号</b> 一九四一(昭和一六)年四月五日</p> <p>時局に対処して 断 想 役員任命</p> <p>松本 興仁 岩見 護 松原 慎吾</p> <p>(一) (四) (六) (七)</p>	<p>▼<b>第三九八号</b> 一九四一(昭和一六)年五月五日</p> <p>時局に対処して 断 想 役員任命</p> <p>松本 興仁 岩見 護 松原 慎吾</p> <p>(一) (四) (六) (七)</p>	<p>▼<b>第三九九号</b> 一九四一(昭和一六)年六月五日</p> <p>時局に対処して 断 想 役員任命</p> <p>松本 興仁 岩見 護 松原 慎吾</p> <p>(一) (四) (六) (七)</p>	<p>▼<b>第四〇〇号</b> 一九四一(昭和一六)年七月五日</p> <p>時局に対処して 断 想 役員任命</p> <p>松本 興仁 岩見 護 松原 慎吾</p> <p>(一) (四) (六) (七)</p>	<p>▼<b>第四〇一号</b> 一九四一(昭和一六)年八月五日</p> <p>時局に対処して 断 想 役員任命</p> <p>松本 興仁 岩見 護 松原 慎吾</p> <p>(一) (四) (六) (七)</p>	<p>▼<b>第四〇二号</b> 一九四一(昭和一六)年九月五日</p> <p>時局に対処して 断 想 役員任命</p> <p>松本 興仁 岩見 護 松原 慎吾</p> <p>(一) (四) (六) (七)</p>	<p>▼<b>第四〇三号</b> 一九四一(昭和一六)年十月五日</p> <p>時局に対処して 断 想 役員任命</p> <p>松本 興仁 岩見 護 松原 慎吾</p> <p>(一) (四) (六) (七)</p>	<p>▼<b>第四〇四号</b> 一九四一(昭和一六)年十一月五日</p> <p>時局に対処して 断 想 役員任命</p> <p>松本 興仁 岩見 護 松原 慎吾</p> <p>(一) (四) (六) (七)</p>	<p>▼<b>第四〇五号</b> 一九四一(昭和一六)年十二月五日</p> <p>時局に対処して 断 想 役員任命</p> <p>松本 興仁 岩見 護 松原 慎吾</p> <p>(一) (四) (六) (七)</p>	<p>▼<b>第四〇六号</b> 一九四二(昭和一七)年一月五日</p> <p>時局に対処して 断 想 役員任命</p> <p>松本 興仁 岩見 護 松原 慎吾</p> <p>(一) (四) (六) (七)</p>	<p>▼<b>第四〇七号</b> 一九四二(昭和一七)年二月五日</p> <p>時局に対処して 断 想 役員任命</p> <p>松本 興仁 岩見 護 松原 慎吾</p> <p>(一) (四) (六) (七)</p>	<p>▼<b>第四〇八号</b> 一九四二(昭和一七)年三月五日</p> <p>時局に対処して 断 想 役員任命</p> <p>松本 興仁 岩見 護 松原 慎吾</p> <p>(一) (四) (六) (七)</p>	<p>▼<b>第四〇九号</b> 一九四二(昭和一七)年四月五日</p> <p>時局に対処して 断 想 役員任命</p> <p>松本 興仁 岩見 護 松原 慎吾</p> <p>(一) (四) (六) (七)</p>	<p>▼<b>第四一〇号</b> 一九四二(昭和一七)年五月五日</p> <p>時局に対処して 断 想 役員任命</p> <p>松本 興仁 岩見 護 松原 慎吾</p> <p>(一) (四) (六) (七)</p>	<p>▼<b>第四一一号</b> 一九四二(昭和一七)年六月五日</p> <p>時局に対処して 断 想 役員任命</p> <p>松本 興仁 岩見 護 松原 慎吾</p> <p>(一) (四) (六) (七)</p>	<p>▼<b>第四一二号</b> 一九四二(昭和一七)年七月五日</p> <p>時局に対処して 断 想 役員任命</p> <p>松本 興仁 岩見 護 松原 慎吾</p> <p>(一) (四) (六) (七)</p>	<p>▼<b>第四一三号</b> 一九四二(昭和一七)年八月五日</p> <p>時局に対処して 断 想 役員任命</p> <p>松本 興仁 岩見 護 松原 慎吾</p> <p>(一) (四) (六) (七)</p>	<p>▼<b>第四一四号</b> 一九四二(昭和一七)年九月五日</p> <p>時局に対処して 断 想 役員任命</p> <p>松本 興仁 岩見 護 松原 慎吾</p> <p>(一) (四) (六) (七)</p>	<p>▼<b>第四一五号</b> 一九四二(昭和一七)年十月五日</p> <p>時局に対処して 断 想 役員任命</p> <p>松本 興仁 岩見 護 松原 慎吾</p> <p>(一) (四) (六) (七)</p>	<p>▼<b>第四一六号</b> 一九四二(昭和一七)年十一月五日</p> <p>時局に対処して 断 想 役員任命</p> <p>松本 興仁 岩見 護 松原 慎吾</p> <p>(一) (四) (六) (七)</p>	<p>▼<b>第四一七号</b> 一九四二(昭和一七)年十二月五日</p> <p>時局に対処して 断 想 役員任命</p> <p>松本 興仁 岩見 護 松原 慎吾</p> <p>(一) (四) (六) (七)</p>	<p>▼<b>第四一八号</b> 一九四三(昭和一八)年一月五日</p> <p>時局に対処して 断 想 役員任命</p> <p>松本 興仁 岩見 護 松原 慎吾</p> <p>(一) (四) (六) (七)</p>	<p>▼<b>第四一九号</b> 一九四三(昭和一八)年二月五日</p> <p>時局に対処して 断 想 役員任命</p> <p>松本 興仁 岩見 護 松原 慎吾</p> <p>(一) (四) (六) (七)</p>	<p>▼<b>第四二〇号</b> 一九四三(昭和一八)年三月五日</p> <p>時局に対処して 断 想 役員任命</p> <p>松本 興仁 岩見 護 松原 慎吾</p> <p>(一) (四) (六) (七)</p>	<p>▼<b>第四二一号</b> 一九四三(昭和一八)年四月五日</p> <p>時局に対処して 断 想 役員任命</p> <p>松本 興仁 岩見 護 松原 慎吾</p> <p>(一) (四) (六) (七)</p>	<p>▼<b>第四二二号</b> 一九四三(昭和一八)年五月五日</p> <p>時局に対処して 断 想 役員任命</p> <p>松本 興仁 岩見 護 松原 慎吾</p> <p>(一) (四) (六) (七)</p>	<p>▼<b>第四二三号</b> 一九四三(昭和一八)年六月五日</p> <p>時局に対処して 断 想 役員任命</p> <p>松本 興仁 岩見 護 松原 慎吾</p> <p>(一) (四) (六) (七)</p>	<p>▼<b>第四二四号</b> 一九四三(昭和一八)年七月五日</p> <p>時局に対処して 断 想 役員任命</p> <p>松本 興仁 岩見 護 松原 慎吾</p> <p>(一) (四) (六) (七)</p>	<p>▼<b>第四二五号</b> 一九四三(昭和一八)年八月五日</p> <p>時局に対処して 断 想 役員任命</p> <p>松本 興仁 岩見 護 松原 慎吾</p> <p>(一) (四) (六) (七)</p>	<p>▼<b>第四二六号</b> 一九四三(昭和一八)年九月五日</p> <p>時局に対処して 断 想 役員任命</p>
--	--	---	--	--	--	--	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	--	--	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	--	--	---	---	---	---	---	---	---	---	--

編輯後記 (一)

▼第三九八号 一九四一(昭和一六)年五月五日

大地の如く 磯 含雄 (一)

やむ事なき業の流れ 寺西 惠然 (二)

本部通信 (三)

役員任命 (四)

編輯後記 (五)

◆第三九九号◆ 欠本

▼第四〇〇号 一九四一(昭和一六)年七月五日

人生の難事 安藤 州一 (一)

智 眼 藤原 正圓 (二)

有功章に就て (三)

▼第四〇一号 一九四一(昭和一六)年八月五日

神さまと仏様 香春 建一 (一)

易行院の手紙 富長 覺夢 (二)

蓮月尼 千葉喜佐久 (三)

役員任命 (四)

編輯後記 (五)

▼第四〇二号 一九四一(昭和一六)年九月五日

大和の心 主幹 栗田 惠成 (一)

私を背く 大谷大学教授 大友 芳雄 (二)

女子青年運動に就て 清水 洪 (三)

本部通信 (四)

編輯後記 (五)

▼第四〇三号 一九四一(昭和一六)年一〇月五日

母を憶ふ 大谷大学教授 名畑 應順 (一)

時局に処する日本婦人 阿 光子 (二)

女子青年部開設に就て 清水 洪 (三)

編輯後記 (四)

▼第四〇四号 一九四一(昭和一六)年十一月五日

法主臺下放送講話 (一)

物と心 (二)

大地に聴く 岩見 護 (三)

掌をみる 香春 建一 (四)

總裁殿御訓示 (五)

本部通信 (六)

役員任命 (七)

編輯後記 (八)

▼第四〇五号 一九四一(昭和一六)年十二月五日

我れを生かす 柏原 祐義 (一)

殉国の血と殉教の血 竹中 慧照 (二)

編輯後記 (三)

▼第四〇六号 一九四二(昭和一七)年一月五日

大東亜戦争に直面して 松本 興仁 (一)

日本の心 内田 賢雄 (二)

二つの願ひ 香春 建一 (三)

編輯後記 (四)

▼第四〇七号 一九四二(昭和一七)年二月五日

必勝の信念 津田 賢 (一)

風の中に立つ 磯 含雄 (二)

増長すべきは信念なり 旭野 正信 (三)

編輯後記 (四)

▼第四〇八号 一九四二(昭和一七)年三月五日

生活五訓に就て 河崎 顯了 (一)

婦人と時局―真実に耳を傾けて― 寺西 惠然 (二)

編輯後記 (三)

▼第四〇九号 一九四二(昭和一七)年四月五日

女の力 蜂屋賢喜代 (一)

雑草の記 足利 信子 (二)

編輯後記 (三)

▼第四一〇号 一九四二(昭和一七)年五月五日

軍国の母と宗教信念 竹中 慧照 (一)

世間のことと仏法のこと 柏原 祐義 (二)

編輯後記 (三)

▼第四一一号 一九四二(昭和一七)年六月五日

日本女性 蜂屋賢喜代 (一)

落場を知らぬ 柏原 祐義 (二)

編輯後記 (三)

▼第四一二号 一九四二(昭和一七)年七月五日

水火を踏む 名畑 應順 (一)

女性領域 千葉 俊教 (二)

慰問文庫資金寄附者芳名 (三)

編輯後記 (四)

▼第四一三号 一九四二(昭和一七)年八月五日

物忌から『聞』の世界へ 寺西 惠然 (一)

女なるまゝに 温科 諦聴 (二)

編輯後記 (三)

▼第四一四号 一九四二(昭和一七)年九月五日

まゐらせ心わろし 柏原 祐義 (一)

無一物底の念仏	春日 禮智	(四)
慰問文庫資金寄附者芳名		(七)
編輯後記		(八)
▼第四一五号 一九四二(昭和一七年)一〇月五日		
戦時下の生活(上)	河崎 顯了	(二)
窓 前	毛利 佐登	(五)
慰問文庫資金寄附芳名表		(六)
編輯後記		(八)
▼第四一六号 一九四二(昭和一七年)一月五日		
戦時下の生活(下)	河崎 顯了	(二)
もったいない	藤原 正圓	(四)
御訓示		(七)
編輯後記		(八)
▼第四一七号 一九四二(昭和一七年)二月五日		
物を大切にする心持を培ふ	竹中 慧照	(二)
家庭平和と男性の活動	松本 興仁	(四)
本部通信		(七)
編輯後記		(八)
◆第四一八号◆ 欠本		
▼第四一九号 一九四三(昭和一八年)二月五日		
仏を信ずる国民	香春 建一	(二)
福 田	寺本 了昌	(四)
役員任命		(六)
編輯後記		(六)
▼第四二〇号 一九四三(昭和一八年)三月五日		
護らるゝ者	太田 力	(二)
本部通信		(四)
役員任命		(四)
編輯後記		(四)
▼第四二一号 一九四三(昭和一八年)四月五日		
草野に拾ふ	名畑 應順	(二)
本部通信		(四)
役員任命		(四)
編輯後記		(四)
▼第四二三号 一九四三(昭和一八年)五月五日		
決戦生活御訓示を拝して	河崎 顯了	(二)
本部通信		(四)
有功章拝受者氏名		(四)
編輯後記		(四)
▼第四二三号 一九四三(昭和一八年)六月五日		
すがたなき仏	香春 建一	(二)
▼第四二四号 一九四三(昭和一八年)七月五日		
アツツ島の勇士に答へよ	竹中 慧照	(二)
役員任命		(四)
編輯後記		(四)
▼第四二五号 一九四三(昭和一八年)八月五日		
真実に生きる	藤島 達朗	(二)
編輯後記		(四)
▼第四二六号 一九四三(昭和一八年)九月五日		
大楠公の宗教心(第一講)	河崎 顯了	(二)
本部通信		(四)
有功章拝受者氏名		(四)
編輯後記		(四)
▼第四二七号 一九四三(昭和一八年)一〇月五日		
大楠公の宗教心(第二講)	河崎 顯了	(二)
役員任命		(四)
編輯後記		(四)
▼第四二八号 一九四三(昭和一八年)十一月五日		
大楠公の宗教心(第三講)	河崎 顯了	(二)
参院震災慰問寄附芳名		(四)
編輯後記		(四)
◆第四二九号◆ 欠本		
▼第四三〇号 一九四四(昭和一九年)三月三〇日		
忍終不悔	名畑 應順	(二)